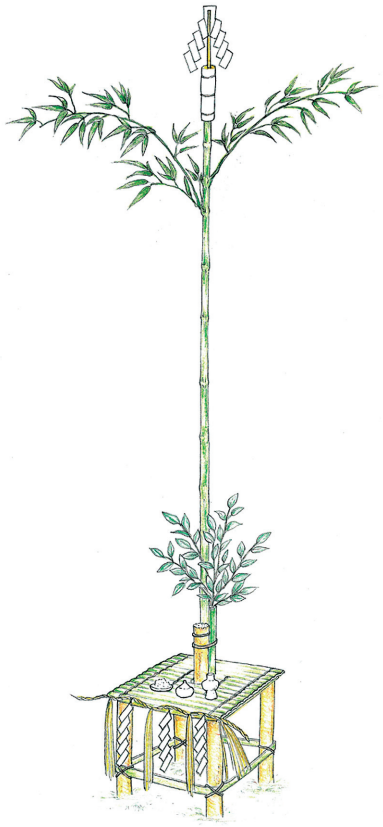
多可町文化財報告23
文化遺産を活かした地域活性化事業



多可町の年中行事Ⅰ

2014年3月
兵庫県多可町文化遺産活性化実行委員会

多可町の年中行事Ⅰ



2014年（平成26年）３月

兵庫県多可町文化遺産活性化実行委員会

例　　言

1　本書は文化芸術振興費補助金（文化遺産を活かした地域活性化事業）により、文化遺産の記録・調査研究事業の一環として実施された年中行事調査報告書である。

2　調査は、多可町伝統文化調査委員会の小栗栖健治（兵庫県歴史博物館館長補佐）、埴岡真弓（播磨学研究所研究員）、宮崎和明（多可郡歴史街道推進協議会会長）、本林靖久（大阪大学非常勤講師）、及び宮原文隆、小東憲朗、早崎喜代美、松田優子、安平勝利、安平千恵美、吉田衣里が実施した。

3　オトウに関する標記について

1）各村のオトウの名称について

各村において「当・祷・頭・党」の文字が充てられている。本報告書における村内の年中行事の説明の際には、村で現在使用されている文字を使用した。しかしながら一般的なオトウの表現やいくつかの村でのオトウを示す場合には、混乱を避けるため「オトウ」と記す。また、「当」の旧字体の「當」は、「当」に統一する。

2）「お当事箱」について

各村ごとに呼び方は「おとうじょうさん・おとぼりさん・おとうじょう箱・神さん」等があるが、各村の呼び方は「多可町の村ごとのオトウ調査表」に譲り、文中では「お当事箱」に統一する。

3）「ゆうだすき」について

オトウ人が首からさげる紐状のたすきを「結たすき・木綿たすき・由布たすき・湯襷」等の当て字があるが、「ゆうだすき」に統一する。

4　神社の記載について

1）「オオトシ神社」は、「大歳神社」若しくは「大年神社」と標記される場合があるが、一部例外を除き、本報告書では「大歳神社」に統一する。

5　調査年については、原則西暦年号で記している。

6　本書を作成するに際して、下記の文献を参照した。

・『兵庫県神社誌　中巻』兵庫県神職会　1938
・『多可郡誌』1923
・『杉原谷村村落誌』藤賀與一　1950
・『中町誌』中町　1954
・『加美村誕生誌　松井庄部落誌』藤賀与一　松本勝次郎　1959
・『中町史』中町　1991
・『八千代町史』多可町　2007

7　第Ⅵ章のオトウ文書の資料番号は、那珂ふれあい館で作成した台帳の番号を記載している。このため、本報告に掲載していない分については、欠番となっている。

8　本書は、第Ⅴ章の久下正史氏（灘中学校・灘高等学校教諭）の玉稿を加え、小栗栖、埴岡、早崎、本林、宮原が執筆し、宮原が編集を行った。なお、資料の翻字は、埴岡の協力を得て、早崎と宮原が行った。

9　本報告に係る写真等の関係資料は、兵庫県多可郡多可町中区東山 539-3　那珂ふれあい館にて保管している。

本　文　目　次

例　言

Ⅰ　はじめに…… 7
　１．地理的環境
　２．歴史的環境

Ⅱ　多可町の村ごとの年中行事とオトウ
　１．多可町の村ごとの年中行事調査表…… 8
　２．多可町の村ごとのオトウ調査表……14

Ⅲ　オトウと地域社会……20
　１．多可町とオトウ
　２．オトウを受け継ぐ
　３．神社と氏子域
　４．オトウの歴史
　５．歴史・文化伝承

Ⅳ　多可町の年中行事
　正月～春の行事……24
①下三原　雨散散　　②鍛冶屋　スズメノモンとお当渡し
③山野部　御幣切り･年越し参り･初参り　　④天田　ハナフリ神事
⑤大屋　お当渡しと鍵渡し　　⑥横屋　冬祈祷とお当渡し
⑦八千代区坂本　冬祈祷とお祷渡し　　⑧清水　戎祭りとオトウ渡し
⑨天田　薬師当とお当渡し　　⑩上三原　十四日祷
⑪高岸　大歳神社のお頭渡し　　⑫間子　きつね追い
⑬丹治　文殊祭り　　⑭杉原　厄神祭
⑮牧野　厄神祭とお当渡し　　⑯熊野部　すべ切りとお当渡し
⑰門村　亥祭り　　⑱中村町　薬師祭り
⑲東山　永代経　　⑳箸荷　百々手祭りとお当渡し
㉑西安田　当勝祭り
　【アラカルト１】　トウヤの「オハケ」
　春～夏の行事……54
㉒森本　初午当、春祭りとお当渡し　　㉓曽我井　初午当とお当渡し
㉔安坂　初午祭と初午当　　㉕中野間　オトウ渡し
㉖東安田　武嶋山柴燈護摩供　　㉗寺内　地蔵堂のお当渡し
㉘奥豊部　永代経　　㉙多田　春祭り
㉚的場　天目一神社祭り　　㉛田野口　名越神社のお当渡し
㉜岸上　秋葉神社祭り　　㉝棚釜　広峰神社のお当渡し
㉞徳畑　天神社の春祭り　　㉟西脇　お日待ち
㊱山口　慈眼寺の花祭り　　㊲下村　夏祈祷
㊳奥中　虫送り　　㊴茂利　祇園祭り
㊵鳥羽　湯立て祭り　　㊶大袋　だいじゅんさん
㊷間子　川下祭り　　㊸轟　川裾祭り
　【アラカルト２】　オトウ人と「注連飾り」
　盆の行事……78
㊹門田　どうさん　　㊺俵田　弥勒堂の数珠繰り
㊻豊部　数珠繰り　　㊼中安田　観音堂の数珠繰り
㊽赤坂　観音堂の数珠繰り　　㊾箸荷　火祭り
㊿柳山寺　ぽっぽこねんじゃ
　【アラカルト３】　緋色の幟
　秋～冬の行事……88
(51)門前　八幡神社のお祷渡し　　(52)仕出原　薬師堂の数珠繰り
(53)奥荒田　八朔祭り　　(54)観音寺　秋祭りとお当渡し
(55)山野部　秋祭り　　(56)三谷　秋祭りとお当渡し
(57)熊野部　秋祭り　　(58)安楽田　秋祭り
(59)岩座神　秋祭りとお当渡し　　(60)轟　河上神社の秋祭り
(61)中野間・下野間　貴船神社の秋祭り　　(62)的場　荒田神社の秋祭り
(63)糀屋　稲荷神社の秋祭り　　(64)中安田　安田郷稲荷神社秋祭り
(65)西山　秋祭りとお当渡し　　(66)市原　秋祭りとお当渡し
(67)山寄上　秋祭りとお祷渡し　　(68)中三原　秋祭り
(69)奥中　よいよいばと権現祭り　　(70)中村　妙見祭り
(71)中区坂本　にじゅうそう
　【アラカルト４】年中行事での食
　その他の行事……123
(72)加美区の天道花　　(73)菖蒲の節句祭り
(74)天田の数珠繰り　　(75)天船の雨乞い踊り

Ⅴ．西谷勝也氏がみた多可町の年中行事について……126
Ⅶ．おわりに……131

Ⅵ．オトウ関係資料
　①山野部お当事箱内文書……141
　②曽我井お当事箱内文書……135
　③八千代区坂本お当事箱内文書……133

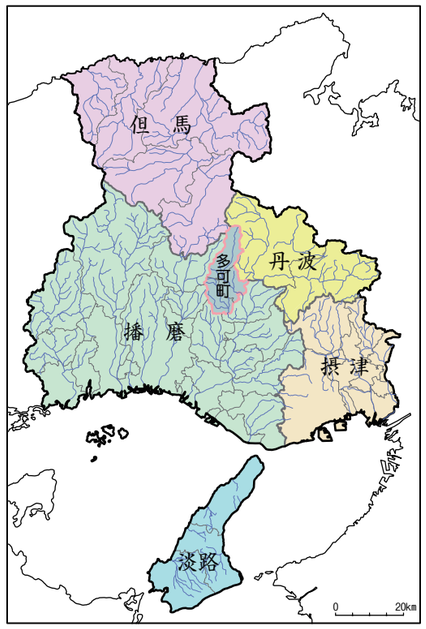
Ⅰ　はじめに

1．地理的環境

多可町は、多可郡内の中町、加美町、八千代町が合併して平成17年11月1日に誕生した新しい町である。兵庫県のほぼ中央で、北播磨地方の最北部に位置する。

多可町役場からは、南方の県庁所在地である神戸市まで直線距離で約50㎞、北方へは日本海側の海岸線（豊岡市）まで約70㎞を測る。町は東西約13㎞、南北約25㎞を測り南北に細長く、面積は185.15k㎡を保有し、平成26年２月における人口は22,689人である。

行政境は、北は朝来市・丹波市に、東は西脇市に、西は神崎郡神河町・市川町に、南は加西市に接している。



多可町位置図

全体が北高南低の地形で、北部は千ヶ峰をはじめとする標高900～1,000m級の峰から派生する山間部を加古川の支流である杉原川及び野間川が南流する。これらの河川によって、平野部は谷底平野を形成している。杉原川水系は中区・加美区、野間川水系は八千代区に該当する。気候は瀬戸内型に属するものの、冬季と夏季の気温格差がやや大きく、内陸的な様相を呈する。

主たる産業は山田錦を中心とする稲作農業、山間部の林業、播州織を中心とする繊維産業である。

杉原川中流域に位置する中区内の地理的景観を見ると、この杉原川の流れによって北部平野、中央平野、安田平野の３つの平野部に大きく区分できる。この中区の平野部をとりまく山塊は、北には標高692.6ｍの妙見山がそびえ、西側では山腹が緩斜面であるのに対して、東側・南側では急斜面が続いている。

杉原川上流域に位置する加美区は、区域の約85％を山間部が占めており、杉原川によって形成された小規模な谷底平野が存在している。西側の山塊では、標高1005.2ｍの千ヶ峰から八千代区の標高939.4ｍの笠形山まで、南北方向に北播磨の最高峰が連なっている。

野間川流域に位置する八千代区も、大和川を含めた河川によって小規模の谷底平野が形成されている。この平野部にいくつもの支谷が取りつき、麓屑面や扇状地が形成される。平野を取りまく山塊は、西側に加美区から繋がる千ヶ峰から続く笠形山の急峻な尾根が連なるが、東側では低位で比較的緩やかである。

2．歴史的環境

当町の歴史的な概要を見てみると、古代の『播磨国風土記』において、多可町は、「託賀郡（多可郡）」であり、里では「賀眉里」が中区と加美区、「法太里」が八千代区に比定されている。古代における多可郡西部が、現在の多可町に該当する。

その後古代末～中世になると、安田庄（中区・八千代区）、松井庄（中区北西部及び加美区南部）、杉原庄（加美区北部）の庄園が成立する。杉原庄では少なくとも平安時代後期の文献で確認できる「杉原紙」が有名で、中世には播磨土産として御所等に献上されていた。また、当地域は生野鉱山から続く鉱床で、銅を産出した。これらの鉱山の開発は中世後期にさかのぼり、近世期に繁栄を極めた。

近世においては、町内の多くの村が天領で、明治の文明開化を迎えた。

Ⅱ　多可町の村ごとの年中行事とオトウ

1．多可町の村ごとの年中行事調査表　　中区

	1月	2月	3月	4月	5月	6月		7月	8月	9月	10月	11月	12月	
門前	厄神祭（八幡神社）	節分（八幡神社）							地蔵盆・数珠繰り（地蔵堂）	おしば入れ・㊶お祷渡し（八幡神社）	お日待ち（八幡神社）		年越し参り（八幡神社）	門前
安楽田	とんど（安楽田児童公園）							だいじゅんさん（豊受大神）、天神祭（天満神社）		お当渡し（荒田神社）	㊽秋祭（荒田神社）		年越し参り（荒田神社）	安楽田
東山		⑲永代経（正福寺）									秋祭（大歳神社）		報恩講・年越し参り（正福寺）	東山
田野口	初参り（名越神社･清水寺･瑞光寺）、とんど（いやしの森）	初午（名越神社内）		㉛お当渡し（名越神社）				祇園祭（名越神社）			秋祭（名越神社）			田野口
牧野	⑮厄神祭・お当渡し（八幡神社）、とんど（八幡神社境内）	神さん正月（八幡神社）、初午（稲荷神社）							地蔵盆（地蔵堂）	砂入れ（八幡神社）			年越し参り（八幡神社）	牧野
鍛冶屋	②お当渡し（大歳金刀比羅神社、於公民館）、注連縄ない（公民館）、とんどときつね狩り・初金比羅・寒参り（大歳金刀比羅神社）	神さん正月・初午（大歳金刀比羅神社）						夏祭（大歳金刀比羅神社）	数珠繰り（大日堂）		節句祭・子供相撲（大歳金刀比羅神社）	金比羅祭り（大歳金刀比羅神社）	おさめ金比羅（大歳金刀比羅神社）、②スズメノモン（公民館・大歳金刀比羅神社）	鍛冶屋
間子	初参り（加都良神社・恵比寿神社）、十日戎・お当渡し（恵比寿神社）、おはけたて（当人宅）、⑫とんど・ごーかれ・きつね追い（加都良神社）	初午（恵比寿神社内）						㊷川下祭（加都良神社）			秋祭（加都良神社）		高田市（恵比寿神社）	間子
岸上	初参り（加都良神社）、お当渡し（加都良神社、於公民館）、とんど（村グラウンド）	お許し神社祭（お許し神社）、立春祭（加都良・秋葉・お許し・祇園神社）、初午（加都良神社内）	阿弥陀堂祭（阿弥陀堂）	㉜秋葉・諏訪神社祭（秋葉神社）		小埜三社祭（加都良神社内）		祇園祭（祇園神社）		神明祭（加都良神社内）	若宮祭・秋祭（加都良神社）			岸上
天田	④ハナフリ（加都良神社内八柱神社）、⑨薬師当（量興寺）、⑨お当渡し（加都良神社、於公民館）、きつねがり							大般若（量興寺）	秋葉さん（秋葉神社）		秋祭（加都良神社）			天田
高岸	⑪お当渡し（大歳神社）	初午（大歳神社）	永代経（浄福寺）								秋祭（大歳神社）	報恩講（浄福寺）		高岸
奥中	お当渡し（熊野・大歳神社、於公民館）、門松納め（熊野・大歳・大姫山天神社）、薬師講（薬師堂）	神さん正月（熊野・大歳・大姫山天神社）		【桃の節句祭（熊野・大歳・大姫山天神社）】、春祭（徳畑の天神社、熊野・大歳・大姫山天神社）	堀越普請（徳畑の副ダム上の水口）	さのぼり（触れのみ）、【端午の節句祭（熊野・大歳・大姫山天神社）】		㊳虫送り、村祈祷（熊野神社）	西庄地区の地蔵盆・数珠繰り（宝楽会館）	お日待ち（熊野神社）、阿弥陀講（阿弥陀堂）	【幟立て（熊野、大歳神社）】【重陽の節句祭（熊野・大歳・大姫山天神社）】	㊾権現祭・よいよいば（熊野神社）	門松立て（熊野・大歳・大姫山天神社）	奥中
徳畑				㉞春祭（天神社）										徳畑
茂利	お当渡し（大歳・祇園神社、於公民館）、とんど（防災広場）			春祭（大歳・徳畑の天神社）				㊴祇園祭（祇園神社）	数珠繰り（観音堂）	大歳神社祭（大歳神社）			庭火焚き（大歳神社）	茂利
中村町	戎神社祭・とんど（祇園神社）	初午（祇園神社内）、⑱薬師堂祭（善福寺）		春祭（徳畑の天神社）				祇園神社夏祭（祇園神社）	地蔵盆・数珠繰り（いっぷく地蔵）		だいじゅんさん			中村町
安坂	山の神祭（龍玄坂）、とんど（公民館）		㉔初午当（糀屋の稲荷神社、於公民館）					祇園祭（八坂神社）	地蔵盆･数珠繰り（地蔵さん）		秋祭（糀屋の稲荷神社）			安坂
糀屋			初午当（稲荷神社、於公民館）					祇園祭（祇園神社）	お大師さん・数珠繰り（地蔵堂）、大日堂祭り（大日堂）	八幡祭（八幡神社）	㊸秋祭（稲荷神社）、二十三夜（公民館）			糀屋
坂本	厄神祭（八幡神社）		初午当（八幡･糀屋の稲荷神社、於公民館）					お日待ち（八幡神社）		八幡祭（八幡神社）	秋祭（糀屋の稲荷神社）		㉑にじゅうそう（二社神社）	坂本
曽我井		神さん正月（大歳神社）	㉓初午当・春祭り（大歳神社）					祇園祭（祇園神社）		八幡祭（大歳神社内）	秋祭（大歳・糀屋の稲荷神社）		門松立て（大歳神社）	曽我井
森本	とんど（公民館）		㉒初午（大歳神社）	㉒春祭（大歳・日吉神社）、㉒お当渡し（大歳・日吉神社、於公民館）					精霊流し		秋祭（糀屋の稲荷神社）		年越し参り（大歳・日吉神社）	森本
西安田	二十日祷（大歳神社）、とんど（開墾記念碑前）	㉑当勝祭（当勝神社・大歳神社内当勝神社）						祇園祭・天満宮祭（大歳神社）	地蔵盆（3ヶ所の地蔵堂）		㊹秋祭・お祷渡し（中安田の稲荷・大歳神社、於公民館）		年越し参り（大歳神社）	西安田
中安田	二十日祷・３人祷お祷渡し（日向神社、於公民館）			春祭（日向神社）	奥池水落神事（法幢寺祈祷）			奥池の神事（法幢寺祈祷）、祇園祭（公民館）	地蔵盆お接待・㊼数珠繰り（観音堂）	お日待ち（稲荷神社）	㊹秋祭・７人祷祷渡し（稲荷神社、於公民館）		年越し参り	中安田
東安田	厄神祭（安田神社）、とんど（児童公園）		㉖柴燈護摩供（武嶋山）	春祭（安田神社）					お日待ち（公民館）、地蔵盆（１、２組のみ）		㊹秋祭・お祷渡し（中安田の稲荷・安田神社、於公民館）		門松立て（安田神社）	東安田
	1月	2月	3月	4月	5月	6月		7月	8月	9月	10月	11月	12月	

・【　】は、聞き取り調査時には行われていたが、平成 26 年１月現在消滅している行事である。
・オトウ渡しの（　）内は、対象社寺及びオトウ渡し場所である。

多可町の村ごとの年中行事調査表　　加美区

	1月	2月	3月	4月	5月	6月		7月	8月	9月	10月	11月	12月	
山寄上	初参り（青玉神社・雲門寺）、 とんど（集会場グラウンド）	神さん正月（青玉神社）				【さなぶり祭 （公民館）】				北辰神社祭 （青玉神社）	㊼ 秋祭・お祷渡し （青玉神社）		門松立て（青玉神社）	山寄上
鳥羽	初参り（青玉神社・雲門寺）				花祭（観音堂）			㊵ 湯立祭（青玉神社）			お当渡し（青玉神社）		門松立て（青玉神社）	鳥羽
清水	⑧ 戎祭・オトウ渡し（西宮神社）	初午（奥庄稲荷神社）	【薬師講】						役行者祭（役行者）、奥山地 蔵祭（奥山地蔵・いぼ薬師）	【薬師講】	秋祭（西宮神社）			清水
轟	とんど（グラウンド）		お祷渡し（河上神社）、 数珠繰り（虚空蔵堂）		花祭（虚空蔵堂）			㊸ 川裾祭（河上神社）	数珠繰り（虚空蔵堂）		㊿ 秋祭（河上神社）		お当番交代（虚空蔵堂）	轟
山口	初参り（河上神社・雲門寺・広峰 神社・稲荷神社）、とんど（広場）			お当渡し（広峰・河上神社）、 お接待・数珠くり（慈眼寺）	㊻ 花祭 （慈眼寺）				お当渡し（愛宕神社）		秋祭（轟の河上神社）		門松立て （広峰・稲荷神社）	山口
西山	初参り（河上神社、雲門寺）、 とんど（公民館）			観音堂のお接待（観音堂）					千日講当番交替・観音堂 祭（観音堂）		秋祭（轟の河上神社）・ ㊺ お当渡し（金毘羅神社）		お当渡し （轟の河上神社）	西山
市原	とんど（神社前）					さなぶり役員会 （区長・役員）			愛宕祭・お当渡し（愛宕神 社）、地蔵祭（長寿庵）		㊻ 秋祭・お当渡し （熊野神社）	亥の子役員会 （区長・役員）	門松立て・年越し参り （熊野神社）	市原
丹治	⑬ 文殊祭り（文殊堂）	神さん正月（大歳神社）		地蔵さん御接待（広田地区）				お日待ち（文殊堂）	地蔵盆・【数珠繰り】 （広田地区）	お日待ち （大歳神社）	秋祭・お当渡し（大歳神社）		門松立て・年越し参り （大歳神社）	丹治
大袋	戎祭（大歳神社）、お当渡し（観 音堂）、とんど（川東）							㊶ だいじゅんさん （大歳神社）			秋祭・お当渡し（鎌足・大 歳神社、於鎌足神社）		門松立て（鎌足・大歳神社）	大袋
三谷	大日堂の祭（大日堂）	神さん正月（大歳神社）									㊻ 秋祭・お当渡し （大歳神社）		年越し参り（大歳神社）	三谷
箸荷	とんど（三ヶ所で）	⑳ 百々手祭・お当渡し （大歳神社）						川裾祭（川裾神社）	㊾ 火祭・お当渡し（地蔵堂・ 愛宕神社）		秋祭・お当渡し（大歳神社）	権現当のお当 渡し（観音堂）	年越し参り（大歳神社）	箸荷
門村	【七草がゆ・小正月】とんど（グ ラウンド）、厄神祭（厳島神社）	神さん正月・ ⑰ 亥祭り（厳島神社）		【ひな祭（厳島神社）】		【端午の節句 （厳島神社）】			地蔵盆（浄居寺）		秋祭・お当渡し（厳島神社）			門村
杉原	初参り、⑭ 厄神祭（八幡神社） とんど（グラウンド）	神さん正月（八幡神社）	永代経（西教寺）							報恩講 （西教寺）	秋祭・お当渡し（八幡神社）		門松立て（八幡神社）	杉原
奥豊部	とんど（グラウンド）		㉘ 永代経（浄照寺）			さなぶり祭 （公民館）					秋祭（大歳神社）、 報恩講（浄照寺）		門松立て（大歳神社）	奥豊部
観音寺	初参り（大歳神社） とんど（村公園）								地蔵盆・数珠繰り（公民館）		㊹ 秋祭・お当渡し （大歳神社）			観音寺
豊部	とんど（極楽寺北）	神さん正月・厄払い （五社神社）、初午（稲 荷神社）		金比羅祭（金毘羅神社）、 秋葉さん（秋葉神社）				大神宮祭（五社神社）	㊻ 数珠繰り（十王堂・御領 の地蔵・久保ヶ谷の地蔵・ 森内観音堂・下谷の地蔵）		秋祭・お当渡し（五社神社）		門松立て・年越し参り （五社神社）	豊部
熊野部	初参り（阿弥陀寺）、 ⑯ すべ切り（公民館・稲荷神社）	⑯ お当渡し・初午 （稲荷神社）						夏梅太郎衛門祭り （稲荷神社前）			㊼ 秋祭（稲荷神社）		大祓・門松立て・年越し参 り（稲荷神社）	熊野部
岩座神	初参り（五霊・広峰神社、神光 寺）、二十三夜（五霊神社）	神さん正月（五霊神社）	彼岸会（神光寺）	広峰神社祭（広峰神社）	二十三夜 （五霊神社）			夏祭・湯立て神事 （五霊神社）	お般若（神光寺）	彼岸会 （神光寺）	㊾ 秋祭・お当渡し・二十三 夜（五霊神社）	亥の子祭 （五霊神社内）	神帰り・門松立て （五霊神社）	岩座神
棚釜	二十日当・お当渡し（大歳神社）			㉝ お当渡し（広峰神社）、阿 弥陀堂のお接待（阿弥陀堂）				祇園祭（大歳神社）	当番交代・お接待 （阿弥陀堂）		秋祭・お当渡し （多田の春日神社）		門松立て （大歳・広峰神社）	棚釜
多田	とんど（公民館広場）	神さん正月（春日神社）	㉙ 春祭（春日神社）、 ㉙ 秋葉神社祭（秋葉神社）					夏祭（春日神社）	地蔵盆・数珠繰り大般若会 （諦願寺）		秋祭・お当渡し・神の出雲 行き（春日神社）	神帰り （春日神社）	年越し参り（春日神社）	多田
奥荒田	とんど（村グラウンド）			田中地蔵お接待					地蔵盆（花咲地蔵）、 田中地蔵お接待		㊸ 八朔祭り（若宮神社）、 秋祭（的場の荒田神社）		門松立て（若宮神社）	奥荒田
的場	戎祭（戎神社）	初午（稲荷神社）		㉚ めひとつさん （天目一神社）					地蔵盆・数珠繰り （下組大師堂）		㊷ 秋祭（荒田神社）			的場
寺内	とんど（村グラウンド）、 山の神参り（山の神）	初午（稲荷神社）	㉗ 地蔵堂お当渡し （地蔵堂）	金比羅祭（金比羅神社）				川裾神社祭（川裾神社）	地蔵盆（本村の地蔵）、 数珠繰り（西向き地蔵）	山の神祭り （山の神）	秋祭（的場の荒田神社）			寺内
西脇	お当渡し（大歳神社）、 とんど（大歳神社）	神さん正月（大歳神社）		節句祭（大歳神社）	㉟ お日待ち （公会堂）			【涼み講（公会堂）】		お日待ち （公会堂）	馬場揃え・秋祭 （的場の荒田神社）		注連縄作り（当人宅）、門松 立て・年越し参り（大歳神社）	西脇
山野部	③ 初参り・綱打ち（大歳神社）、 とんど（神社前グラウンド）	節分会、 初午（大歳神社）	お当渡し（大歳神社）	ひな祭（大歳神社）	花祭（常楽寺）	端午の節句 （大歳神社）		夏祭・夏祈祷 （大歳神社）	数珠繰り（常楽寺）	村祈祷 （大歳神社）	㉟ 秋祭（大歳神社）		③ 御幣切り（頭人宅）、越年 祭・年越し参り（大歳神社）	山野部
	1月	2月	3月	4月	5月	6月		7月	8月	9月	10月	11月	12月	

・【　】は、聞き取り調査時には行われていたが、平成 26 年 1 月現在消滅している行事である。
・オトウ渡しの（　）内は、対象社寺及びオトウ渡し場所である。

多可町の村ごとの年中行事調査表　　八千代区

	1月	2月	3月	4月	5月	6月		7月	8月	9月	10月	11月	12月	
大屋	⑤ お当鍵渡し（鹿子神社・薬師堂）、秋葉神社祭り（鹿子神社内）、とんど（各組）	節分（鹿子神社・薬師堂）、初午・お日待ち（稲荷・鹿子神社）	彼岸会（薬師堂）	節句祭（鹿子神社・薬師堂）	灌仏会（薬師堂）	節句祭（鹿子神社・薬師堂）、野休み（鹿子神社）		夏祭（鹿子神社・薬師堂）	観音さん・数珠繰り（薬師堂）、愛宕神社祭（鹿子神社内）	彼岸会（薬師堂）	秋祭（鹿子神社）		門松立て・年越し参り（鹿子神社・薬師堂）	大屋
坂本	⑦ 冬祈祷･お祓渡し（若宮・当勝神社、薬師・地蔵・大師、於公民館）、とんど（野間川河原）							夏祈祷（公民館）	地蔵盆数珠繰り（公民館）		秋祭（中村の貴船神社・若宮神社）、お当渡し（中村の貴船神社）		門松立て・年越し参り（若宮神社）	坂本
中村	冬祈祷・お当渡し（あきお・権現・妙見、 於住民センター）、とんど（河原）							夏祈祷（公会堂）、あきおさん（貴船神社内）	堂の念仏数珠繰り（薬師堂）	堂の念仏数珠繰り（薬師堂）	秋祭・お当渡し（貴船神社）	権現さん（貴船神社内）	⑳ 妙見さん祭（妙見堂）、門松立て・年越し参り（貴船神社）	中村
横屋	⑥ 冬祈祷・お当渡し（稲荷神社、於公民館）、とんど（大歳神社北）		初午（稲荷神社）					夏祈祷（公民館）			秋祭（中村の貴船神社・大歳神社）、お当渡し（中村の貴船神社）			横屋
下村	冬祈祷・お当渡し（金比羅神社、於公民館）、とんど（愛宕橋）			金比羅神社祭（金比羅神社）				㊲ 夏祈祷（公民館）			秋祭・お当渡し（中村の貴船神社）	霜月祭（金比羅神社）	門松立て・年越し参り（金比羅神社）	下村
門田	お祓渡し（神明神社・お堂、於公民館）、とんど（下水処理場北空き地）		初午（稲荷神社）						【夏祭（神明神社）】、㊹ どうさん（阿弥陀堂）		秋祭（神明神社）		霜月祭・門松立て・年越し参り（神明神社）	門田
赤坂	オトウ渡し（稲荷神社、於公民館）		初午（稲荷神社）			お日待ち（伊勢大神宮）			㊽ 数珠繰り（観音堂）、地蔵盆（地蔵堂）・愛宕さんの神事（愛宕神社）		秋祭（伊勢大神宮）			赤坂
俵田	二十三夜・トンド・きつねがえり（伊勢大神宮）	神さん正月（伊勢大神宮）	初午（伊勢大神宮内稲荷）	節句祭（伊勢大神宮）	二十三夜（伊勢大神宮）	節句祭（伊勢大神宮）		お日待ち（伊勢大神宮）	㊺ 数珠繰り（弥勒堂）	二十三夜（伊勢大神宮）	つきあい祭・二十三夜・出雲行き（伊勢大神宮）		神主交替・霜月祭・二十三夜（伊勢大神宮）	俵田
中野間	戎祭（戎神社）	厄神祭（八幡神社）	初午（火車神社）、㉕ オトウ渡し（大歳神社、於公民館）					かわっさはん（川下神社）	地蔵盆（花の宮地蔵）		㊶ 秋祭（貴船神社）、お当交替（貴船神社）			中野間
仕出原	戎祭（天満宮内戎神社）、秋葉祭（秋葉神社）		数珠繰り（薬師堂）、天満宮のお当交替（新当人宅）	天神祭（天満宮）					愛宕さん（愛宕神社）	天神祭（天満宮）、㊷ 数珠繰り（薬師堂）	秋祭、お当交替（中野間の貴船神社）	金毘羅祭（天満宮内金毘羅神社）	年越し参り（天満宮）	仕出原
下野間			初午（稲荷神社）	天神祭お当渡し（天満宮）、金比羅祭（金毘羅神社）				天神祭（天満宮）、祇園さん（薬師堂）	新宮さん（新宮神社）		㊶ 秋祭（両貴船神社）、お当交替（中野間の貴船神社）、オトウ渡し（下野間貴船神社）			下野間
下三原	① 雨散散・神主引き継ぎ（貴船神社）	神さん正月（貴船・稲荷神社）、初午（稲荷神社）		稲荷祭（稲荷神社）		端午の節句（貴船・稲荷神社）、田祭り（貴船神社）		祇園祭（貴船神社）、【夏祭り（稲荷神社）】	数珠繰り（公民館）	お日待ち（貴船神社）	秋祭（貴船神社）		年越し参り（貴船神社）	下三原
柳山寺		初午（大歳神社）						観音祭（楊柳寺）	㊿ ぽっぽこねんじゃ（愛宕神社）	お日待ち（大歳神社）、山の口大明神祭（山の口大明神）	秋祭（大歳神社）		門松立て（大歳神社）	柳山寺
中三原	十日戎（戎神社）							虫干し（大歳神社）		お日待ち（大歳神社）	㊽ 秋祭（大歳神社）		大歳火（大歳神社）、お党交替	中三原
上三原	⑩ 十四日祷・大日講（毘沙門堂）	星祭（毘沙門堂）		大般若会（毘沙門堂）	大日講（毘沙門堂）			川代祭（川代神社）、祇園祭（七社神社）	虫干し（毘沙門堂）	大日講・大般若会（毘沙門堂）	秋祭（中三原大歳神社）、二十三夜講（毘沙門堂）		年越し参り（毘沙門堂）	上三原
	1月	2月	3月	4月	5月	6月		7月	8月	9月	10月	11月	12月	

・【　】は、聞き取り調査時には行われていたが、平成 26 年 1 月現在消滅している行事である。
・オトウ渡しの（　）内は、対象社寺及びオトウ渡し場所である。

2．多可町の村ごとのオトウ調査表　　中区

	内　容	門前	安楽田	東山	田野口	牧野	鍛冶屋	間子	岸上	天田	高岸	奥中		徳畑	茂利	中村町	安坂	糀屋	坂本	曽我井	森本	西安田	中安田		東安田		内　容
1	オトウの字・トウニンの呼び方と人数	御祷、3人	お当、6人	無	お当、2人	お当 組割り（一組7～8人）	お当、2人	お当、2人	お当、8人	お当、1人	お頭、2人 （平成24年から）	お当、2人 （平成23年まで）	お当、9人 （平成24年1月から）	無	お当、5人	無	お当	お当	お当	お当	お当	お祷、5人	七人祷、7人	三人祷、3人	お祷6人	1	オトウの字・トウニンの呼び方と人数
2	オトウの決め方	順番	毎年くじ引き	－	くじ引き （12～13年に一度）	くじ引き （16年に一度）	平成23年から選出制	年齢順 （一代当）	帖口順（平成21年から）	年齢順 （一代当）	年齢順 （一代当）	年齢順 （一代当）	隣保から1人ずつお当委員を選出	－	隣保から1人ずつ	－	隣保当 （昭和45年から）	隣保当	隣保当 （平成4年から）	隣保当 （昭和46年から）	隣保当 （昭和55年から）	順番	順番	順番	毎年くじ引き	2	オトウの決め方
3	お当事箱の有無・数・名称	名称不明⑤	無	－	おとうじょうさん②	お当状①	おとせ②	おとうじょう箱②	おとうじょう箱①掛け軸箱①	無	神さん①	おとうじょうはん②	おとうじょう箱①	－	お当事箱①	－	お当事箱②	おとうじょうはん①	お当収箱③	お当じゃ箱①	おとんじょさん②	お祷状箱⑤	お祷箱又はギョジ①	お祷箱又はギョジ・大歳祷箱①	お祷状箱①	3	お当事箱の有無・数・名称
4	オトウ対象の祭神仏	八幡神社	荒田神社	大歳神社	名越神社	八幡神社	大歳金刀比羅神社	恵比寿神社 加都良神社	加都良神社 秋葉・祇園・お許し神社	加都良神社	大歳神社	大歳神社 熊野神社	大歳神社 熊野神社 大姫山天神社	天神社	大歳神社 祇園神社 山の神	祇園神社	糀屋の稲荷神社	稲荷神社	糀屋の稲荷神社 八幡神社 二社神社	大歳神社	大歳神社 日吉神社	中安田の稲荷神社 大歳神社	稲荷神社	日向神社・観音堂	中安田の稲荷神社 安田神社	4	オトウ対象の祭神仏
5	オトウ渡しの場所	八幡神社	荒田神社	－	名越神社	八幡神社	公民館	恵比寿神社	公民館	公民館	大歳神社 社務所 集会所	公民館	公民館	－	公民館	－	公民館	公民館	公民館	大歳神社	公民館	公民館	公民館	公民館	公民館	5	オトウ渡しの場所
6	オトウ渡しの日時	9月 第二日曜日 午前8時	9月 第一日曜日 午前11時	－	4月 第二日曜日 午前8時	1月19日 前後（厄神祭）	1月1日 午前10時	1月 最終日曜日 午前11時	1月10日に近い 日曜日	1月10日 前後 午前11時 （薬師当）	1月20日 前後の 日曜日	1月15日 前の日曜日 午前10時	1月 第2日曜日 午前11時	－	1月の 日曜日 午前11時	－	3月第一の 午の日 （初午祭）	3月第一の 午の日 （初午祭）	3月第一の 午の日 （初午祭）	3月 第一日曜日 午後1時	4月 第三日曜日 午前10時 （春祭）	10月 第二日曜日 午前10時 （秋祭）	体育の日 の前々日 （秋祭宵宮）	1月20日 前の日曜日	10月 第二日曜日 午後1時 （秋祭）	6	オトウ渡しの日時
7	オトウ渡しの参加者	氏子 （戸主）	氏子 （戸主）	－	氏子 （戸主）	新旧当組・区長・副区長・宮係	氏子 （戸主）	新旧当人・宮総代・役員	氏子 （戸主）	氏子 （戸主）	新旧頭人・宮総代・区長・村役員	講衆	新旧当人・村三役、村什長は手伝い	－	氏子 （戸主）	－	氏子 （戸主）	氏子 （戸主）	氏子 （戸主）	新旧当番の隣保・役員	氏子 （戸主）	氏子 （戸主）	氏子 （戸主）	氏子 （戸主）	氏子 （戸主）	7	オトウ渡しの参加者
8	行列の有無	－	－	－	新当人と区長と役員は当元宅へ	－	有	－	－	－	お頭渡し出席者は新頭人宅へ	講衆全員が二手に分かれ新当人宅へ	新お当委員長宅へ	－	－	－	－	当番隣保のみで隣保長宅へ	－	－	－	－	有	－	お祷渡し後、お祷人が稲荷神社まで	8	行列の有無
9	特殊な供物	－	赤飯の つきぬき	－	－	－	－	－	－	白むしの つきぬき ゴウヅイ	－	－	－	－	－	－	－	－	赤飯の つきぬき	－	－	－	－	－	－	9	特殊な供物
10	謡曲の有無	－	－	－	平成初期まで有	－	有 （テープ）	－	有 （テープ）	－	－	－	－	－	有 （テープ）	－	有 （高砂）	有	有	有 （テープで、高砂）	－	有 （テープで、高砂・鶴亀・越天楽）	－	－	有 （高砂）	10	謡曲の有無
11	子ども関わりの有無	男の子3人鳥居と拝殿を往復（はだし参り）	－	－	－	－	－	－	－	七度半の使い男の子2人	－	－	－	－	－	－	酌人は男の子2人	－	－	－	－	－	－	－	－	11	子ども関わりの有無
12	おはけ・注連飾り（トウヤ）の有無・名称	－	－	－	－	－	村内に不幸があったとき玄関に注連飾り	おはけ有	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	お当隣保長宅の軒に注連飾り	－	－	－	－	－	12	おはけ・注連飾り（トウヤ）の有無・名称
13	ゆうだすき等神主の印の有無	本殿の鍵を首にかける	－	－	－	ゆうだすき有（鍵番が使用）	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	13	ゆうだすき等神主の印の有無
14	備　　考	味噌、米粉、線香を載せた膳で直会。9月第1日曜日に「おしばいれ」を行う。	赤飯とビリ辛こんにゃく2切れで直会。お当人代表を「鍵取り」という。	宮当番が神社の管理。	おとうじょうさんの中に現在不使用の「ゆうだすき」あり。お当人2人をそれぞれ当元・相当という。	昔は旧当元宅から新当元宅へ行列あり。	平成22年までは一代当が年齢順に廻っていた。				平成23年まで、お頭人は4人。	名前の付け替えあり。大歳神社で弓射神事あり。	大歳神社で弓射神事あり。おとうじょう箱はお当委員会の委員長宅で預かる。	郷社である天神社は奥中・徳畑・茂利・中村町で管理。	大歳神社で弓射神事あり。以前はお当人は2人で、太鼓をたたき、行列があった。	老人クラブが神社の管理をしている。	お当渡しの時、弓と的と「的の尺竹」を飾る。くじ引きは一升枡に白米を入れ箸3本立てる。盃事のとき男児が「おさかなこれに」という。	お当渡しの時、弓と的と「的の尺竹」を飾る。	お当渡しの時、弓と的と「的の尺竹」を飾る。以前は「花がら」を作っていた。	弓射神事有り。「花がら」を作り配る。お当渡しの時、背中に扇子をさす。昭和46年以前のお当人は3人で一代当。	3月の初午に大歳神社で弓射神事有り。昔は一代当で3月初午の日にお当渡しがあった。	宵宮に丑の刻参り。触れ太鼓で村中廻る。酌人2人は両親健在者に限る。爪楊枝を一品とし必ず膳に添える。お祷人の代表を祷元という。	お祷人の代表を祷元といい、お祷箱は稲荷神社で保管。	お祷箱は日向神社で保管。	お祷状箱は稲荷神社で保管。お祷人の代表を祷元という。	14	備　　考
	内　容	門前	安楽田	東山	田野口	牧野	鍛冶屋	間子	岸上	天田	高岸	奥中		徳畑	茂利	中村町	安坂	糀屋	坂本	曽我井	森本	西安田	中安田		東安田		内　容

・項目 2　「歩き」とは、村内の伝達事項や配り物を受け持つ者で、村人が順番に勤める。
・項目 3　お当事箱の丸囲み数字はお当事箱の数である。
・項目 13　ゆうだすきの丸囲み数字はゆうだすきの数である。

多可町の村ごとのオトウ調査表　　加美区

	内　容	山寄上	鳥羽	清水	轟		山口			西山		市原	丹治	大袋			三谷	箸荷			門村	杉原	奥豊部	観音寺	豊部	熊野部	岩座神	棚釜			内　容
1	オトウの字・トウニンの呼び方と人数	お祷、3人	お当、2人	おとう・宮当番、4人	お祷、2人	お当	お当、2人	お当、2人	お当、1人	おとうじょうさん、3人	お当、2人	お当、4人	お当、2人	お当家、2人	お当、2人		お当、2人	お当屋、2人		お当、7人（百々手祭のお当）	権現当、2人	お当家、2人	お当、3人	無	お当、2人	お祷、8人	お当、4人	お当、3人	お当、1人	お当、1人	お当、1人	1	オトウの字・トウニンの呼び方と人数
2	オトウの決め方	順番	年齢順（一代当で宮総代が選出）	くじ引き	行政順	隣保当	歩きの順	歩きの順	歩きの順	行政順	一代当	くじ引き	入構順	くじ引き	くじ引き		順番（一代当）	順番		順番	新しく所帯を持った家（一代当）	くじ引き（20年に一度一巡り分）	順番	－	順番	順番	年齢順	カギトは年齢順、他は家の順	順番	くじ引き（17年に一度、一巡り分）	順番	2	オトウの決め方
3	お当事箱の有無・数・名称	無	お当帳箱②	御神体箱④	お祷状箱①	無	神さん①	神さん①	神さん①	おとうじょうさん①	おとうじょう箱②	神さん④	お当箱②	お当状箱②	お当状箱②		お当状箱①	おとうじょうさん②		おとうじょうさん①	おとうじょうさん①	御神体①	お当箱①	－	御神体①	御神体④	おとぼさん又はおともりさん④	おとうじょう③	有	名称不明①	名称不明①	3	お当事箱の有無・数・名称
4	オトウ対象の祭神仏	青玉神社	青玉神社（大歳神社合祀）	西宮神社	河上神社	虚空蔵堂	広峰神社・稲荷神社	河上神社	愛宕神社	金比羅神社	河上神社	熊野神社（大歳神社・稲荷神社合祀）	大歳神社	鎌足神社大歳神社	観音堂		大歳神社	大歳神社・愛宕神社		大歳神社の百々手祭・川裾神社	観音堂（毘沙門堂）	厳島神社	八幡神社	大歳神社	大歳神社	五社神社	稲荷神社	五霊神社	春日神社	大歳神社	広峰神社	4	オトウ対象の祭神仏
5	オトウ渡しの場所	青玉神社	青玉神社	西宮神社	河上神社	虚空蔵堂	広峰神社	広峰神社	公民館	金比羅神社	河上神社	熊野神社	大歳神社	鎌足神社	観音堂		大歳神社	大歳神社	地蔵堂	大歳神社	観音堂（毘沙門堂）	厳島神社	八幡神社	－	大歳神社	五社神社	稲荷神社	五霊神社	春日神社	公会堂	広峰神社	5	オトウ渡しの場所
6	オトウ渡しの日時	10月 体育の日 午前8時半（秋祭）	10月 第二日曜 午前8時半（秋祭）	1月 成人の日 午前10時半（戎祭）	3月 午の日近くの日曜 午前7時	12月 第二日曜日	4月 第二か三日曜日	4月 第二か三日曜日	8月24日 午後8時	10月 第二日曜日午前7時（秋祭）	12月1日 午前6時30分	10月 第二日曜日 午前11時（秋祭）	10月 第二日曜日（秋祭）	10月 第二日曜日 午前9時（秋祭）	1月 第3日曜日午前11時		10月 第二日曜日午前10時（秋祭）	10月 第二日曜日（秋祭）	8月 第三日曜日（火祭）	2月11日（百々手祭）	11月中の日曜日	体育の日 午前10時（秋祭）	10月 第二日曜日 午前8時（秋祭）	－	10月 第二日曜日（秋祭）	10月 第二土曜日（秋祭の宵宮）	2月最初の日曜日（秋祭）	10月 第二日曜日 午前8時（秋祭）	10月 第二日曜日（多田と一緒に）（秋祭）	1月20日 午後6時（二十日当）	4月 第3日曜日（以前は4月18日）	6	オトウ渡しの日時
7	オトウ渡しの参加者	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	戸主		氏子（戸主）	氏子（戸主）	新旧当人・区長・当人の隣保	氏子（戸主）	新旧当人・区長・当人の隣保	氏子（戸主）	氏子（戸主）	－	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	－	氏子（戸主）	氏子（戸主か代理）	7	オトウ渡しの参加者
8	行列の有無	－	新当人宅へ	－	－	－	－	－	－	－	－	－	鳥居まで	新当家の隣保がそれぞれの当家宅へ	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	行列の有無
9	特殊な供物	もっそ（赤飯）	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	コメ粉の団子	－	－	－	－	－	－	大鏡餅	－	－	－	9	特殊な供物
10	謡曲の有無	有	有（テープで高砂）	有（テープで四海波・千秋楽）	－	－	－	－	－	有（テープ）	－	有	－	有（テープで難波）	－		有（難波）	－	－	－	－	有	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	謡曲の有無
11	子ども関わりの有無	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	11	子ども関わりの有無
12	おはけ・注連飾り（トウヤ）の有無・名称	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－	玄関に注連飾り	おはけ（おしばたて）	玄関に注連飾り	－	－	－	－	12	おはけ・注連飾り（トウヤ）の有無・名称
13	ゆうだすき等神主の印の有無	－	－	ゆうだすき④	ゆうだすき②	－	－	－	－	ゆうだすき③	ゆうだすき②	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	ゆうだすき①	－	－	－	13	ゆうだすき等神主の印の有無
14	備　考	お当事箱の代わりに「ことほし」と言う名の灯籠があり、「ことほし」は4ヶ月ごとにお祷人の家を廻る。お祷は長男が受ける。新宅すると新たに入祷する。	お当人2人はそれぞれ青玉神社・大歳神社のお当人である。お当渡しの朝お当人は裃ぎをする。お当人1人に手伝いお供1人2人つく。お当帳に新当人を記帳。必ず枝豆が膳にあり。	おとう渡しの時、御神体箱を立てて交換。新当番は付添人とともに、歩いて家へ御神体箱を持ち帰る。	お祷渡しの前にお祷人（過番・上番という）含む役員12人で弓射神事。お祷状箱は神社で保管。	お当渡しが行われた後、くじ引きがくじに当たった人は、2月3日に小野の神明神社へ伊勢のお札をもらいに行く。普段のお堂の世話は女性が担当。以前は若者2人による一代当。	広峰神社と河上神社のお当渡しは一緒に行う。区長が名前の帳付けをする。神さんの他に轜の入った箱あり。					熊野神社一番のお当人は「熊野神社本宮」、熊野二番は「熊野神社新宮」、大歳神社一番のお当人は「大歳神社」、大歳二番は「稲荷神社」で、それぞれの当事箱を持つ。	お当渡しの日、当人の家に轜を立てる。お当渡し時、米八合の入った3寸の中にお当箱を立てる。市原の大歳神社から分祀されたと伝えられている。	お当家は正当・相当といい、正当が鎌足神社、相当が大歳神社。盃交換のとき「おさかなこれに」という。	お当渡し時、浄居寺住職読経。		お当人2人はそれぞれ本当・相当という。区長が新当人の名前の帳づけを行う。事前に注連縄作りあり。	お当屋は本当・愛宕当といい、本当は大歳神社、愛宕当は愛宕神社のオトウ人である。火祭りのとき、愛宕神社の前で般若心経を唱える。		弓射神事あり。大歳神社のお当は別にあり、これは百々手祭のみのお当で、川裾祭も担当する。	以前は「毘沙門当」と呼んでいた。	お当渡し後、神楽舞いあり。	お当箱は3人のお当人が4ヶ月ごとに預かる。神社や祭りの世話は宮役が行い、お当人は宮役の補佐をする。	2人の宮役が1年間管理。	お当人2人はそれぞれ神主・青年宿という。お当渡し時、お当人は神前に向かい般若心経を唱え、赤ずいきの酢味噌和えは必ず供される。お当事箱は神社で保管。	お祷人は、正祷人4人、副祷人4人で構成される。以前、宵宮にお祷人の丑の刻参りあり。	お当人は大当2人、歩射当2人で構成される。弓射神事あり。大鏡餅を搗く「すべ切り」行事あり。	お当人は、カギト1人と他2人で構成され、カギトのみ、ゆうだすきを掛けて本殿に入れる。			神前で二拍一礼二拍一礼の後般若心経を唱える。子ども達にお菓子を配る。	14	備　考
	内　容	山寄上	鳥羽	清水	轟		山口			西山		市原	丹治	大袋			三谷	箸荷			門村	杉原	奥豊部	観音寺	豊部	熊野部	岩座神	棚釜			内　容

・項目 2　「歩き」とは、村内の伝達事項や配り物を受け持つ者で、村人が順番に勤める。
・項目 3　お当事箱の丸囲み数字はお当事箱の数である。
・項目 13　ゆうだすきの丸囲み数字はゆうだすきの数である。

多可町の村ごとのオトウ調査表　　加美区

	内容	多田	奥荒田	的場	寺内	西脇	山野部
1	オトウの字・トウニンの呼び方と人数	お祷・おとうやさん、5人	無	無	地蔵当、5~6人	お当、3人	お頭、1人
2	オトウの決め方	順番	－	－	順番	年齢順（一代当）	年齢順（一代当）・連中はくじ引き
3	お当事箱の有無・数・名称	かみさん①	－	－	おとぼりさん①	かみさん又は御霊代①	おとうじょう箱①
4	オトウ対象の祭神仏	春日神社・秋葉神社・妙見さん（山の神）	若宮神社	荒田神社	地蔵堂	大歳神社	大歳神社
5	オトウ渡しの場所	春日神社	－	－	地蔵堂前	大歳神社	大歳神社
6	オトウ渡しの日時	10月第二日曜日午前10時（秋祭）	－	－	3月総会の日	1月成人の日近くの日曜日	3月最終日曜日午後1時
7	オトウ渡しの参加者	氏子（戸主）	－	－	新旧当人	氏子（戸主）	氏子（戸主）
8	行列の有無	－	－	－	－	－	有
9	特殊な供物	－	－	－	－	－	つきぬき
10	謡曲の有無	有（テープ）	－	－	－	－	－
11	子ども関わりの有無	－	－	－	－	－	－
12	おはけ・注連飾り（トウヤ）の有無・名称	－	－	－	－	－	おはけ
13	ゆうだすき等神主の印の有無	－	－	－	－	－	－
14	備　考	お祷人の内、第一番目の家が神主となる。お祷人は白い装束を略礼服の上につける。お祷渡し時、一升入り大盃が廻る。厄年の人やお祷人が供えた餅や菓子をまく。	宮総代が神社の管理。	郷社である荒田神社は的場・奥荒田・寺内・西脇の4ヶ村の宮総代で管理。		お当人は、本当1人・相当2人で構成される。	お頭人1人に連中4人が補佐する。以前、お頭渡し時、中学生が酌をしていた。
	内容	多田	奥荒田	的場	寺内	西脇	山野部

八千代区

	内容	大屋	坂本	中村	横屋	下村	実船地区（坂本・中村・横屋・下村）	門田		赤坂	俵田	中野間		仕出原		下野間			下三原	柳山寺	中三原	上三原		内容
1	オトウの字・トウニンの呼び方と人数	お当・お当神主、12人	お祷（当）、2人	お当、2人	お当・当屋、2人	お祷、2人	①坂本・横屋各2人 ②中村・下村各3人 ①と②が隔年で受持ち「神主」2人決める	お祷・宮当番、5人堂番、5人		おとう、2人	神主、2人	お当グループで	おとう、約4人	お当、2人	お当、2人	お当		お当	神主、2人	無	お党	お当・おとうや、2人	1	オトウの字・トウニンの呼び方と人数
2	オトウの決め方	順番	名簿順（20年に一度）	順番（33年に一度）	歩きの順番	順番		順番		くじ引き	順番	順番	大歳神社のおとうに入っている人でくじ引き	順番（一代当）	順番	隣保当＋お当講員10人（各隣保から1人選出）	隣保当	隣保当	株内はさけて順に2人ずつ	－	隣保党	順番	2	オトウの決め方
3	お当事箱の有無・数・名称	お当状①	お祷（当）事箱 神①・仏①	おとうじ箱①	とうじょう箱①	おとうじょうさん①	お当事箱①	オトウ箱②（宮当番① 堂番①）		おとうじさん①	無	お当事箱①	無	お当事箱①	お当事箱①	お当事箱①	お当の箱	お当状箱①	無	－	おとうじょうはん①	おとうじ箱①	3	お当事箱の有無・数・名称
4	オトウ対象の祭神仏	鹿子神社・薬師堂	若宮・当勝神社、薬師・地蔵・大師堂	あきお・権現・妙見さん	稲荷神社	金比羅神社	中村の貴船神社・横屋の大歳神社	神明神社・阿弥陀堂		稲荷神社	伊勢大神宮	貴船神社	大歳神社	中野間の貴船神社	天満宮	中野間の貴船神社	下野間の貴船神社	天満宮	貴船神社 稲荷神社	大歳神社	大歳神社	中三原の大歳神社	4	オトウ対象の祭神仏
5	オトウ渡しの場所	鹿子神社	公民館	住民センター	公民館	公民館	当番地区の公民館	公民館		公民館	伊勢大神宮	次年度当番村の当人宅	公民館	次年度当番村の当人宅	新当人宅	次年度当番村の当人宅	下野間の貴船神社	天満宮	住民センター	－	－	－	5	オトウ渡しの場所
6	オトウ渡しの日時	1月第一日曜日午前9時	1月初め（冬祈祷）	1月初め（冬祈祷）	1月初め（冬祈祷）	1月初め（冬祈祷）	10月第二日曜日（秋祭本宮の後）	三が日を除く1月第一日曜日		1月第一日曜日	12月1日	10月第二日曜日（秋祭本宮の後）	3月	10月第二日曜日（秋祭本宮の後）	3月	10月第二日曜日（秋祭本宮の後）	10月第二日曜日（秋祭本宮）	4月25日	1月1日	－	－	－	6	オトウ渡しの日時
7	オトウ渡しの参加者	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	氏子（戸主）	神主2人と次年度の宮当番全員	氏子（戸主）		氏子（戸主）	新旧神主4人	旧当番村の使者と新当番村の当人	氏子（戸主）	旧当番村の使者と新当番村の当人	新旧当人4人と隣保長	旧当番村の使者と新当番村の当人	区長・構元と講員・次期構元	区長・各隣保代表一名	新旧神主4人	－	－	－	7	オトウ渡しの参加者
8	行列の有無	－	－	－	－	－	－	－		旧とう人が新とう人の家まで送る	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	8	行列の有無
9	特殊な供物	大根なますを盛った島台	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	9	特殊な供物
10	謡曲の有無	有（高砂・四海波・難波）	－	有	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	10	謡曲の有無
11	子ども関わりの有無	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	11	子ども関わりの有無
12	おはけ・注連飾り（トウヤ）の有無・名称	－	－	－	－	－	－	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	12	おはけ・注連飾り（トウヤ）の有無・名称
13	ゆうだすき等神主の印の有無	－	－	－	－	－	ゆうだすき②	－		－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	13	ゆうだすき等神主の印の有無
14	備　考	お当人交替のときは鍵渡しの儀式。お当状箱は区長が預かり、区長交代の時お当状箱渡しが行われる。	こっつりさん。版木の御札あり。	こっつりさん。版木の御札あり。	こっつりさん。版木の御札あり。	こっつりさん。版木の御札あり。お当渡しのとき「枡」も渡す。				赤坂には稲荷神社の他に伊勢大神宮があり、伊勢大神宮は月当番が世話をし、月当番は家の順に1ヶ月ごとに廻っている。	道具箱（お供えに必要な道具入れ）あり。	グループの中で当元を1人決める。秋祭は中野間・下野間・仕出原三ヶ村の祭りで、当番村は1年ごと順番に廻る。貴船神社の世話は、中野間花の宮地区が担当。	おとう渡し時、枡返しの儀式あり。	お当人2人はそれぞれ本当・相当という。秋祭は中野間・下野間・仕出原三ヶ村の祭りで、当番村は1年ごと順番に廻る。貴船神社の世話は中野間花の宮地区が担当。	お当人2人はそれぞれ本当・相当という。	秋祭は中野間・下野間・仕出原三ヶ村の祭りで、当番村は1年ごと順番に廻る。貴船神社の世話は中野間花の宮地区が担当。	お当を受ける隣保の中で講元を1人決める。		新旧神主4人が雨散散の後、4つの木地椀の白むしのごくうさんを氏子に配る。	神社の管理は1年ごとと隣保で順に受持ち、3月31日で交替する。	お党当番隣保の隣保長が代表でおとうじょうはんを預かる。秋祭のとき、党人代表の家に赤い幟が立つ。お党渡しの儀式はなく、12月31日午前0時をもって交替する。	秋祭のとき、おとうやの家に赤い幟が立つ。お当渡しの儀式はなく、秋祭の後に新おとうやにおとうじ箱を持って行く。	14	備　考
	内容	大屋	坂本	中村	横屋	下村	実船地区（坂本・中村・横屋・下村）	門田		赤坂	俵田	中野間		仕出原		下野間			下三原	柳山寺	中三原	上三原		内容

・項目 2　「歩き」とは、村内の伝達事項や配り物を受け持つ者で、村人が順番に勤める。
・項目 3　お当事箱の丸囲み数字はお当事箱の数である。
・項目 13　ゆうだすきの丸囲み数字はゆうだすきの数である。

Ⅲ　オトウと地域社会

小栗栖健治

1．多可町とオトウ

四季の美しさは、それぞれの季節にふさわしい祭りが加味されることによって、いっそうの輝きを増す。正月は年神を迎えてその年の豊かさを祝い、春には豊作を願う。夏は盂蘭盆を中心に先祖まつりを盛大にくりひろげる。秋は収穫・豊作を祝い、冬には正月と春を迎える準備に余念がない。

高度経済成長以降、農山村の暮らしぶりはすっかり変容を遂げた。それにともなって村や家で行う年中行事もそのあり方を大きく変えていったのである。とりわけ正月・雛祭り・端午の節句など家を中心とした年中行事は、家庭環境の急速な変化によって伝統的な色彩を薄めていった。

播磨地方で神事や祭礼を調査していると、オトウという言葉をよく耳にする。このオトウは、地域社会（主として村・共同体）の中で受け継がれてきた神事・祭礼などを行うにあたり、主体的な役割を担う当番（家）を指している。ただ、オトウという言葉には、行事そのものをさして用いられる場合がある。「今年はオトウがまわってきた」というのが前者、「これから神社でオトウが始まる」と表現されるのが、後者である。

多可町は播磨国の最奥部に位置し、北は朝来市（但馬国）、東は丹波市（丹波国）と隣接している。多可町は2005年11月に中町・加美町・八千代町の三町が合併し、旧町は中区・加美区・八千代区としてまとまりを残している。この地域は民俗行事をよく伝えている地域であり、太田陸郎や西谷勝也などの研究者が早くから民俗調査の対象としていた。そうした土地柄であるだけに、現在においても伝統的な民俗行事がよく受け継がれているが、やはりその行事の多くはオトウによって継承されているのである。別表の多可町の村ごとのオトウ調査表に示されているように、多可町内のほとんどの旧村においてオトウと呼ばれる組織が形成されている。

オトウは「お当」・「お頭」・「お党」・「お祷」などの文字があてられる。当や頭をあてるのが一般的であるが、ここではオトウと表記することとした。

2．オトウを受け継ぐ

多可町域において広く展開するオトウは、神事・祭礼とどのように結びついているのだろうか。多可町の村ごとのオトウ調査表からも明らかなように、オトウの多くは正月行事、春祭り、そして、秋祭りと結びついている。こうした行事は、基本的には村（共同体）がその年の豊作を願い、また、豊作を感謝する行事なのである。つまり、日本人の一年の中でもっとも中心となる行事とオトウは結びついている。

では、オトウと呼ばれる組織は、村の中でどのように維持されてきたのであろうか。現代の習俗を調べてみると、オトウが当たる順番は、くじ引き、年齢順、隣保順、家の順番、行政順、昔からの決まった順番、隣保当、歩きの順などさまざまである。オトウがまわってくる周期については12年から13年に一度、20年に一度まわるなど一定の年数が決まっているところもあるが、一生に一度まわってくる一代当と考えられているところは多い。現代の習俗でみるかぎり、オトウの多くは家を基本に維持されていることがわかる。

オトウのまわってきた家を訪ねると、多くのところが床の間に神号軸とともにオトウ箱（おとじょう箱、おとうじょうさん、お当事箱、お祷箱、おとぼりさん、等々）を祀っている。オトウ箱の中には、オトウを勤めた人の名前を書き継いだ記録と神事に際しての献立の記録などが入っている。とりわけ、オトウを勤めたことを記す記録簿に代々の村人の名前の後に自分の名前を帳付けされることは村の構成員であることの証明であり、大きな意義を有していた。と同時に、一年をとおして神事祭礼を担うオトウの当番は、その村を代表する存在でもあったのである。一部の地域において、このオトウ箱を「御神体箱」・「神さん」と呼んでいたり、中区間子、加美区豊部・山野部のようにオトウ人宅に「おはけ」を年中据えているというのは、氏神の分霊を祀っているという強い意識の表われである。



祀られたオトウ箱（左：中安田、右：山野部）

正月の神事、春秋の祭礼においてオトウ渡しが行われる。オトウ渡しは、神社・公民館・オトウ人宅で行われている。オトウ渡しは今年の当番から来年の当番へオトウを引き継ぐことであるが、新しい当番はその日から一年先のオトウ渡しまでその役を勤める。下野間を例にとれば、オトウの家は月末の神社の清掃、一日参り、正月の準備、秋祭りの流鏑馬の準備を行う。

このように、オトウは基本的に神事・祭礼の準備を行う役割を担っている。ところが、加美区多田の春日神社ではオトウ５人の中から１人の「お祷屋」が選出され、神主として本殿内に入ることができる。また、八千代区中村の貴船神社では氏子４か村が坂本と横屋、中村と下村の二組にわかれ、隔年にオトウを勤め、オトウに当たった村から１人ずつ、合わせて２人を神主として選出する。オトウから選出される神主のあり方は旧い習俗と考えられる。現代でこそ神社の神事・祭礼に職業神主が祭祀を行うが、かつては村人が一年ごとに神主の役を勤めていたのである。つまり、オトウには神事・祭礼を行うにあたっての補助的な役割と同時に、司祭者という二面性が存在しているのである。

3．神社と氏子域

オトウは神社と強く結びついて存在するが、神社の性格も一様ではない。神社には一つの村を氏子としている場合と、複数の村を氏子としている場合があるからである。表１に示しているとおり、中区の加都良神社（間子）・天神社（徳畑）・稲荷神社（糀屋）・稲荷神社（中安田）、加美区の青玉神社（鳥羽）・河上神社（轟）・荒田神社（的場）、八千代区の貴船神社（中村）・伊勢太神宮（俵田）・貴船神社（中野間）・大歳神社（柳山寺）がそれである。

表１　複数の村を氏子域とする神社

区	所在村	神社名	氏　子　村	中世の庄園
中区	間　子	加都良神社	間子・岸上（御旅所）・天田（分社）	安田庄高田郷
	徳　畑	天神社	奥中・徳畑・茂利・中村町	安田庄中村郷
	糀　屋	稲荷神社	安坂・糀屋・坂本・曽我井・森本	安田庄曽我部郷
	中安田	稲荷神社	西安田･中安田･東安田･羽山(西脇市)	安田庄安田郷
加美区	鳥　羽	青玉神社	山寄上（分社）・鳥羽	杉原庄
	轟	河上神社	轟・山口・西山	杉原庄
	的　場	荒田神社	奥荒田・的場・寺内・西脇	松井庄
八千代区	中　村	貴船神社	坂本・中村・横屋・下村	安田庄野間郷？
	俵　田	伊勢太神宮	門田（分社）・赤坂（分社）・俵田	安田庄野間郷？
	中野間	貴船神社	中野間・仕出原・下野間	安田庄野間郷
	柳山寺	大歳神社	柳山寺・中三原・上三原	坂本庄？多可庄？

複数の村々からなる神社の氏子域は、かつての荘園を構成していた村、また、農業用水を協同利用するための組織と結びつく例が多い。こうした関係も時代とともに希薄化しているが、多可町の場合を紹介しておきたい。

中安田の稲荷神社は安田庄安田郷の鎮守社と考えられ、西安田・中安田・東安田とともにかつて安田郷を構成していた西脇市の羽安が祭礼に参加する。また、中村の貴船神社は坂本・中村・横屋・下村を氏子としている。坂本と横屋の組、中村と下村の組のそれぞれのオトウが一年交替で神主を勤めるのは、中世以来の協同祭祀の名残とみられる。この他、中野間の貴船神社においても氏子の中野間・仕出原・下野間の３か村において、１年ごとに貴船神社のオトウが回るのもそうした一例である。

4　オトウの歴史

オトウという名称は地域社会で成立したもので、一般的には当役・頭役（以下、当役）と称され、その歴史は古く大社寺の神事・祭礼や年中行事に登場する。地域社会に当役の組織が成立していたことは、平安時代の末期に確認することができる。寛治６年（1092）、京都の八瀬の住人秦重行が、座役（当役）を勤めてもいないのに、勤めた人よりも高い立場に立とうとしている、として紛糾する事件が起きていた（寛治６年９月３日「山城国八瀬刀禰乙犬丸解」『平安遺文』4655号）。地域社会の中で、当役を勤めることが重要な役割であったことを示している。

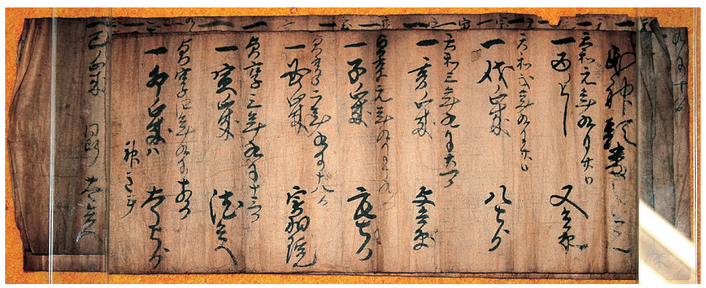
基本的にオトウは、地域の鎮守社（氏神）の祭祀と結びついて存在している。鎮守社の祭祀を行う特定のグループを学術的に宮座と総称しているが、オトウもその概念に含まれる。当初、オトウを勤めることができたのは、村の開発に携わった人たちの子孫や経済力を有した富裕な人たちであった。地域社会に住んでいる住人の全てにオトウの当番が回るようになるのはそれほど古いことではなく、庶民層に「家」という意識が広汎に成立する17世紀以降のことと推測される。この家とは、

家名（家の名前を受け継ぐこと）
家業（家の職業を受け継ぐこと）
家産（家の財産を受け継ぐこと）

を継承していくための母体だったのである。現代社会においても「家を相続する」、「親の跡（家）を継ぐ」という表現が日常的に使われるが、ここでいう「家」とはまさにそれをさしている。

オトウ（当役）の記録としては、奈良県香芝市下田の鹿島神社において建久７年（1196）以来現在も書き継がれているのが、最も古いものの一つである。兵庫県下において、中世の年紀で始まるオトウの記録は、播磨国では越部八幡神社（天文21年〔1552〕 新宮町市野保）、大歳神社（天文４年〔1535〕新宮町香山）、天満神社（天正６年〔1578〕 高砂市曽根町）、摂津では感神社（大永元年〔1521〕 三田市山田）・御霊神社（永禄４年〔1561〕 三田市貴貴志）、丹波では内尾神社（応永17年〔1410〕氷上町三原）、但馬では一ノ宮神社（元亀２年〔1571〕養父市米里）の七例が確認されているにすぎない。

多可町域では、現在のところ中世にさかのぼる史料は確認できていないが、近世前期からの記録が残されている。加美区丹治の大歳神社の『氏神頭番之覚』（天和元年〔1681〕）、中区中安田の稲荷神社の『御宮之権當書之覚帳』（天和３年〔1683〕）などが古いオトウの記録である。



『氏神頭番之覚』（丹治）

5　歴史・文化伝承



『御宮之構(講)当書之覚帳』(中安田)

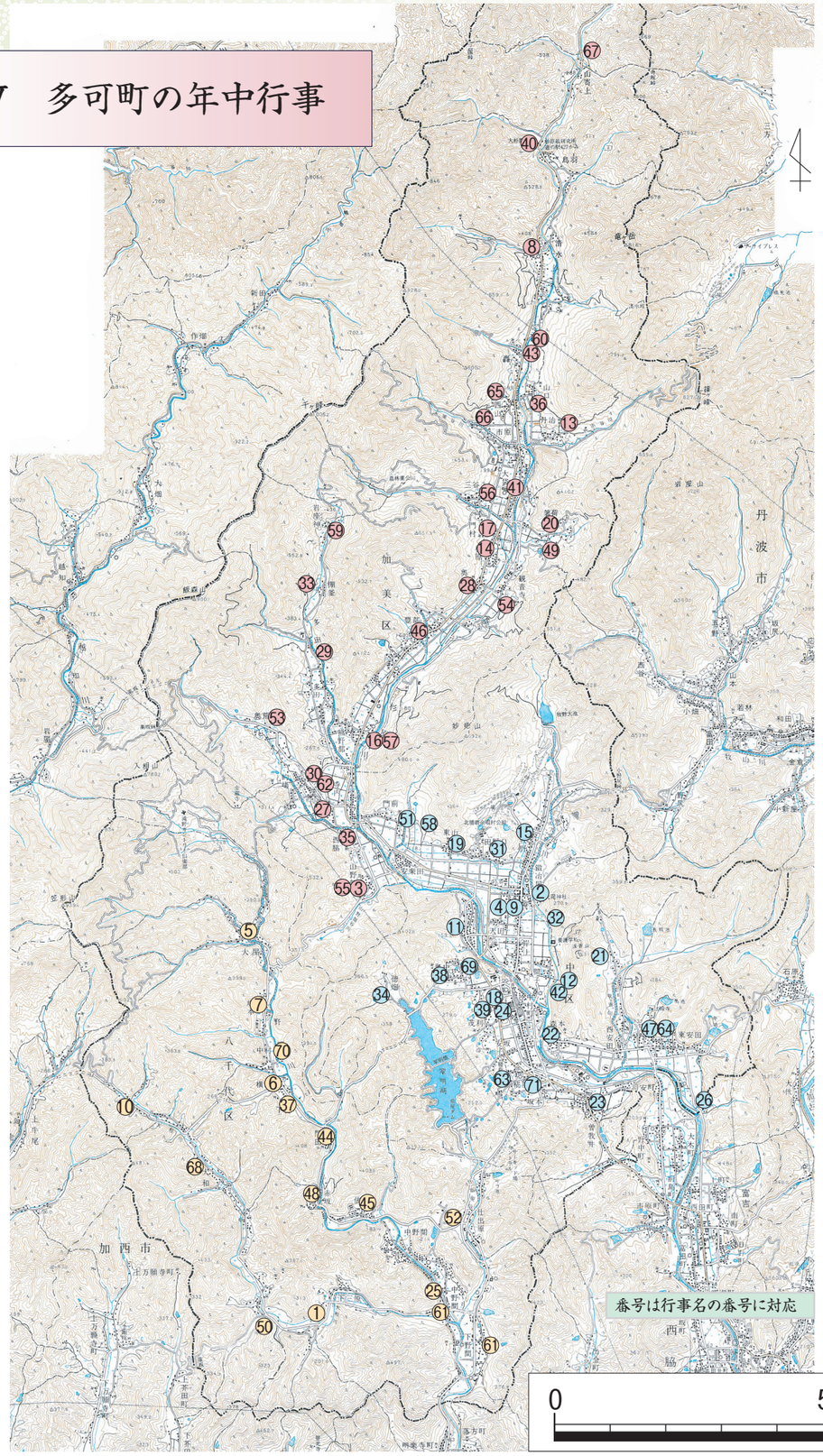
オトウはその地域に生きてきた人たちの誇りとして受け継がれてきた。そうしたオトウも時代とともに変容していくが、地域の歴史・村の歴史と深く結びつき、地域独自の伝承や伝説をも生み出していった。

オトウという組織、そして、オトウが担うさまざまな行事が、その地域に暮らす人たち、その地域を離れて暮らす人たちのアイデンティティを形成しているのは間違いない。オトウの歴史をひもといていけば、村の歴史・地域の歴史が見えてくることだろう。そして、そこで繰り広げられる神事や祭礼には、日々の平安と豊かさを願う気持ちが込められていた。こうした性格を持つオトウは、地域の歴史と文化を受け継いでいく母体として存在するが、それだけでなくそこから新たな社会を創造していたのである。

私たちは神事や祭礼を文化財として個別的に調査を行うが、それらを調べていくとそれらの伝承母体がオトウであることに気付く。換言すれば、オトウという組織によって年中行事や民俗行事が現代社会に継承されてきたということである。地域社会におけるオトウは、それほどに大きな意義を持って存在していたことを証明している。

地域社会は今、少子化、就業先の遠距離からくる在村人口の減少（過疎化）、人間関係の希薄化など、急速に変容する社会構造のもとで難しい課題を抱えている。民俗慣行は社会の動向の中で絶えず変容する。オトウもその一つであるが、ふるさとを継承する、日本人らしさをとは何か、こうした命題を考える時、多可町ではオトウの存在は大きい。ふるさとの心、地域の絆として、これからもオトウを育んでいかれることを期待している。

Ⅳ　多可町の年中行事



多可町年中行事関係位置図

①下三原（しもみはら）　雨散散（ゆうわらわら）（ゆうばらばら）

下三原の貴船神社とお当

下三原の貴船神社は、天文10年（1541）に中野間の貴船神社から分かれたと伝えられています。本殿は江戸時代前期の建立です。



貴船神社

下三原のお当人は２人で、「神主」と呼ばれます。隣保で回っており、１つの隣保で同じ株内にならないように選ばれます。平成16年に神主制度の簡素化が図られ、「宮行事の日程表」に従って神社の世話をしています。

準備

年末に神主２人で、村の「しきみ山」へ行事に使う榊・樒・藤かずらを取りに行きます。その後、貴船神社だけでなく、摂社の八幡神社、末社など全ての榊を新しいものと取り替えます。

雨散散

午前８時過ぎ、神主２人は「貴船」「日天」「月天」「八幡」という４つの木地椀に盛った白むしなどの供え物を本殿や全ての小宮さんに供え、樒・藤かずら・洗米・半紙・水引を用意します。氏子は神社に参拝した後、藤かずらで鎖状の３つの輪を作って樒に付け、洗米を半紙に包んで水引でくくりつけます。３つの輪は、本来「１反の田に３石の米が取れますように」という願いを示すものでした。神主は焚き火の回りに集まった氏子たちを接待します。

午前10時、１人の神主が摂社の八幡神社本殿で祭文を奏上し終わると、もう１人の神主が「お祝い申す」と言いながら、本殿から柄の付いた木杯に入れた神酒を、擂り粉木状の木製容器で集まった氏子たちに振りかけます。氏子たちは手に持った樒の小枝を高く掲げ、「雨散散」と唱えます。これが３回繰り返されます。



「雨散散」と唱えて樒を掲げる

儀式終了後に本社の拝殿で直会を行い、新旧神主４人が４つの木地椀に盛った御供さんを氏子に配ります。この日に神主の引き継ぎが行われます。樒の小枝は家に持ち帰りますが、かつては豊作を願って苗代の一角に祀る風習がありました。



木椀の御供さんを配る

特徴

雨散散は、干ばつに苦しむ下三原の人々が氏神に参り八幡大菩薩に雨乞い祈願したことが起源とされ、撒かれた神酒の滴が樒の小枝にたくさん付いた方がよいと言います。下三原のオトウは「神主」と呼ばれ、専任神主ではなく村人が神主を務めた古い習俗をよく残しています。木椀の御供さんなど、供え物にも伝統が受け継がれています。（埴岡）

調査年月日　2008年・2010年・2012年１月１日
調査場所　八千代区下三原　貴船神社

②鍛冶屋（かじや）　スズメノモンとお当渡（とうわた）し

大歳金刀比羅神社（おおとしことひらじんじゃ）

大歳金刀比羅神社は、大歳神・大己貴命・保食神・事代主命・天目一命を祭神としています。寛政６年（1794）摂社として讃岐の金刀比羅宮の分霊を勧請、明治44年（1911）に大歳神社に合祀され、大歳金刀比羅神社となりました。



大歳金刀比羅神社

鍛冶屋のお当

お当人は大歳・金刀比羅それぞれ１名、「大歳さん」「金刀比羅さん」と呼ばれています。スズメノモンとお当渡しの行事は、新旧当人の息子を加えた、計８名で行われます。なお、新当人は、寿酒としてそれぞれ清酒1本を用意します。

スズメノモン

12月31日午前８時に神社に集合、全員で拝礼してから神社の清掃を行い、拝殿の幕を張って年越し参りの準備を整えます。新旧当人の息子は、元旦のオトウ渡しのため、公民館の会場準備を行います。午前11時に帰宅後、新旧当人は礼服、息子は正装で大歳当人宅へ集まります。縁側に玄米８合を入れた一升瓶・杵・ツト（藁苞）・ゴザ、庭に臼・鍋・竈を用意します。

午前11時半、大歳当人の息子が庭に用意した竈に火を焚きつけ、「なんぼや」と叫ぶと、当人が「一升五合」と答え、参加者全員が榊を口にくわえて「鎮の物」とも呼ばれる焼米作りが始まります。まず、大歳当人の息子が鍋で米を煎り、それを木臼に移して新旧当人の息子たちが杵で搗きます。

搗き終わった煎り米を大歳当人の息子がツトに入れ、鉢巻きをした大歳当人がツトを背負い、ムロの木の杖を突いて縁側から出ます。金刀比羅当人はゴザを持ちます。出立ちに際して、門先で金刀比羅当人が「ホーイ」と叫び、参加者はくわえていた榊を外します。



スズメノモンの道具を前に座る大歳当人



煎った米をタテ杵で搗く

大歳当人を先頭に行列して神社へ行き、金刀比羅当人が拝殿にゴザを敷いてツトを供え、全員で参拝します。



ツトを背負った大歳当人を先頭に神社へ

参拝後に摂社の山の神社へ移動、大歳当人が杖を神木の大杉に納め、鉢巻きを鈴紐に結わえ付け、全員で参拝します。行事終了後は、大歳当人宅で会食します。なお、両当人とそれぞれの息子は交代で神社へ行き、大晦日夕方から元旦朝まで年越し参りの人たちを迎えます。



杖を本殿脇の神木（スズメの宮を作っていた場所）へ納める

お当渡し

１月１日午前9時に、旧当人２人はお当事箱を持って公民館へ行き、９時20分頃には新当人も到着します。壇上には「大歳大神」「金刀比羅大神」の垂れ幕が飾られ、神棚が設けられています。上段中央に御幣が、その左右にお当事箱が置かれています。他に、鏡餅、神酒、三宝に載せた供物などが供えられています。新旧当人と当人経験者たちが前列２列の椅子席に、その後ろに一般の参加者が座ります。



公民館でのオトウ渡し

お当渡しの開式は、10時です。区長の挨拶の後、両当人のお祓い、神主の祝詞奏上が終わると、当人が玉串を奉奠します。その後、神主から旧大歳当人へ、次に新当人へ、それから当人経験者へ年齢順に、その後に一般の参加者へお神酒がつがれます。金刀比羅当人側の席でも、区長によって同様に神酒がつがれます。

盃事の間、謡曲が流されます。かつては、小学校４、５年生の男子が給仕人を務めていました。盃事が済むと、旧当人が挨拶を行い、両人に額に入った「御祷済之証」が手渡され、万歳三唱が行われます。その後、新当人へお当事箱が引き継がれます。

お当事箱を受け取った両新当人は参加者に拍手で送られ、会場を後にします。それぞれ新当人の後ろに旧当人が続き、隣保や親戚の人が行列で新当人宅に向かいます。床の間にお当事箱を納めた後、一同にお膳が振る舞われます。午後４時に鍵の引き継ぎが行われ、大晦日・元旦の２日間にわたるスズメノモン・お当渡し行事は幕を閉じます。

特徴

『兵庫県神社誌』には、「祷人の二人が背に叭を負い、氏子全般の戸口に立ち背を向けて「スズメノモン」と呼ぶ」と家人が叭（カマス）の中に米を入れたと記されています。中区天田・牧野などにも、同様の行事がありました。鍛冶屋では、昭和30年頃まで神木の根元に「スズメの宮」が作られていました。

また、拝殿の上で大歳当人が、下で金刀比羅当人が「シキミバライ」の式を行っていたそうです。これは正月のハナフリ行事といえ、スズメノモンは各地の鳥追い行事と同じく、五穀豊穣を祈る予祝神事だったと考えられます。スズメノモンは、大歳当人宅で焼米を用意するなど、大歳・金刀比羅両当人の役割に軽重がありますが、これは神社の成り立ちを反映したものといえます。

なお、平成23年お当に関して改正がなされ、当人宅で行われていたスズメノモンは公民館で執り行われるようになり、また、お当渡し後の送り出しと隣保の会食は廃止されました。

（埴岡）

調査年月日　2008年12月31日
2009年１月１日
2013年12月31日

調査場所　中区鍛冶屋　大歳金刀比羅神社・公民館

③山野部（やまのべ）　御幣切り（ごへいきり）・年越し参り（としこまいり）・初参り（はつまいり）

山野部のお頭

伝統的なオトウ行事を、最も色濃く残しているのが山野部です。一生に一度だけの一代頭である頭主（お頭人）を中心に、４人の連中が補佐し、大歳神社の維持管理や行事を１年間執行します。

頭主宅の庭には神霊の依代である「オハケ」が立てられ、門には注連縄が張られ、床の間に祭壇が組まれ、頭主宅は御神体を祀る場所となります。頭主は、神社の管理や祭事を滞りなく行うだけでなく、自宅で神祀りを行い、村の繁栄と安寧を祈念するのです。



正月を迎える大歳神社

御幣切り

頭主が新頭主と一緒に行う行事が、12月31日から始まります。「御幣切り」と「オハケ立て」が行われるこの日から、翌年の新頭主になる人が、３月のお頭渡しまでの間見習い頭主として行事に参加し、教えを請うとともに申し送り事項を引き継ぎます。

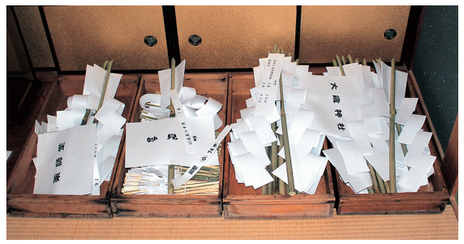
頭主宅のオハケが新調され、新頭主宅にも次期連中が初めてオハケを立てます。



御幣切り



オハケと注連縄の新調



準備された 107 本の御幣

この日に２人の頭主は、合計107本の御幣を拵え、大歳神社や常楽寺（じょうらくじ）や妙見岩に収めます。





神社と常楽寺での御幣の取替

年越し参り・初参り

大晦日の夜、「年越し参り」が行われます。大歳神社では、頭主と連中により焚き火がたかれ、土俵上に敷かれたムシロの上に三宝が準備





妙見岩での御幣収め

されます。午後８時、氏子が揃うと、氏子総代の挨拶の後、電気が消され真っ暗になります。暗闇の中、氏子は本殿際から小石を拾い三宝に収めます。この三宝は、翌日まで神前に供えられます。



集められた小石



暗闇での小石拾い

年が明けた元日の早朝、村人は村の氏神と氏寺に「初参り」します。大歳神社境内、土俵のムシロの上には、昨夜の三宝と大きな榊１本、細長く切られた半紙が用意されています。午前７時頃、参拝に訪れた氏子は、頭主と連中から御神酒等の接待を受け、三宝の小石を半紙に包んで榊にくくり付けます。氏子がほぼ全員揃うと、みんなで常楽寺へ向かいます。



初参り風景



半紙で包んで小石をくくり付ける

小石をくくり付けた榊は、神前に供えられます。かつては、村の苗代田に立てられていたそうです。年越し参りと初参りは、五穀豊穣を祈願するお正月の予祝行事なのでしょう。（早崎・宮原）



小石が括り付けられた榊

調査年月日　2007・2008・2010年12月31日、2008・2009年１月１日

調査場所　加美区山野部　大歳神社

④天田（あまだ）　ハナフリ神事（しんじ）

天田の加都良神社（かつらじんじゃ）とお当

天田の加都良神社は、正保４年（1647）に間子の加都良神社より分社したと伝えています。本殿は、寛文８年（1668）の建立です。ハナフリは摂社の八柱権現神社で行われます。



加都良神社境内の摂社八柱権現神社

お当人は１人で、お当渡しは１月10日に近い日曜日の午後に公民館で行われます。お当事箱はなく、引き継ぎではゴウヅイ（牛玉杖）が渡されます。

ハナフリ神事



準備された花の木

氏子は、各自の自宅でハナフリに用いる「花の木」を準備します。花の木は、椿２本・葉付き大根1本を半紙で包み、水引で結んだものです。

午前９時前、氏子が花の木を持って集合してきます。氏子はそれぞれ神社に参拝した後、焚き火に集まって新年の挨拶を交わします。

午前９時になると、氏子は花の木を持って八柱権現神社の周囲を取り囲みます。区長が先達となって「大年小年二十余色の作り物、村万平に五穀豊穣」という文言を唱え、社殿の縁を花の木で３回叩きます。唱え事をして花の木で縁を叩く、これが３度繰り返されます。

正月行事では、天田と同じように、堂社の



花の木で社殿を叩く

床などを牛玉杖などで叩く行為が見られます。「乱声（らんじょう）」などと呼ばれ、豊作を願う呪術的な行為と考えられています。かつて天田では、ハナフリの後、花の木を苗代田の水口に立てていました。

ハナフリ神事が終了すると、お当人はツキヌキ、神酒、イリコを氏子に配っていきます。この直会で、ハナフリ行事は終了します。



御供さんを振る舞う

特徴

お当人が正月の薬師当でゴウヅイによって赤土を氏子の額に付ける、七度半の使い等、天田のオトウには古い伝統がよく残っています。７月に行われる大般若でも、お当人は量興寺の住職に祈祷してもらったお札を村境6ヶ所に立てる重要な役割を担っています。豊作を祈るハナフリの唱え事も、本来はお当人の役目だったかもしれません。（埴岡）

調査年月日　2009年１月１日
調査場所　　中区天田　加都良神社

⑤大屋（おおや）　お当渡（とうわた）しと鍵渡（かぎわた）し

鹿子神社（かのこじんじゃ）とお当

延暦年間（782～806）に坂上田村麻呂が二宮荒田神社参詣の途中に当社に参ったとされ、秋祭りに武者行列が行われていました。隣接して薬師堂があります。



鹿子神社

大屋のお当人は「お当神主」と呼ばれ、神社当番（神当番）と薬師当番（仏当番）を12人で務めます。月番を決め、毎月１・15日の供え物や行事の世話をします。交代の際に鍵を引き継ぐので、当番は鍵番ともいいます。

準備

拝殿の準備、祭壇を整えます。儀式に使う島台２台に、それぞれオン（雄）松とメン（雌）松を輪切りにした大根に立て、大根ナマスを盛り、鶴と亀（以前は芋などで作った）・尉と姥（以前は大根で作った）の人形などを飾ります。神主役は烏帽子を付け斎服に着替え、薬師堂前では焚き火が準備されます。

お当渡し

午前９時半、区長の挨拶に続いて神主役がお祓いをし、新旧のお当人・区長・役員など全員で拝礼します。その後、下番（旧当人）は祭壇に供えた赤飯・神酒・餅を参拝した氏子全員に配ります。

そして席を整え、神主役・区長の前に島台・大盃・銚子が置かれます。下番２人が島台のロウソクを点し、神主役・区長がそれぞれ大盃に神酒を注いで、謡曲「高砂」の後にいただきます。「四海波」の後、副区長、両脇の役員へ。下番代表２名の前に島台を向け、役員の給仕で大盃が回ります。この時の謡曲は「難波」。大根ナマスは給仕人が配り、上番（新当人）は掌に受けます。



島台を前にしての盃事

鍵渡し

その後、９時50分から鍵渡し神事が始まります。鍵を渡す下番、鍵を受け取る上番は向き合う形で、神主役と区長・副区長、役員は上座に当たる場所に座ります。下番代表（元締め）が挨拶し、下番全員で鍵を改めた後、区長に渡します。役員２名の給仕で下番が神酒をいただくと、区長が上番に挨拶して、上番が神酒をいただきます。代表が挨拶して全員で鍵を改め、儀式は終了します。



鍵渡し

特徴

尉と姥を飾った島台や謡曲など以外で注目されるのは、オトウ渡し神事にお当事箱が用いられないことです。「区長役渡し」の時、区長宅の床の間に祀られたお当事箱を新区長が引き継ぎます。祭政一致の古い形態を思わせる習俗といえるでしょう。（埴岡）

調査年月日　2009年１月４日
調査場所　　八千代区大屋　鹿子神社

⑥横屋　冬祈祷とお当渡し

天船地区の冬祈祷・夏祈祷

八千代区の天船４ヶ村、坂本・中村・横屋・下村では、毎年１月と７月に、安海寺による大般若経の転読が行われます。冬祈祷、夏祈祷とよばれ、村内の繁栄や安全を祈る行事です。

冬祈祷

お正月三ヶ日が明けたこの日、横屋の公民館で冬祈祷と、大歳神社のお当渡しが行われました。

安海寺にはたいへん古い巻子本の大般若経が伝えられていて、昨年まではこの巻子本で行われていましたが、傷みが激しくなったため、今年から新しく購入した折本の大般若経で転読が行われました。参列する村人のなかでも若い者が、お当人が準備した版木で、お札を刷り始めます。



版木によるお札刷とお札

こうした中、安海寺住職の挨拶後、冬祈祷の大般若経転読が執り行われます。



大般若経転読

転読が終わると、住職は、床の間に掛けられていた釈迦十六善神画像図の掛け軸を収めた木箱と、大般若経を収めた木箱を重ねて持ち、一人のお当人の頭をコッツンと叩きます。頭を叩かれたお当人が、今度は住職ともう一人のお当人、そして、村人の頭を順にコッツンコッツンと叩いていきます。これを「こっつりさん」といいます。住職によると、大般若経の功徳を皆で共有するために叩くのではとのこと。



こっつりさん

こっつりさんが終わると、村人は刷られたお札をいただいて帰りますが、お札は家内安全のほか雷よけにも効くといわれています。また、祭壇正面に立てかけられていた木の札２本は、お当人によって、災厄の侵入を防ぐために村境に立てられます。

お当渡し

お当渡しはこっつりさんが終わった後、祭壇の前に新当人と旧当人が２人ずつ向かい合い酒を酌み交わすという、ごく簡素な儀式で行われます。（早崎・宮原）



お当渡しの盃事

調査年月日　2012年１月４日
調査場所　八千代区横屋　公民館

⑦八千代区坂本　冬祈祷とお祷渡し

お祷の概要

お祷人は２名で、地区の氏神である若宮神社と当勝神社の世話をします。また、仏事である薬師・地蔵・お大師さんの世話も行います。２名は半年交替で、お祷人の役を務めます。

こっつりさん

お祷人２名は略礼服で、当日朝から祭壇を組み、十六善神像の掛け軸を掛けるなど、会場の準備を行います。安海寺の大般若経が入った箱も、祭壇に置かれます。同寺の版木で大般若経転読のお札を摺るのも、お祷人の役目です。



整えられた祭壇

午前10時、地区の人全員が集まり、住職の挨拶によって行事が始まります。住職が大般若経を転読した後、参加者全員で般若心経を唱えます。それが済むと、住職は十六善神像の掛け軸を木箱に納め、その上に大般若経の入った木箱を重ねます。

まず、住職が二つの木箱を重ねたものでお祷人の頭を軽く叩き、次にお祷人がそれを受け取って住職の頭を叩きます。その後、お祷人が同じように全員の頭を叩いていきます。「こっつりさん」と呼ばれるこの行為は、天船地区（坂本・中村・横屋・下村）の冬祈祷に共通して見られます。こっつりさんが終わると、お祷人２人が神酒・洗米・ご飯・お札を配っていきます。お札は、家内安全や悪霊退散に効き目があるとして屋内に貼られます。その後、お祷人の挨拶があって、冬祈祷行事は終了します。



大般若経転読



こっつりさん

お祷渡し

そのまま、11時過ぎからお祷渡し神事となります。旧祷人２名、新祷人２名がお当事箱と書類包みを置いた机を挟んで向かい合って座り、御茶を酌み交わします。その後、お当事箱を新祷人に引き継ぎ、新祷人はお当事箱に入っている文書を改めます。お祷渡しが終わると、新祷人は村境２ヶ所に新しい祈祷札を立てに行きます。

特徴

旧天船村４地区の氏神は中村の貴船神社ですが、各地区にはそれぞれの氏神が祀られています。総氏神である貴船神社のオトウと、各地区のオトウは重層する形で存在している点が注目されます。中世の荘園制を起源とする、オトウの二重構造を考えさせる事例といえます。（埴岡）



村境に祈祷札を立てる

調査年月日　2007年1月7日、2012年1月8日
調査場所　八千代区坂本　公民館

⑧清水（きよみず）　戎祭（えびすまつ）りとオトウ渡（わた）し

西宮神社（にしのみやじんじゃ）

西宮神社は、現存する応永17年（1410年）の棟札から、中世にさかのぼる神社であることが確実です。西宮神社との名称から、摂津の西宮神社との関係が推測されるところですが、実際には集落の東に存在する東宮（天満神社）に対して、西に存在することに起因して西宮神社と呼ばれるようになったようです。

１月には戎祭りが盛大に行われ、その後にオトウ渡しが行われます。



西宮神社

清水のオトウ

オトウ人は４人で、宮当番と呼ばれ、毎年オトウ渡しの際にくじ引きで決められます。



くじ引き

戎祭り

４人の当番は12人の手伝い人を頼み、祭りの前日から幟立て等の準備に入ります。

祭り当日の朝、当番は当番の象徴である「ゆうだすき」を首に掛け、それぞれ預かっていたお当事箱を持参し、宮総代は、その４箱のお当事箱を本殿に設えられた祭壇に収めます。午前９時、区長、宮総代、当番が参列する中、宮司



お供えとお当事箱



お参り風景

により神事が執り行われます。その間も、拝殿では手伝い人が参拝者にお神酒を振る舞い、境内では老人会が吉兆を販売します。この間に参拝者は、どんどん増えていきます。神事が終わると、福餅投げが始まります。餅の中にはくじが入っていて、景品引き換えで拝殿周辺はしばらくごった返します。



餅投げ

オトウ渡し

本殿から長床の神棚にお当事箱が移され、オトウ渡しが始まります。氏子の席には盃とゴマメの皿と箸が用意されています。当番の挨拶の後、供えられていたお神酒と洗米と赤飯が全員に配られ、区長が今年くじを引く人の名を読み上げます。紙に「宮」と「白」と書いて揉んで丸めたくじを廻し、「宮」を引いた人が新当番です。くじによって選ばれた新当番は、御手洗場で身を清め、旧当番の横に並び、オトウ渡しに備えます。



盃とゴマメ

まず、謡曲「四海波」が流れるなか、上座の区長、宮総代、宮司の盃にお神酒がつがれ、捧げ持ち、謡曲が終わると酒がつぎ足され飲み干します。下座の旧当番も同じことを繰り返します。このときの謡曲は「千秋楽」です。



下座での盃事

次に、新旧当番は上座正面で向かい合って座し、その前に、お当事箱が立てて置かれます。旧当番は、それまで首に掛けていたゆうだすきをお当事箱に載せて新当番に渡します。新当番は、受け取ったお当事箱を自分の方に向けて立てて置き、ゆうだすきを首に掛けます。新旧当番の間で盃の交換が行われ、お当事箱はいった



ゆうだすきとお当事箱の引き渡し

ん神棚に収められます。新当番は下座に下がって挨拶し、オトウ渡しが終了します。





新旧当番の盃事

新当番は、付添人を伴って、お当事箱を持ち帰り、縁側から入り神棚に収めます。

（早崎・宮原）



付添人を従えての新当番の帰宅

調査年月日　2009年１月12日
調査場所　清水　西宮神社

⑨天田　薬師当とお当渡し

量興寺

真言宗の量興寺は、古代寺院多哥寺の法灯を継ぐ古刹です。本尊の薬師如来が祀られている薬師堂では、１月に「薬師当」という行事が行われます。



量興寺薬師堂

薬師当

薬師当が始まる前、お当人と住職は、たくさんの「牛玉宝印札」に直径約１cmのハゼウルシの木の小口で、赤土の印を押していきます。この牛玉宝印札は２つに折り曲げられて、片方に十字の切り目を入れたハゼウルシの木（長さ約36cm、直径約3.5cm）に挟み込まれています。これを「ゴウヅイ」と呼んでいます。



ゴウヅイへの赤土押印

このゴウヅイ約40本に加え、赤土・酒・白むしの「ツキヌキ」が本尊に供えられます。一方、２本のゴウヅイが読経する住職の前に置かれますが、これは後でお当渡しに使用される特別のものです。

村人が揃うと、住職は五穀豊穣や村内安全を祈願して読経します。読経が終わると、お当人は、住職から順番に村人の額に、ハゼウルシの木で赤土を付けていきます。これは、健康を祈る疫病退散の儀式と考えられます。続いて村人はお供えの酒やツキヌキをいただき、ゴウヅイを２本ずつ持ち帰ります。



供えられたゴウヅイ



住職による読経





額への赤土押印



ゴウヅイの持ち帰り

ゴウヅイは、各家の神棚や床の間に祀っておくそうです。昔は田の苗代の水口に挿していましたが、今は苗代自体がなくなってしまったので、１年間祀った後、翌年のトンドのときに焼いています。

七度半（しったはん）の使いとお当渡し

薬師当が終わると、すぐ近くの公民館に移動してお当渡しが行われます。天田のお当は、量興寺に隣接する加都良神社のお当で、一生に一度だけの一代当です。

まず、区長とお当人の挨拶後、会食が始まります。宴もたけなわの頃、次期お当人候補にお当を受けられるかどうかを伺いに行きます。これを「お当の伺い」といいます。実際は事前に内諾を得ていますので、承諾の言葉をもらって帰り、全員に報告します。

次に、小学生の男子２人が、「七度半の使い」で次期当人宅へ行きます。２人一緒に玄関を開けて入り「お当をお受けになって、おめでとうございます」と言って出る、この行為を３度繰り返します。４度目は一人は中に入って、もう一人は敷居をまたいだ状態で行います。合計７回と半分の使いです。

その後、子どもと新当人は公民館に戻り、子どもは無事お使いが終了したこと、新当人はお当を受けさせていただくことを報告します。

座敷の中央に、薬師当で住職の前に供えられたゴウヅイ・神酒・白むしのツキヌキが載った平盆が用意され、お当渡しが始まります。平盆を囲み、旧当人が上座、新当人が下座で対面し、子どもはその両側に座ります。

まずゴウヅイが旧当人から新当人に渡され、



七度半の使い



ゴウヅイの受け渡し



子どもによる白むしの取り分け

平盆に収められます。そして、子どもの給仕で両人に神酒と白むしが配られ、儀式は終了します。この後、子ども２人は、先ほどのゴウヅイと神酒と白むしの平盆を新当人宅へ運んでいきます。（早崎・宮原）

調査年月日　2008年１月６日、2011年１月９日、2013年１月13日

調査場所　中区天田　量興寺・公民館

⑩上三原（かみみはら）　十四日祷（じゅうよっかどう）

毘沙門堂（びしゃもんどう）

毘沙門堂は古くは「西光寺毘沙門堂」、正式には「柳山法持院飛地境内毘沙門堂」といい、今は老人会と堂守さんで世話をしています。江戸時代には、干ばつになると鐘楼の鐘を龍が瀧の滝壺に投げ込んで雨乞いしたと伝えられています。



荘厳された堂内

準備

午前８時、老人会と堂守さんが境内や堂内の清掃を行います。この行事の当番は隣保単位で回っており、当番隣保は当日までに毘沙門堂に伝えられている版木でご祈祷札を摺っておきます。



高野豆腐を竹ひごに挿したもの

また、高野豆腐を小さく切って竹ひごに串刺しにして焼き、藁の芯に刺した飾り物を一つ作ります。他に、お斎（とき）で配る大豆と大根の煮物、酢ゴボウをそれぞれ重箱に詰めたものを用意します。なお、版木などが入っている引き継ぎ箱があります。

十四日祷

午前９時10分、楊柳寺（法持院）の住職２名が村人達の集まっている堂内に入場します。衣など用意が整うと、大般若の転読が始まります。毘沙門堂には、箱に収められた享保４年（1719）の大般若経600巻があります。この年は、１巻から50巻までが転読されました。



大般若経の転読

転読・読経が終わると、住職の挨拶があり、その後は村人たちが神酒や煮物を食べながら歓談するお斎となりました。当番隣保の人たちは供えた鏡餅を切り分け、高野豆腐の串刺し１本、版木で摺ったお札と一緒に参拝者に分けます。お札の配布は、中絶していた伝統を最近になって復活させました。村人は、魔除けとして玄関に貼るなどしています。以前は牛玉宝印が出されていたらしく、１尺ほどの「ユスラ（ユッラ）」の木にお札を挟んだものを各自が持ち帰り、苗代田に挿していたそうです。



牛玉杖とお札

特徴

高野豆腐を竹ひごに串刺しにしたものの名前は、今は伝えられていません。その形状から、各地の正月行事で見られる「モチバナ（餅花）」といえるでしょう。本来はオトウ行事だったと思われますが、神仏分離などによってオトウとの関係は失われてしまったようです。

（埴岡）

調査年月日　2009年・2012年１月14日
調査場所　八千代区上三原　毘沙門堂

⑪高岸（たかぎし）　大歳神社（おおとしじんじゃ）のお頭渡（とうわた）し

大歳神社とお頭

大年神を祭神とする大歳神社の創建は、明らかでありませんが、この大歳神社の一代頭が、年齢順に引き継がれています。しかしながら、現状での維持が困難になり、2012年からお頭人が４人から２人になるとともに、年４回行われていた「頭送り」行事も廃止になりました。



大歳神社

「頭送り」とは、４人のお頭人が順に預かるお当事箱（神さん）を、３ヶ月ごとに次のお頭人宅へ送り届ける儀式です。御幣を持った宮総代を先頭に、お当事箱を持ったお頭人が続き、「頭箱（大きな長持ち）」をお頭人の身内が担ぎ、触れ太鼓を打ち鳴らし、氏子が伊勢音頭を唄うなか、次のお頭人宅へ送っていきます。次に預かるお頭人が途中で受け取り自宅に持ち帰って、家で盛大に宴会を催していました。

お頭渡し

2012年に、お頭制度変更後、初めてのお頭渡しが行われました。大歳神社幣殿に、旧頭人４人、新頭人２人、宮総代、区長、村役員、新頭人の息子各１人ずつ参列するなか、宮司により神事が執り行われます。これを「二十日頭」と呼んでいます。



お頭渡し

神事が終了すると、旧年度最後のお頭人はお当事箱を捧げ持ち、御幣を持った宮総代の後に続き境内を進みます。途中待ち受けていたもう一人の宮総代がお当事箱を受け取り、新年度最初にお当事箱を預かるお頭人に渡します。そしてそのまま、行列は社務所に向かい、玄関で新頭人からお当事箱を受け取った宮総代は、社務所内に設けられた祭壇に収めます。全員で拝礼し、新頭人の息子の給仕で乾杯すると、お頭渡しは終了します。

その後再び行列して、新頭人宅へ行き、お当事箱を収めます。高岸では、宮総代が神主役を務め、儀式を進めています。



新頭人宅へのお当事箱収め

この日の昼時には、集会所に氏子が集まり、新頭人が紹介され宴会が始まります。

（早崎・宮原）



お頭渡し後の祝宴

調査年月日　2012年１月15日
調査場所　大歳神社・集会所

⑫間子（まこう）　きつね追い（お）

間子の加都良神社（かつらじんじゃ）とお当

加都良神社は奈良時代に淳仁天皇が創立したと伝えられ、式内社「加都良乃命神社」に比定されています。江戸時代は、「勝手明神」と呼ばれていました。



加都良神社

お当は一代当で、年齢順。今は２名ですが、かつては１名でした。お当渡しは１月に恵夷須神社で行われます。７月の川下祭りは、前年・今年・来年の当人６名が世話をします。

お当人はきつね追いの御幣を作り、12本の内1・4・5・7・9本目の御幣を立てる場所にあらかじめ竹を差しておきます。

ゴーカレ

14日午後４時前、地区の人々が注連飾りなどを持って神社前の思い出川原に集まってきます。午後4時に子ども会が設置したトンドに点火、トンドが終了した午後５時から「ゴーカレ」が始まります。幼稚園から中学１年生までの男子８、９名で「ゴーカレ、ゴーカレ」と唱えながら地区内の各家を回り、お金をもらう行事です。神社から出発、３時間ほどかけて全戸を回り、神社へ戻ってきます。どの家でも、準備をして子どもたちの訪れを心待ちにしているようでした。



ゴーカレ

きつね追い

午後８時、小学３年生から中学１年生までの男子が御幣を村境に立てて歩くきつね追いが始まります。まず、神社でくじ引きをして御幣を差す順番を決めます。お当人から12本の御幣を受け取ると、子どもたちは随神門を８の字を描くように回って神社を出ます。子どもたちは村境の12ヶ所に御幣を差して歩きますが、その間「オロロヤ、トロロ、ヨーイヨーイ、コドモヨー、オマエリャ（ワリャ）ソコデナニヲスル、ワカミヤサン（ハン）ニヤトワレテ（タノマレテ）、キツネ追い、ホーイホイ」というきつね追いの唄を歌い続けます。最後の御幣を「追い込み」と呼ばれる場所に差すと、石を３個ほど拾って山に向かって投げ、きつね追いは１時間ほどで終了します。当人と宮総代は、その間に神社の後片付けを行います。



御幣を持ってきつね追いへ

特徴

子どもたちが主役の行事で、かつては子どもたちをきつね追いの唄に出てくる「若宮」の使いとして遇していたそうです。お当人は行事の表面には出てきませんが、村を守る大切な場所に立てる御幣を作る点に村人神主としての役割が窺えます。（埴岡）

調査年月日　2008年１月14日、2012年１月14日、2013年１月12日
調査場所　中区間子　加都良神社・間子地区内

⑬丹治（たんじ）　文殊祭り（もんじゅまつり）

文殊堂

西に杉原川を望み、南北を山に挟まれた谷間に丹治の村があります。集落を通り抜けていくと東の山腹に紫雲山日光寺（しうんさんにっこうじ）があり、境内に文殊菩薩を本尊とする文殊堂が建っています。

この日光寺はもともと字小屋場山に存在していたのが、いつの時代にか現在の地に移転されたものとされ、法道仙人開基と伝えられています。



日光寺の文殊堂

文殊祭り

この文殊堂で、平成２年から村づくり事業の一環として文殊祭りが復活しました。祭りは１月に行われます。世話役の隣保が、絵馬やお守り札の販売をしたり、ぜんざいや焼き鳥で参拝者の接待をします。お堂の前に「知恵の輪」が設えられていて、皆、この輪をくぐってお参りします。３人よれば文殊の知恵のことわざで知られているように、文殊菩薩は知恵を象徴する仏様です。この御利益を授かろうと、子どもも大人も楽しそうにくぐります。





知恵の輪をくぐる参拝者



駕籠による住職の登場

境内が賑わっている中、浄居寺の住職が駕籠に乗ってしずしずと登場します。知恵の輪をくぐってお堂に入った住職により読経が始まります。このあと餅投げが行われます。

リニューアルされた文殊祭り。住職の祈祷や知恵の輪などの新しい試みが功を奏し、ちょうど受験シーズンでもあり、合格祈願や学業成就を願う学生、孫や子どものためにお守りをいただきにお参りする人など、老若男女を問わず人気を集めています。（早崎・宮原）



文殊菩薩の護符

調査年月日　2008年１月20日
調査場所　加美区丹治　文殊堂

⑭杉原（すぎはら）　厄神祭（やくじんさい）

杉原　八幡神社

杉原の八幡神社は、昔は集落の中にありました。その後、国道427号線脇の杉原兵太夫安久碑建立地に移りましたが、国道歩道拡幅工事のため再び移転。そして平成14年に現在地へ、遷宮されました。



大歳神社



安産の神様と伝えられる丸石

本殿の南側奥にはつるっとした楕円形で、高さ約70㎝の石と高さ約30㎝の丸い石が安置されています。この２つの石は、安産の神さんとして祀られています。

宮係とお当係

この八幡神社の祭祀に関わる役割として、宮係とお当係があります。宮係は３人で３年間、神社の世話と厄神祭・秋祭りの準備をします。お当係は３人で１年間務めます。主に秋祭りのときのお当渡しの準備と宮係の補助をします。

お当事箱は１箱あり、１年の間３人のお当係が４ヶ月ずつ預かります。

厄神祭

杉原の村祭りのひとつ、厄神祭が１月に行われます。この祭は昭和40年代後半から、冬の祭りとして行われるようになりました。

祭り前日の朝から宮係は、幟立てや拝殿の幕張、祭祀用の玉串や福引きの準備にかかります。氏子に配布する破魔矢やお札も用意されます。

祭り当日、参拝者はお神酒の接待を受け、破魔矢とお札、御供さんをいただきます。そして福引きをしたり、焚き火にあたりながら話に興じます。お当事箱を本殿に供え、区長・宮係・お当係・厄年の人が参列する中、宮司により神事が執り行われます。最後に参列者全員の玉串奉てんによって、神事が終了します。その後、宮係の接待でお寿司やオードブルをいただきながら、しばらく和やかな時を過ごします。

（早崎・宮原）



参拝風景



神事

調査年月日　2013年１月20日
調査場所　加美区杉原　八幡神社

⑮牧野（まきの）　厄神祭（やくじんさい）とお当渡（とうわた）し

八幡神社

牧野の八幡神社は、慶長８年（1603）に天田村の二郎兵衛によって建立されたと伝えられています。境内には諏訪神社、鍋の森神社など11社の小宮が並んでいます。



八幡神社

厄神祭

厄神祭は、平成13年までは１月19日に行われていましたが、現在は１月の第３日曜日に行われます。この祭りは、「厄投げ」神事や「湯立て」神事があり、お当、宮係、村役員、青年団などが係わる村を挙げての盛大なお祭りです。宮司、巫女、楽士を招き、村や氏子の繁栄や安寧を願い祝詞を奏上し、祈祷神楽舞が舞われます。厄年の人は、人形や祈祷札、お守などを添えて供え、御祈祷を受けます。また、厄払いの銭投げといい、集まった子ども達に硬貨を投げます。



巫女の神楽舞い

村祈祷が終わると、湯立て神事が始まります。巫女が、境内に用意された湯煙が上がる大釜から、クマザサの葉で湯を参拝者に向かってふりまきます。この湯には、無病息災や災厄退散の御利益があるといいます。

湯立てに使われたクマザサの葉は、参拝者に配られます。笹の葉は魔除けになるという謂れがあり、折り込んで三角形にして、家の玄関などに１年間挿しておきます。



湯立て神事

湯立て神事の後は、餅投げが行われ、厄神祭は終了します。

牧野のお当とお当渡し

神事が終わると、お当渡しの儀式に移ります。牧野のお当は、一組７～８人の組割りがあり、くじ引きで一巡りの順番が決まっています。組員の中で、毎月の鍵番（当番）を決め、鍵番はゆうだすきを掛けて神社の世話を勤めます。お当渡しは、新旧当組･区長・宮係が参列し、お当事箱を順番に拝載します。次に、新当組の中で組員の触れ元となる当元を決めるくじ引きを行います。最後にお神酒と洗米とイリコで直会が行われ、儀式は終了します。（早崎・宮原）



お当渡し

調査年月日　2008年１月20日
調査場所　中区牧野　八幡神社

⑯熊野部（くまのべ）　すべ切り（き）とお当渡（とうわた）し

熊野部の稲荷神社とお当

熊野部の稲荷神社は、天文２年（1533）創建と伝えられる神社です。ここでのお当渡しとそれに先立って行われる「すべ切り」は、伝統的なしきたりが随所にみられる行事です。



稲荷神社

熊野部のお当は、大当（おおとう）２人と歩射当（ぶしゃどう）２人で構成され、一生に一度の一代当です。歩射当を1年間務め、続いて大当を受けるので、２年間当人役を担うことになります。以前は、村内では北当と南当の２つのお当に分かれ、それぞれに大当１人と歩射当１人がいました。北当・南当といっても、村を位置的（地理的）に二分して北部と南部に分かれていたわけではなく、それぞれに属する家は村の中ランダムに散らばっていました。平成12年に北当と南当が統合したのは、村人口の減少により、お当人の確保の問題が起こったからです。

すべ切り

すべ切り行事は、お当渡しのとき神前に供えられる餅を搗く行事で、大当・歩射当・大当が依頼した手伝い人･宮総代・新歩射当が参加します。餅は、神前に供える６升の「大鏡餅」、小宮用の「御供餅」、村人に振る舞う「手の窪餅」、神主やお寺や手伝い人に配る「すべ切り餅」の４種類です。餅の下に藁すべを敷いたすべ切り餅は、藁すべでも切れるくらいやわらかいことから「すべ切り餅」といい、その名がそのまま行事名になりました。

すべ切りは公民館で行われます。公民館裏に小屋がけし、床に藁が敷き詰められた「搗き場」が設定され、中央に置かれた臼や手水用のバケツと入り口には注連縄が張られます。12本（閏年は13本）の横杵が、村の大工さんによって毎年新しく作られます。



準備が整った搗き場

手伝い人の中で重要な役割を担うのが、「オバン」と「釜屋」です。オバンは搗き場で餅つきの采配をし、釜場担当の「釜屋」は、行事全体を監督します。



釜場の風景

早朝、釜屋がカマドの薪に点火して行事が始まります。まず最初に、大鏡餅を搗きます。大当を含む手伝い人全員とオバンは、頭に手ぬぐいをかむり、割烹着を着て、草履を履き、口に榊の葉をくわえ、無言で６升の餅を２臼搗きます。搗き上がると、大当２人は稲荷神社へ行き、大鏡餅が無事搗き上がった事を報告します。



大鏡餅を搗く

次に、御供餅、手の窪餅、すべ切り餅の順に搗いていきます。まず、オバンが「めでためでたの若松様よ…」唄う石づき唄（すべ切り唄）に、「のほほい・なんじゃいの～瓢箪じゃい」と、なんとも楽しい合いの手を入れながら、約10人の搗き手が、小さく搗くコヅキをします。コヅキ終わりに「あ～繁盛繁盛・ほぃほぃほぃほぃ」と全員で餅を高く差上げます。コヅキが終わると、４人で大きく搗くオオヅキをします。唄は唄わず、「中しょう・底見い・むこ取れ・まわして・ちょうれん」というオバンの独特の指示に従って搗いていきます。

そして搗き上がった餅は、宮総代が整えていきます。御供餅は３種類の大きさに丸めます。



石づき唄に合わせての餅つき



宮総代が餅を丸めていく



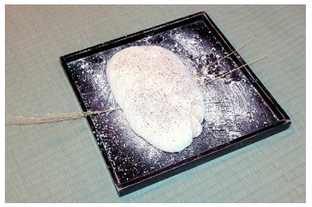
村人に接待



搗き上がった大鏡餅等

手の窪餅は、「ごぼうのはりはり」とともに村の人に振る舞われます。「ごぼうのはりはり」は、牛蒡の白和えで、鷹の爪を加え辛く味付けしてあり、大当の奥さんによって作られます。熊野部では、この日だけに作られる行事食です。

八寸膳に藁すべを敷き、牛の舌のようになった餅をのせ、小豆と餅とり粉を混ぜた小豆粉を振りかけた餅がすべ切り餅です。大当は、すべ切り餅の用意ができ次第、お寺（阿弥陀寺）や手伝い人宅へ配っていきます。餅は、全部で３斗６升も搗き上げられます。



すべ切り餅

お当渡し

熊野部では、年頭に豊作を祈願する「弓射神事」が行われ、その後にお当渡しが行われます。

お当渡し当日の午前中、歩射当とその手伝い人は、的を新しく張り替え、境内に的台を作ります。的の裏には宮司によって「鬼」と書かれた紙が貼り付けられます。大当は本殿の祭壇を



的を仕上げる当人

整え、お当渡しの準備をします。

午後には、すべ切りで搗き上げた大鏡餅とお当事箱を持った２人の大当とそれぞれの手伝い人１人が、この日のために新調された門松をくぐって、稲荷神社に向かいます。この時、コモに包まれた大鏡餅は、大当の肩に担がれますが、担ぐ肩を替えてはいけないと伝えられています。



的裏に貼られた「鬼」の墨書



大鏡餅を神社に運ぶ大当

神社拝殿でお当渡し開始の触れ太鼓が叩かれ、宮司・宮総代・大当・歩射当・新歩射当が幣殿に、区長・氏子は拝殿に着席します。神事とお当事箱の交換が終わると、歩射当は新大当となります。

境内では、いよいよ、新大当による「弓射神事」が行われます。新歩射当が新大当に矢を渡し、１人12本（閏年は13本）の矢を射ます。的の裏中央の、鬼の字を射貫くと今年は豊作と伝えられます。弓射神事が行われている間、幣殿では新大当の手伝い人が大鏡餅を切り分けます。切り分けた餅は、半紙に包み紅白の水引を掛け、氏子に配ります。その後、直会が行われ、お当渡しは終了します。

その後、新大当は手伝い人とともに自宅に帰ります。手伝い人が注連縄を調えて、お当事箱と玄関に取り付けます。お当事箱を預かる大当と歩射当の家の玄関には、１年間注連縄が飾られます。

かつては、お当渡しには「牛玉宝印」の護符が刷られ、村人に配られていました。その風習は、昭和の前半には途絶えてしまいましたが、神社に残された版木がそれを物語っています。（早崎・宮原）



「牛玉宝印」版木





弓射神事



お当渡し後の挨拶

調査年月日　2008年１月26日・２月３日
2011年１月30日・２月６日
2012年１月29日・２月５日
調査場所　加美区熊野部　公民館・稲荷神社

⑰門村（かどむら）　亥祭（いまつ）り

厳島神社（いつくしまじんじゃ）

宝徳４年（1452）の棟札が存在することから、確実に中世にさかのぼる神社です。隣接する浄（じょう）居寺（こじ）の鎮守社ともいわれ、戦国期には当地域を治めた杉原兵太夫安久が、構居内に当神社を取り込んで守護神としたとも伝えられています。

近世には当社で猿楽三太夫が、年３回の面掛け行事を行っていたことも、古文書から確認されています。



厳島神社

亥祭り

門村のお当人は２人で、20年に１度のくじ引きで、順番が決められています。亥祭りは、厳冬の２月の亥の日の早朝から、このお当人が参拝者を接待する行事です。２月に亥の日が２回ある場合は初めの亥の日に、３回ある場合は中の亥の日に行われます。

お当人は早朝に本殿・小宮・石灯籠・狛犬に御神酒鈴と鏡餅を供え、昨夜から本殿に供えておいた御供さん（きな粉をまぶした餅）を下げて、切り分け、半紙に包んで準備を整えます。



早朝からの準備

午前７時前には、参拝した村人に御神酒を振る舞い、御供さんを配っていきます。

午前９時頃まで村人の参拝を待ちますが、その後、参拝されなかった村人宅にも御供さんを配って、すべての世帯に御供さんが届くようになっています。



参拝者に御神酒の接待

門村では、亥（いのしし）は多産であり、子どもが丈夫に育つことにあやかり、亥の日に亥祭りを執り行うと伝えられていますが、本年の豊作を祈願する春の予祝行事でもあると考えられます。

現在の厳島神社での例祭は、秋祭りの門村神楽が中心となっていますが、門村に残されている明治４年（1871）の神社取調書上帳には、弁天宮（厳島神社）の祭礼日が２月の初亥の日とされており、かつては盛大な祭りであったことが分かります。（宮原）



秋祭りでの神楽奉納

調査年月日　2010年２月６日
調査場所　加美区門村　厳島神社

⑱中村町（なかむらまち）　薬師祭り（やくしまつり）

薬師堂

中村町の薬師堂は、茂利地区内にあります。この地には、近世から中村町の善福寺阿弥陀堂（ぜんぷくじあみだどう）が存在していました。こうしたあり方は、中村町が、茂利と奥中から分村された村として成立したことに由来しています。かつて薬師堂は、中村町コミュニティセンター近くにありましたが、戦後、現在地（善福寺跡）に移築されました。

本尊は薬師如来で、脇侍の日光菩薩や月光菩薩、十二神将、阿弥陀如来やそのほか数多くの仏像が安置され、長寿会によって管理されています。



薬師堂

薬師堂の行事

薬師堂では２月・５月・12月に行事があり、長寿会主催の数珠繰りが行われます。そのうち２月が大祭で、この日に量興寺の牛玉宝印（ごおうほういん）のお札が配られます。年３回の行事で供される大根煮（２月）、竹の子ご飯（５月）、ぜんざい（12月）を長寿会のメンバーはとても楽しみにされています。

薬師祭り

当日、堂内はきれいに掃除され、本尊前に設えた祭壇には大根が供えられます。横の柱には、「中村町薬師堂本尊医王薬師瑠璃光如来真言加持大根」と記された、真新しい量興寺の祈祷札が掛けられています。「牛玉宝印」の札は量興寺で加持祈祷され、長寿会が用意した細竹に挟んであります。この大祭には、区長や村役員も参加します。



数珠繰り

午前10時に量興寺住職の読経が始まり、読経後、住職も参加して数珠繰りが行われます。輪の中央で先達が木魚を叩き、皆で数珠を廻しますが、回数は決まっていなくて住職の合図で終了します。

その後、煮含められたおいしそうな大根煮で、お斎（とき）（会食）が始まります。



おいしそうな大根煮

古来より、大根を食べると中風よけ、無病息災や長寿の御利益があるといわれ、その祭りが12月に京都で多く行われています。この薬師堂のお祭りも、これに倣ったものでしょうか。お斎が終わると、参加者は牛玉宝印札をいただいて帰り、お札を畑などに立てます。（早崎・宮原）



「牛玉宝印」札の配付

調査年月日　2012年２月８日
調査場所　　中区中村町　薬師堂（善福寺）

⑲東山（ひがしやま）　永代経（えいたいきょう）

正福寺（しょうふくじ）

正福寺は、永仁２年（1294）に創建され、慶長年間（1596～1615）に浄土真宗となったと伝えられるお寺で、本尊は阿弥陀如来です。

この正福寺では、毎年亡き人をしのび、永代までお念仏を伝えていくための永代経法要が行われます。



正福寺

ごよくさん（くしもり・お華束（けそく））と永代経法要

永代経法要に向けての準備をするのは、村でお寺の行事の世話をする年行事の当番です。年行事は、隣保単位で1年ごとに村の中を順に廻っています。

餅の塔のような「ごよくさん」を用意するのは、年行事とは別の餅作りの当番隣保です。２斗２升の糯米を蒸した後に餅つき機で搗いて、大きく伸した餅を型抜きで抜いて、直径2.5～3.0㎝の小さな餅を作ります。その小餅を串に刺し、串24本を高さ約30㎝の円柱の周囲に並べて、ごよくさんが完成します。

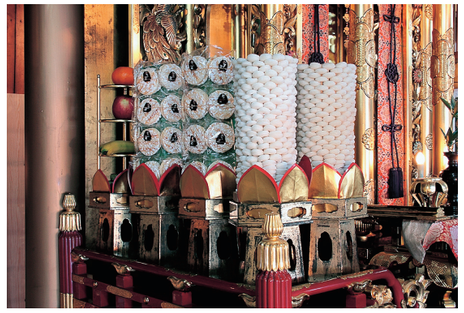


小餅作り

一つのごよくさんに、小餅が約340個ほど使われ、14個のごよくさんを作るには5,000個近くの小餅が必要です。小餅の刺し方にはちょっとした工夫がいるようですが、餅当番も手伝いに来られた方も手慣れた様子で、次々と餅の塔ごよくさんを作り上げていきます。このごよくさんの餅は、翌日に下げられ、門信徒に配られます。



「ごよくさん」の積み上げ



供えられた「ごよくさん」

仏前にはごよくさんのほか、六角柱の台に貼り付けたお菓子や段盛した果物を供笥に盛ったものが供えられ、とても華やかです。このごよくさんは、永代経と報恩講（12月）に供えられます。

この後、正福寺に門信徒が参詣し、法要が執り行われます。（早崎・宮原）

調査年月日　2008年２月10日
調査場所　　中区東山　正福寺

⑳箸荷（はせがい）　百々手祭（ももてまつ）りとお当渡（とうわた）し

大歳神社とお当

大歳神社は慶長年間にはすでに存在しており、本殿は元禄13年（1700）に再建されています。箸荷・中島・門村３ヶ村の氏神でしたが、明治になって門村が分離しました。



大歳神社

百々手祭りお当人は、家順に回っています。７人で務め、７月の川裾祭りも担当します。村内には、ほかに大歳神社のお当人２人、毘沙門堂の「権現さん」と呼ばれるお当人２人があります。

準備

朝４時半から公民館で、百々手祭り当人と家族によってコメ粉の団子が作られます。各当人は米３升を持ち寄ります。かつては、氏子全戸から３合ずつ米を集めていました。



早朝の団子作り

午前11時から神社での準備が始まり、本殿や小宮さん、石灯籠、狛犬などに団子を供えます。手水盥には注連縄を張ります。本殿の神前には、他に神酒、百々手祭りのお当事箱、榊、神事用の弓矢が置かれます。拝殿ではヒバの葉を敷き団子３個をのせた「おへん」（縦10.5cm、横21.5cm、高さ3.5cmの木製容器）、箸、盃を置いた席が40数席用意されます。おへんは、大歳神社の本当を受けた人が、毎年2つずつ新調して奉納しています。

拝殿右の境内には、的が準備されます。的と弓矢は毎年新調され、神事前日に当人が作成します。的は一辺145cmの正方形で、中央に「鬼」と書いてから黒く塗りつぶします。この的を高さ４メートル弱の竹に取り付けます。弓の長さは２メートル余り、１メートル余りの矢は12本、閏年は13本作られます。



的作り

百々手祭り

午後１時前、神主が参拝。略礼服のお当人代表は拝殿で参加者（戸主）を迎え、その挨拶を受けます。餅投げ用の餅や菓子の御供えを持参する人もいます。

午後１時、拝殿に全員着席して神事が始まります。神事が終わると、区長の事務連絡があり、その間にお当人は直会の準備をします。区長の話が終わると直会が始まり、午後２時頃まで続きます。



出席者の挨拶を受けるお当人



神事後の直会

お当渡し

お当渡しは、区長の合図で始まります。お当人代表がお当事箱を扇子に載せ、平伏している参加者の頭上に掲げるようにして回っていきます。回り終えると、お当事箱は新当人代表に渡され、神前に置かれます。その後、幣殿を背に神主・区長が並んで座り、その前にお当人代表と新当人代表が向かい合って座ります。神主・区長の向かいにお当人２人が手伝い人として座り、手伝い人の酌で旧当人・新当人・区長が神酒を酌み交わします。この盃事で、お当の引き継ぎは終了します。お当渡しの間、参拝者には団子が配られます。



お当事箱の引継

お当渡しは10分ほどで終了し、弓射神事が執り行われます。拝殿の中から、宮司、区長、お当人、厄年の人たちが用意された的に向かって矢を射ます。大勢の参拝者がその様子を見守り、矢が射られる度に子どもたちが落ちた矢を競って取りに行っていました。この矢は魔除けになるとされ、拾った人は家に持ち帰って玄関や床の間に飾るそうです。弓射神事が終わると餅投げがにぎやかに行われ、百々手祭りの神事は終了します。お当人らが後片付けをし、使用した的が燃やされます。



拝殿からの弓射



矢を拾う子どもたち

特徴

百々手祭りは、古くは２月卯の日に行われました。正月に弓射神事を行う事例は各地で見られ、的に鬼の字を書くところも少なくありません。年頭に当たって魔を祓う、村内の安全・平安を願う意味を持つ神事だったためでしょう。

百々手は弓術で矢２本を一手と数え、矢数200を百回で射ることをいいます。箸荷では12本（閏年13本）を射ますが、これは新しい１年を占う神事だったことを推測させます。百々手祭りは、五穀豊穣を祈る大切な祭りだったといえるでしょう。大歳神社の当人とは別に百々手祭りのみの当人が７名あること、この日にオトウの引き継ぎが行われることは、百々手祭りの重要性を示すものといえます。（埴岡）

調査年月日　2008年・2012年・2013年２月11日
調査場所　加美区箸荷　公民館・大歳神社

㉑西安田（にしやすだ）　当勝祭り（まさかつまつ）

当勝神社

西安田には、長野地区花の木谷と大歳神社の境内末社に当勝神社があります。大歳神社の当勝神社は明治42年に長野地区から分祀したと伝えられ、村内で当勝祭りが同じ日に２ヶ所で行われています。

当勝神社の祭神は、勝利を呼び込む開運の神とされています。当地では「当勝大明神」といわれていますが、当勝大明神と稲荷神が同一視されていて、氏子は「当勝稲荷」とか「コンコンさん」とよび、この日の祭りも初午のお祭りなのです。



山裾の鳥居



当勝神社

長野地区　当勝祭り

当勝神社の当番は２人で、長野地区の中を順番に廻っています。祭り当日の午前中、当番は掃除をし、赤い幟を立て、御供えを整えて祭りの準備をします。御供えのお神酒は村会計から、



参拝し御供えをする氏子

直会のイリコやするめは当番が用意します。

午後３時頃になると、長野地区の人々が餅や菓子の御供えを持って参拝します。事前に当番が頼んでおいた氏子の方により、祝詞が奏上された後、お神酒やイリコが振る舞われ直会が行われます。氏子が持ち寄った御供えを、２人の当番と地区の長老がまく福投げが行われ、お菓子をひろう子どもたちのにぎやかな声が響いていました。



長老による神事



福投げ

町内の当勝神社

八千代区坂本・中区坂本・中区東安田・中区西安田の４つの地区に存在します。そのうち、中区坂本の二社神社に合祀されている当勝神社は、朝来市山東町の當勝神社から勧請されたと伝えられています。（早崎・宮原）

調査年月日　2010年２月14日
調査場所　　中区西安田　当勝神社

【アラカルト１】
トウヤの「オハケ」

中区間子、加美区豊部・山野部では、オトウを受けたオトウ人の家（トウヤ）に、「オハケ」が立てられます。オハケは、オトウ人の家であるということを村内に知らしめる印であるとともに、神霊の依代であると伝えられています。

山野部のオハケを見てみると、４本の皮をはいだ杭を地面に打ち込み、その周囲に竹を巡らせ注連縄と御幣を配して整えるとともに、上面を割り竹で作りつけて、供え物を置きます。その中央には高さ４mにもなる竹が立てられ、その先端には、白い紙で藁を包み御幣を挿した「まきわら」が括り付けられます。また榊もこの竹に添えられています。

こうしたオハケは、いつ頃からトウヤに立てられるようになったのか明らかでありませんが、山野部の元文３年（1738）のオトウ文書には「まきわらニさし御はけ様」と確認できることから、少なくとも江戸時代中期頃には存在していたことがわかります。

間子と豊部のオハケは、この山野部のオハケより簡略化が進んでおり、「オシバタテ」と呼ばれる豊部のオハケは杭を打ち付けるのではなく、移動可能な形態となっています。

中区間子、加美区豊部ではオハケは、オトウ渡し前にトウヤに立てられ、１年間トウヤを見守っています。加美区山野部では、オトウ渡し・秋祭り・年末の御幣切りの計３回、オハケが注連縄とともに新しく立て直されます。（宮原）





オハケ（山野部）



オハケ（間子）



オシバタテ（豊部）

㉒森本　初午当、春祭りとお当渡し

大歳神社と日吉神社

延宝５年（1677）の糀屋村検地帳に、大歳大明神境内の名があり、「但し森本村支配」と記されていて、現在も隣村の同地に所在します。この大歳神社は、糀屋の稲荷神社の御旅所だったと言われています。



大歳神社

大山咋命を祀る日吉神社は、比叡山延暦寺の地主神である、大津市の日吉大社から勧請されたと伝えられています。寛永13年（1636）再興の棟札があり、中区では最も古い神社建築です。本殿の正面と左右のカエル股には、日吉神社の神使である「三猿の教え」の猿の彫刻が刻まれています。



日吉神社

初午当

森本では、３月初午の日に大歳神社で弓射神事が行われます。お当の当番隣保と宮総代や区長など村役員が出席し、神事の後、全員で交代しながら矢を射ます。そして御神酒とイリコで直会が行われ、祭りは終了します。かつて、お当渡しはこの初午当の後に行われていましたが、平成元年頃に４月の春祭り後に変更になりました。



初午当の弓射神事

春祭りとお当渡し

森本のお当は、昔は一代当で、本村から日吉神社のお当人３人、太下地区から大歳神社のお当人３人を選んでいましたが、昭和55年頃に隣保当になりました。お当事箱（おとんじょさん）は２箱あります。

春祭りの朝、本村の氏子は日吉神社、太下地区の氏子は大歳神社の掃除をします。午前９時、宮総代・区長・当番隣保代表と太下地区氏子が大歳神社に参列し、宮司による神事が執り行われます。そして、午前10時、宮司以下役員は日吉神社に移動し、本村氏子が参列し神事が行われます。

春祭りの後、公民館でお当渡しが行われます。祭壇には御神酒等神饌のほか、お当事箱２箱、初午当で使われた弓と矢、的の尺竹（平成23年復活）が供えられています。午前11時、宮司による神事の後、新旧当人代表２人ずつでお当渡しの儀が行われ、宴が始まります。

（早崎・宮原）



お当渡しの神事

調査年月日　2009年３月２日、2012年４月15日
調査場所　中区森本　大歳神社・日吉神社・公民館

㉓曽我井　初午当とお当渡し

大年神社とお当

慶長以前より鎮座しており、明治以降「大年神社」と表記されるようになりました。



大年神社

お当は「初午当」と呼ばれ、隣保当で1年交替で務めます。什長が当人代表。お当事箱・弓矢を保管します。昭和46年以前は男子のみの永代当で、「マト当」「アサ当」「アイ当」の３名を籤引きで決めました。移住者は10年住むと籤を引く事ができました。

準備

お当人が幟立て、社殿の幕張、的張りなどの準備を行います（基本的には前日）。的は一辺60cmの六角形、中心に「鬼」の字を書き塗りつぶします。この鬼を射ることが大切とされます。また、参拝者全員に配る「花ガラ」を作ります。花ガラは、直径11.5cmの小さな的に長さ22.5cmの竹の柄を付けたもの。子宝祈願・五穀豊穣の意味があるといい、神前にも供えます。お当人代表は家の床の間にお当事箱を祀る神棚を作り、神棚や軒に注連縄を張ります。



花ガラ

弓射神事とお当渡し

午後12時半、役員・新当人が参拝してくると、２名のお当人が御供と神酒とを授けます。全員が揃ったところで、弓射神事が始まります。



弓射神事

拝殿前から鳥居の外に置かれた的を矢で射ますが、特に順番などは決まっていません。

１時前に儀式は終了し、お当渡しが行われます。幣殿に祭祀担当役員１名が上座、両側に旧当人３名、新当人３名が向かい合って、他は拝殿に座ります。幣殿の役員が祝詞を奏上、お祓いをします。役員が旧当人代表の背にお当事箱



「扇子」の引継

に入っている「扇子」を差し、旧当人３名は神酒を戴きます。その後、新当人代表の背に「扇子」を移し、同じように神酒を戴きます。区長の挨拶で引き継ぎは完了し、神社に隣接する公民館で直会となります。



「扇子」

特徴

曽我井は、糀屋の稲荷神社の氏子村のひとつで、文化年間までは同社の弓射神事のお当を順番で務めたとされます。今は、村の氏神である大年神社のみで初午に弓射神事を行っています。

（埴岡）

調査年月日　2008年３月２日、2011年３月６日
調査場所　中区曽我井　大年神社

㉔安坂（あさか）　初午祭（はつうまさい）と初午当（はつうまとう）

稲荷神社初午祭

稲荷郷の郷社である糀屋の稲荷神社は、糀屋･安坂･坂本･曽我井･森本の５ヶ村が氏子となっていますが、現在、「初午祭」に参加するのは糀屋･安坂･坂本の３ヶ村です。初午祭の神事が行なわれた日の夜、それぞれの村でお当渡しが行われます。３ヶ村では、これを「初午当」と呼んでいます。

３月の初午の日、糀屋・安坂・坂本のそれぞれの宮総代､区長、３人のお当人は全員略礼服で、稲荷神社社務所に集合し、宮司を上座にして、決められた席に着席します。挨拶が交わされた後、神社に向かいます。神社拝殿には、前日に持ち込まれた３ヶ村の的が置かれています。



宵宮に収められた３ヶ村の的

午前10時、宮司の太鼓の合図をもって神事が始まります。神事と直会が終わると、境内で弓射神事が始まります。境内には糀屋が用意した的台に、拝殿に近い方から糀屋・安坂・坂本の順に的が置かれ、全員が自分の村の的に向かいます。的の裏の中心には「鬼」と書いた紙が貼られ、これを射貫かないといけません。こうした弓射神事が終わると、的は村に持ち帰ります。



神事



弓射神事

安坂の初午当

安坂では、昭和45年頃までは稲荷神社の世話をするお当人は１人で、一代当でしたが、現在は隣保当となり、１年ごと順番に隣保でお当を受けています。お当事箱は天保12年（1841）の銘が入ったものを含め２箱あり、お当を受けた隣保代表が預かります。

お当を受けた隣保は、午前中に公民館で初午当の準備をします。机や椅子、湯飲みや銚子など用意した後、祭壇を整えます。祭壇の中央に神号の掛け軸を掛け、榊を供え、１段目にお当事箱２箱、初午祭のお下がりの御神酒と赤飯、塩、くじ３本を挿した白米入り一升枡を、２段目には海のもの山のもの、３段目には雄蝶雌蝶、松竹梅の飾り物を供えます。神社から持ち帰った的と弓矢も供えられます。矢筒には伝説の「的の尺竹」が括り付けられています。



お当渡しの祭壇

初午当のお当渡し

夜になると、座敷持とよばれるお当人代表が、公民館入口で氏子の挨拶を受けます。式が始まると、御神酒が雄蝶にて全員に注がれ、榊の葉をお皿代わりにして赤飯とイリコが配られます。酒肴でしばし歓談の後、新当人を選ぶためのくじ引きが行われます。

区長や社寺委員の前に、くじが挿された一升枡が置かれ、３つの隣保から３人ずつ前に出て着席し、それぞれの隣保代表の１人がくじ引きをします。そして、社寺委員より新当番隣保が決定した旨が発表されますが、お当は隣保単位で順に受けることが決まっているため、このくじ引きは形式だけのものとなっています。



くじ引き

くじ引き後、新旧当番隣保より各３人ずつ出て、お当渡しの儀が執り行われます。まず、盃の交換が行われますが、ここで男児２人が登場します。ひとりは御神酒を注ぎ、もうひとりは肴（漬け物）を箸で挟み上げ、「おさかなこれに」と告げる役を担います。盃の交換は、御神酒を注ぎ、謡が謡われ男児の「おさかなこれに」合図の後、酒を飲み干します。これを、区長・旧当人・区長・新当人・区長の順に行います。お当渡し終了後、全員に大盃のお酒が廻ります。



盃事での「お魚これに」

閉会の後、お当事箱、榊、掛け軸、弓矢（的の尺竹）を持つ新当人を、全員で祇園囃子を唄って見送ります。



一升枡に立てられたくじ



「お魚これに」の肴



新当人を送る

的の尺竹

現在、矢筒と一緒に保管されている的の尺竹は、全長74.0㎝の漆塗りで、両側に刻み目が入っています。『中町誌』によると、「この尺竹は氏子五ヶ村一村なりとの意味で、古く糀屋大歳神社境内の藪の一本の竹を五つに割って作った物で、初午当唯一の神霊として大切に扱う」とあります。



矢筒に括り付けられた尺竹

隣保当になった今も、お当渡しの儀式の中で的の尺竹が引き継がれているという事実は、お当を象徴し、大事なものという意識が残っているといえるでしょう。なお、稲荷郷5ヶ村の中で的の尺竹が残っている地区は、安坂・糀屋・坂本で、森本では近年復元されました。

（早崎・宮原）

調査年月日　2010年３月９日ほか
調査場所　中区糀屋 稲荷神社（初午祭）
安坂公民館（初午当お当渡し）

㉕中野間（なかのま）　オトウ渡（わた）し

大歳神社とオトウ

大歳神社の創立ははっきりしていませんが、社殿の上に覆屋を設けて大切に祀られています。

オトウ人は１組５名前後の組で務めます。11組あり、オトウに当たる組と年をオトウに入っている人全員のくじ引きによって決めます。全ての組がオトウを務め終えると、再びくじ引きが行われます。



大歳神社

準備

オトウ人は当日までにオトウ全員の家を触れ回り、出席者数を確認します。当日朝、大歳神社の掃除、幟立て、榊立てなど準備を行います。供物は、重ね餅・赤飯・洗米・「ごくうさん」（３㎝×５㎝の餅を半紙で包み５本の水引を掛けたもの）など。公民館には祭壇が設けられ、「大歳神社」の掛け軸が掛けられます。11時前に、オトウ人は大歳神社から神酒と供物を下げます。



整えられた祭壇

オトウ渡し

オトウ渡しは、正午に始まります。旧オトウ人代表と新オトウ人代表が玉串を奉奠、全員で拝礼した後、洗米を付けた赤飯と神酒が参列者に配られ、直会となります。その後、上座に新オトウ人の席が設けられて、旧オトウ人が接待する祝宴が催され、「桝返し」の儀式が執り行われます。新旧のオトウ人が向かい合って座



オトウ人による神事

り、旧オトウ人が枡に洗米少量を入れ、洗米が枡の４隅を通るように回し、掛け軸の箱上蓋に流し入れて、新オトウ人の方へ移動させます。新オトウ人は枡でこれを受け、枡を同様に回します。この所作を2度繰り返し、全員で「おめでとうございます」と唱和して、オトウ渡しが終了します。



「桝返し」の儀式

特徴

「桝返し」の儀式は現在は掛け軸の箱蓋を使っていますが、お当事箱があった時代はその蓋で行われていたのかもしれません。中区奥中のオトウ渡しでは、お当事箱に載せた洗米を枡に移す儀式が見られます。年貢米を量る村の枡が重要だった時代を思わせる、貴重な習俗といえるでしょう。（埴岡）

調査年月日　2009年３月８日
調査場所　八千代区中野間　大歳神社・花の宮公民館

㉖東安田（ひがしやすだ）　武嶋山（たけしまさん）　柴燈護摩供（さいとうごまく）

武嶋山

奇岩がそびえ立つ景勝地の武嶋山は、大正９年（1920）に数多くの信者の寄進をもとに、中安田の伊藤宇之助氏（大律師真明）によって開かれた四国八十八ヶ所、番外十三ヶ所、西国三十三ヶ所の石仏が参道に並ぶ霊場です。昭和23年（1948）には、大峰山を模した行場が、成田山笹倉明栄師によって造られ、この年に近隣の山伏40数人が参加した柴燈護摩が行われています。



岩肌がそそり立つ武嶋山

武嶋山の麓にあるひぐらし荘から参道を登ると、中腹にかつて清厳寺（せいがんじ）と呼ばれていた観音堂があります。貞享元年（1684）の銘がはいった十一面観音を本尊とする堂で、「武嶋の観音さん」と親しまれています。この観音堂脇から、立岩に彫られた摩崖仏を望むことが出来ます。

柴燈護摩供

毎年3月、観音堂境内で柴燈護摩が行われていたのですが、高齢化社会を反映して、麓のひぐらし荘前に護摩壇が作られるようになりました。準備する当番は、東安田の村を半分に分けて１年ごとに交代します。行法を行う６人の山伏も高齢化により引退者が出たため、数年前から村の有志がその役を担っています。

ひぐらし荘の仏前で読経をすませた山伏たちは、村内行脚に出発します。まず、安田神社に参拝し、村の西端を廻り、岩神さん、西向き地蔵を巡り、それぞれの場所で読経し、村の東南端にある武嶋山に戻ります。成田山の僧侶を迎え、観音堂前で読経後、護摩供養が始まります。



山伏による村内行脚

山伏問答、法弓など一連の所作が終わると、結界の中の護摩壇に火が移されます。山伏が真言を唱え読経する中、僧侶は村人が収めた護摩木を護摩壇に投げ入れ祈祷します。願いや悩みや災難を護摩木にうつし、真理の火で燃やし、祈願するのです。



柴燈護摩供

護摩壇が燃え尽きると、「火渡り」の行が始まり、参拝者は無病息災を願って、燃え残った丸太の上を裸足で渡ります。（早崎・宮原）



火渡りの行

調査年月日　2007年３月11日、2011年３月13日、2013年３月10日
調査場所　中区東安田　武嶋山 観音堂（清厳寺）・ひぐらし荘

㉗寺内　地蔵堂のお当渡し

本村　地蔵堂と「地蔵当」

寺内には本村と枝地区の２ヶ所に地蔵堂がありますが、本村の地蔵堂には「地蔵当」というお当があります。一組５～６人でお当を受け、本村の中を順番に廻っています。お当人は１年間、地蔵堂と郷社である荒田神社の神宮寺の世話をします。「おとぼりさん」と呼ばれるお当事箱がありますが、これはお当人の代表が預かります。お当渡しは、３月の村の総会が行われる前に、新旧当人のみで行われます。



本村地蔵堂

お当渡し

お当渡し当日の朝、お当人は御供え等の準備をすませ、参拝者を迎えます。村人は、総会に出席する前に地蔵堂に参拝し、御供えの酒とイリコと切り餅で接待を受けます。参拝者が途絶えると、旧当人、新当人は地蔵堂の前で向かい合い、お当事箱が渡され、お当渡しが終了します。



お当事箱の引継

「牛玉宝印」

天保９年（1838）の銘の入ったお当事箱には、元禄12年（1698）の「御地蔵当覚」が存在し、





地蔵堂の参拝

現在に至るまでのお当人の名が、書き連らねられています。現在もお当を受けると、名前の帳付けを行います。また、「牛玉宝印　地蔵堂」と書かれた護符が残されています。全て墨書で、中央に朱で印が押されているものと、朱墨で梵字が書かれているものがあります。お当事箱内の文書に、僧侶に謝礼を払っていたことが記されていることから、この牛玉宝印のお札は、僧侶による加持祈祷を受けた後に配付され、村人は五穀豊穣を祈って、苗代田に挿していたのでしょう。（早崎・宮原）



お当事箱内の「牛玉宝印」札

調査年月日　2009年３月15日、2012年３月11日
調査場所　加美区寺内　本村の地蔵堂

㉘奥豊部　永代経

浄照寺

浄土真宗の総道場として栄えていた浄照寺は、寛政年間（1789～1801）に阿弥陀如来を本尊として勧請したと伝えられています。現在浄照寺は、３人の寺総代と４人の「年行事」とよばれる寺役によって維持管理されています。



浄照寺

数多くある年間行事のなかで、３月の永代経と10月の報恩講のときに、小さな餅を串に刺して円柱の廻りに巡らせた餅の塔の「飾り餅（お華束）」を作ります。

餅つき

永代経法要前日、年行事の家の女性４人が中心となり、公会堂で餅つきが行われます。１軒に４合ずつ糯米が集められ、全部で１斗４升８合の餅を搗きます。それを型で抜いて、直径約３cmの小さな餅にしていきますが、できたての餅は柔らかく、串に刺せないので、翌日まで板の上にねかせておきます。



小餅作り

飾り餅と永大経法要

当日の午前中、浄照寺で、年行事の男性４人が中心となり、飾り餅作りが行われます。小餅を竹串に刺した後、六角形の台坐をもつ高さ約30cmの円柱の周りに、竹に刺した小餅を輪ゴムや紐で固定していきます。餅は互い違いに刺して整え、頂上には串の先端を覆うように直径約10cmの大きめの餅を載せて、飾り餅が完成します。昔は、餅に赤・黄・緑の色を付けたので、よりいっそう華やかだったようです。

男性たちによって飾り餅が作られている間に、年行事の女性たちは、菓子や果物や花を供えていきます。菓子も、木で拵えた六角柱を半裁したものに括り付け、菓子の塔を作ります。花の主体は雄松と、地元で「ウサギチャ」と呼ばれている常緑樹です。松とウサギチャに色とりどりの花を添えていきます。最後にお堂の周りに幕が張られ、準備は終了します。



「飾り餅」の積み上げ



供えられた「飾り餅」

夜には檀家が参集し、永代経法要が執り行われます。（早崎・宮原）

調査年月日　2011年３月11・12日
調査場所　加美区奥豊部　公民館・浄照寺

㉙多田（ただ）　春祭り（はるまつり）

春日神社と秋葉神社のお祷

多田の東の山に沿って、南から諦願寺（たいがんじ）、秋葉神社、春日神社があります。春日神社は、多田と棚釜（たなかま）の氏神で、棚釜は昔、多田仲間村といい、多田から分かれた村なので、同じ氏神を祀ります。



春日神社

お祷は、棚釜のお祷人１人を含む６人で構成され、かつては一代祷でしたが、今は村の中を順に廻っています。５人の中の１人が祷人の中心であるお祷屋（神主）となり、お祷屋だけが本殿内に入れます。また、お祷屋では「かみさん」とよばれるお当事箱を祀ります。お祷人は春日神社のほか、秋葉神社と山の神神社の世話をし、年４回、春夏秋冬のお祭りを執り行います。

春日神社春祭り

３月18日に、春日神社の春祭りと秋葉神社祭りが行われます。神前には、御神酒、鏡餅二重ね、白むし、洗米、塩、野菜、活鯛が供えられます。御供えの中で特に目を引くのが活鯛です。『兵庫県神社誌』には、神社記録として「御供壱膳魚味」とあります。春日神社では、魚を必ず御供えの一つとする慣例があったのでしょう。



活鯛を含む供え物

多田のお祷屋と棚釜のお祷人は、簡略された白装束姿で氏子の挨拶を受けます。午前10時に、お祷人、多田と棚釜の宮総代と区長、消防団代



白装束の当人

表は幣殿に、氏子は拝殿に着席し、宮司による神事が執り行われます。神事が終わると、お祷人が洗米と御神酒と白むしを配り、直会が行われて、春祭りが終了します。

秋葉神社祭り

春祭りが終わると、参列者全員、秋葉神社に移動します。春日神社から少し南側に位置する諦願寺の横が参道登り口で、



秋葉神社

鳥居横に赤い幟が立てられています。鳥居をくぐって登っていった小高い山の頂上に、秋葉神社が祀られています。神前に用意した祭壇に、運んできた供え物を祀り、神事と直会が行われた後、諦願寺の駐車場で餅投げが行われます。

（早崎・宮原）



秋葉神社での神事

調査年月日　2010年３月18日
調査場所　加美区多田　春日神社・秋葉神社

㉚的場（まとば）　天目一神社祭り（あめのまひとつじんじゃまつり）

天目一神社

的場には、郷社である荒田神社の他に稲荷神社・戎神社・金比羅神社・天目一神社の4つの神社があり、それぞれ村内の各地区でお祀りされています。

その中の一つ、天目一神社は８～10隣保でお祀りされ、「めひとつさん」と呼ばれて親しまれています。以前は４人一組のオトウが廻っていましたが、現在は隣保単位で当番を担い、御神体（鏡）の入ったお当事箱が引き継がれています。



天目一神社

天目一神社の祭神は、天目一箇命（あめのまひとつのみこと・あめののめひとつのみこと）といい、一つ目の鍛冶の神といわれています。昔、天目一神社は、荒田神社近くの勅使塚の傍にありましたが、水害により荒廃したので、「御田上」と呼ばれる現在の丘の上に遷座したと伝えられています。

天目一神社祭り

天目一神社祭り当日、当番の隣保は午前中に、山の登り口にある鳥居の前に幟を立て、参道の草刈りをします。鳥居をくぐり参道を登ると、小高い丘の上に天目一神社の小さな祠があります。その天目一神社に御神体の鏡を収め、神前に祭壇を整えて、神酒や餅等を御供えします。餅投げ用の餅やお菓子も供えられます。

午後１時になると、当番と参拝者が神社前で二礼二拍一礼した後、餅投げが行われ、祭りは終了します。（早崎・宮原）



祭りの準備



神事



餅投げ

調査年月日　2011年４月３日
調査場所　加美区的場　天目一神社

㉛田野口　名越神社のお当渡し

名越神社

名越神社は、水の神様である表筒男命・中筒男命・底筒男命・市杵島姫を祭神としています。この祭神は、住吉神社の祭神とほぼ同じです。本殿に残されている明和元年（1764）の棟札に、「奉建立住吉大明神拝殿」と住吉神社の名を確認できることから、近世には住吉神社と呼ばれていたようです。また、お当渡しには、「住吉大神」の掛け軸の受け渡しがあることは、これを傍証しています。



日参の幟


名越神社

現在、名越神社は清水寺とともに、「いやしの森」の一画に位置し、地域住民の憩いの場としての役割を担っています。

田野口のお当

名越神社のお当人は２人で、それぞれ当元、相当と呼ばれ、約12年に一度くじ引きを行い一巡りの順番が決まります。お当事箱と掛け軸の箱が２箱ずつあり、当元と相当が１ヶ月ごとに交替で預かり、お当事箱を預かるお当人が神社の世話をします。

お当渡し

当日の朝早くから、お当人は本殿前に祭壇を整え、二つ折りにした半紙に盃といりこ２尾を氏子の人数分用意します。祭壇にはお当事箱と掛け軸の箱も供えられます。

氏子全員が揃うと本殿に向かい拝礼し、区長の挨拶でお当渡しが始まります。本殿を背にした区長を挟み当元・相当の２人が座し、新当人２人と新々（翌年度の）当人２人が対面して座ります。

まず、お神酒が当元から相当、そして順に区長まで廻ります。次に、当元はお当事箱を白扇に載せ相当に渡します。相当から新当人、新々当人へと次々渡し、もう一度新当元に帰り、新当元は頭を垂れた氏子の間を廻って祭壇に収めます。氏子はお神酒と白むしをいただき、直会が行われます。最後に当元と相当が挨拶をし、お当渡しが終了します。


お当渡し

新当人２人は村の役員に付き添われ、お当事箱と掛け軸を持って、新当元宅へ向かいます。新当元宅の床の間に住吉大神の掛け軸を掛け、皆で拝礼します。（早崎・宮原）


新当人宅までの行列

調査年月日　2011年４月10日
調査場所　中区田野口　名越神社

㉜岸上　秋葉神社祭り

岸上のお当

岸上には、氏神である加都良神社の他、秋葉神社・祇園神社と御許神社があり、８人のお当人でお祀りしています。岸上では、各家一軒ごとに番号が付され、この番号順を帖口順といいます。以前は４人で一代当でしたが、平成21年から、帖口順に８人ずつで、お当が廻るようになりました。お当事箱と掛け軸の箱が引き継がれていて、１月にお当渡しが行われます。

秋葉神社

岸上の秋葉神社は、火伏せ（防火）の神として信仰を集めている、静岡県の秋葉神社から近世に勧請され、「永寿講」という講が作られて管理されていました。この永寿講は、岸上を講元として、多可町内を始め丹波市谷川や西脇市も含めた広範囲に広まっていったようです。現在は村が管理していますが、講がなくなった今も各地にお札を配っています。


秋葉神社

秋葉神社祭り

祭りの前日、お当人は公民館で御供え用・餅投げ用の餅を、糯米４斗分用意します。神社の幟は、幟を立てる当番によって立てられます。

祭り当日の午前中、お当人は秋葉神社の準備を行います。子ども神輿が村内を廻って、祭りを盛り上げ、村廻りで寄付された「花」の一部は、神社維持の費用に充てられます。

参拝者は御神酒と切り餅で接待を受け、秋葉さんのお札をいただきます。午後、氏子が揃い子ども神輿が到着すると、宮司により神事が執り行われます。神事後、幣殿で宮司が餅の投げ初めを行います。その後、参道の階段上から餅投げが行われ、祭りは終了します。


お参りする村人


子ども神輿の村内行脚


餅投げ

（早崎・宮原）

調査年月日　2011年４月16・17日
調査場所　中区岸上　秋葉神社・公民館

㉝棚釜（たなかま）　広峰神社（ひろみねじんじゃ）のお当渡（とうわた）し

広峰神社

17軒の小規模な村である棚釜には、氏神である多田の春日神社、村の大歳神社と広峰神社の３つのお当があります。

村の西の山腹に鎮座する広峰神社は、敷地面積が少ないながらも、本殿、幣殿、拝殿を持ち、隣にはこもり堂があり、植林される前は、村が一望の下に見渡せていたようです。祭神は牛頭天王で、かつては、お当渡し前に姫路の広峰神社に参拝していました。

広峰神社のお当人は１人で、毎月の清掃、お正月迎えの準備、そして、４月の祭りとお当渡しで1年を終えます。



広峰神社

お当渡し

お当渡し当日の午前中に準備を終えたお当人は、午後１時に氏子を迎えます。全員揃うと、本殿に向かって二礼二拍一礼し、般若心経を唱え、再び二礼二拍一礼するという、神仏習合の形態を取っています。



読経

洗米と御神酒とイリコで直会が行われた後、座の中央で旧当人と新当人が盃の交換をし、神前から下げてきたお当事箱を旧当人から新当人へ渡し、お当渡しが終了します。



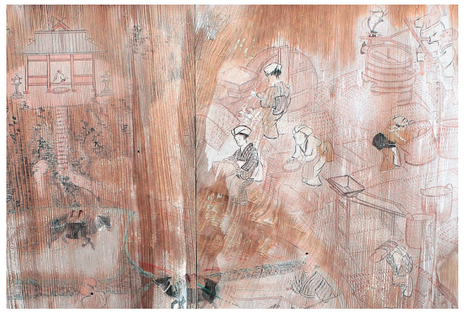
お当事箱の受け渡し

お当渡しがほぼ終了する頃、子どもたちも集まってきています。そして、村の子どもたち一人一人にお菓子が配られます。

四季耕作図

神社拝殿には、明治16年（1883）に奉納された絵馬、「四季耕作図」が掛けられています。この絵馬は、広峰神社を中心に棚釜の村の１年の農耕の様子を描いたもので、当時の農具や服装等を窺い知ることができる貴重な資料です。

（早崎・宮原）



「四季耕作図（部分）」

調査年月日　2009年４月19日
調査場所　加美区棚釜　広峰神社

㉞徳畑（とくばた）　天神社（てんじんじゃ）の春祭（はるまつ）り

天神社

徳畑の字長尾谷に鎮座する天神社は、天御中主神・高皇産霊神・神産霊神・菅原道真の４柱の祭神を祀ります。神社の背後には鬱蒼とした杉林が控え、本殿・幣殿・舞殿・拝殿・随身門を持つ堂々たる趣のある神社です。



天神社

この天神社は、奥中の熊野権現神社から分祀され、久安年中（1145～1151）に大姫山に遷し、その後火災に遭い、長尾谷の現在地に遷座されたと伝えられています。元禄年間（1688～1704）には、京都吉田神社から浦川和泉守が派遣され、近年に至るまで浦川家が神主として奉祀していました。現在は、徳畑・奥中・茂利・中村町の天神郷４ヶ村で管理をしています。

天神社　春祭り

天神社例祭の春祭りは、各村から屋台や子ども神輿が出てたいへん賑やかです。本宮当日、奥中・茂利・中村町から出発した屋台と子ども神輿は、正午頃神社に到着します。

屋台の練り入りが終わると、４ヶ村の役員が参列し、宮司による神事が執り行われます。神事終了後、神輿倉から拝殿に移された神輿に御霊が入れられます。この神輿には、「天保四年（1833）四月吉日」の年号と、「御神輿細工所 大阪北御堂前 大和屋松尾吉右衛門」と、神輿を制作した場所や細工人の名前も記されています。



屋台の宮入

神輿を担ぐのは、天神郷の男子中学生たちです。使丁（して）と呼ばれる「箒」「塩水」「切麻」の露払いを先頭に、各村役員がそれぞれ幣帛を持ち、御旅行列を組みます。



御旅



鳥居での神事

行列は随身門を出発し、途中、神輿のみ御旅所に立ち寄ります。神輿が戻ると、行列は屋台を従えて鳥居前まで行き、そこで神事を執り行います。鳥居をくぐり参道を通って再び神社に戻ると、御霊は本殿に遷されます。午後２時頃、再び屋台の練り入りがあり、餅投げが行われます。その後、社務所では直会が行われ、屋台は神社を出て村に帰っていきます。

（早崎・宮原）

調査年月日　2010年４月25日、2013年４月21日
調査場所　中区徳畑　天神社

㉟西脇（にしわき）　お日待（ひま）ち

西光寺（さいこうじ）と大歳神社

延宝５年（1677）西脇村検地帳によると、石士山西光寺は、広い境内地に、２つの院、鐘楼、寺屋敷、仁王門、権現堂等のお堂、鎮守社の大歳宮を持つ寺院でした。この大歳宮が、現在も西光寺横にある大歳神社です。



大歳神社

西脇のお当

西脇では、大歳神社のお当が一生に一度の一代当として廻っています。お当人は、本当（兄）と本当（弟）と相当の３人で、相当から入り順次繰り上がるので、３年間務めることになります。当事箱が２箱あり、「かみさん」と呼ばれる箱は大歳神社本殿に預け、お当規約や当人名簿が入った当事箱は、本当（兄）が預かります。

お日待ち

1月のお当渡しの後、お当人が係わる年間行事の中に、５月と９月のお日待ちがあります。

お日待ちの接待の準備は、前日から当人やその家族と手伝い人で行われます。料理の献立は煮染めとまぜご飯。煮染めには、５月は竹の子、９月は里芋と、季節のものを使います。鶏肉や色々な野菜が入ったまぜご飯は絶品と、村の人は自慢しています。



竹の子ご飯

お日待ち当日朝、会場である公民館の準備をします。床の間に「天照皇大神」の掛け軸を掛け、祭壇には供え物が整えられます。



祭壇

この日は午前中に村の溝掃除があり、溝掃除を終えた人々は公民館に参集し、お当人に挨拶して、祭壇にお参りします。その後、宴が始まります。

お日待ちとは、特定の日に集まったり、あるいはお籠りをすることで一夜眠らずに籠り、日の出を拝し祈る行事です。西脇では現在、夜明かしをするお日待ちは行なわれていませんが、溝掃除の慰労と親睦を兼ねた行事となって、今日も続けられています。（早崎・宮原）



当人挨拶受け



懇親風景

調査年月日　2009年５月３日
調査場所　加美区西脇　公民館

㊱山口（やまぐち）　慈眼寺（じがんじ）の花祭（はなまつ）り

慈眼寺

山口の阿弥陀堂は、かつては福聚山慈眼寺といい、雲門寺四世の天容元和尚によって、天正年間（1573～92）に開基されたと伝えられています。明治時代に雲門寺に統合されましたが、今でも慈眼寺の名で親しまれています。本尊は阿弥陀如来です。

村の中を順に廻る当番が、慈眼寺の掃除や御供えの世話をしています。慈眼寺の年２回のお祭りである、４月のお接待（数珠繰り）と５月の花祭りは、長寿会が主となって準備をします。



慈眼寺

花祭り

花祭りは、旧暦の４月８日である、新暦の５月８日に行われます。４月８日はお釈迦さんの誕生日で、「灌仏会」といってお寺では法会が営まれ、この日までに亡くなった新仏の供養も行われます。慈眼寺でも長寿会女性会員がたくさんの花を摘んできて、仏前に据える小堂の屋根を、レンゲやビオラ等の鮮やかな花で飾ります。これを「花御堂（はなみどう）」といい、この中には、甘茶の入った桶に誕生仏を祀ります。



美しく飾られた花御堂

山口の村の人は墓参りの後、慈眼寺に立ち寄ってお参りし、誕生仏に甘茶をかけ、自分たちも甘茶をいただいて帰ります。





お参りする村人

甘茶は、山野に生える蔓性植物のアマチャズルの葉を蒸して揉み、乾燥したものを煎じた飲料で、とても甘みが強いのです。誕生仏に甘茶を注ぐ行為は、釈迦誕生を祝った龍が、天から甘露を降り注いだという故事からきています。（早崎・宮原）

調査年月日　2010年５月８日、2011年５月８日
調査場所　加美区山口　慈眼寺（阿弥陀堂）

㊲下村（しもむら）　夏祈祷（なつきとう）

天船地区（あまふねちく）の冬祈祷・夏祈祷

八千代の天船４ヶ村、坂本・中村・横屋・下村では、毎年１月と７月に、安海寺（あんかいじ）による大般若経の転読が行われます。これは、冬祈祷、夏祈祷とよばれ、村内の繁栄や安全を祈る行事です。大祓は、６月と12月の晦日に行われますが、冬祈祷と夏祈祷も同じ意味合いを持つと考えられます。

下村のお当

下村では金比羅神社のお当が、２人一組で村内を順に廻っています。１月の冬祈祷の後に、お当渡しが行われます。また、冬祈祷、夏祈祷の行事が始まる前に、安海寺の版木で「奉転読大般若経息災祈処」のお札を刷るのもお当人の仕事です。

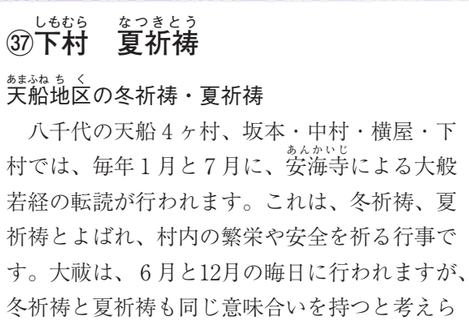
夏祈祷

夏祈祷の日、下村の住民センター入り口前には、竹が２本立てられ、竹に注連縄が張り渡されています。事前にお当人が版木によってお札を刷り、会場の正面には釈迦十六善神画像の掛け軸を掛け、お当事箱やお供え物を供えた祭壇、竹皮を青竹に刺したものも用意します。

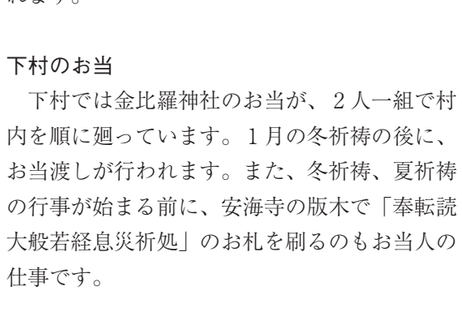
安海寺にはたいへん古い巻子本の大般若経が伝えられています（現在は新調された折本の大般若経が使用されています）。この大般若経で転読が行われた後、掛け軸と大般若経第一巻と第六百巻をそれぞれ木箱に収め、住職がその二つの木箱を重ねて持ち、一人のお当人の頭をコッツンと叩きます。頭を叩かれたお当人は、同じように木箱で、住職ともう一人のお当人、そして村人の頭を順にコッツンと叩いていきます。これを、「こっつりさん」といいます。



大般若経転読



注連縄が張られた住民センター



護符を刷るお当人



こっつりさん

こっつりさんが終わると、お当人は、村人にお酒と洗米をつけたご飯やお札を配ります。このお札は、家内安全や悪霊退散以外に雷除けにも効くといわれ、家屋に貼るだけではなく財布に入れたりするそうです。青竹に挟んだお札は、外から悪霊や疫病が入ってこないように、村境に立てられます。（早崎・宮原）

調査年月日　2011年７月３日（日）
調査場所　八千代区下村　住民センター

㊳奥中（おくなか）　虫送り（むしおく）

虫送りの復活

昭和30年代まで、田植えが終わって稲が大きく成長する６月頃に、町内の多くの村むらで見られた行事でした。「実盛（さねもり）さんは御上洛（ごじょうらく）　稲の虫どもお供（とも）せい～」と唱えながら田んぼを廻る虫送りは、多可町中区では天田が触れ元となって、村むらが順番に虫送りを行い、稲の害虫を村の外に送り出していました。

実盛さんとは、斉藤実盛のことで、木曽義仲が平氏を攻めたとき、稲の株につまずいて討ち取られたので、稲株を恨んで害虫として出てくるという言い伝えがあります。虫の害は悪霊のせいで、この人形は悪霊を追い払うための御霊なのです。

奥中では、昭和60年のほ場整備をきっかけに虫送りを復活させました。村作り協議会や村の各団体が協力して、老若男女全ての人が参加できるように工夫されています。

虫送り

観音寺下児童公園には、行列に使う幟、太鼓や鉦、実盛人形が用意されています。「一家に一つの松明」を合い言葉に、行列に使う御幣を付けた松明を、参加者全員で作ります。

当日、公園では子どもたちが遊べるように、森林ボランティアによって竹のドームが作られています。また、子ども会や婦人会によりカレーやまぜご飯が振る舞われたり、よさこい踊りのイベント等を企画したりして、各世代間のコミュニケーションを図っています。

お当人が大歳神社でいただいてきたお神灯の



公園でのにぎわい



御神灯の点火

火で、点火式が行われます。午後７時30分、大松明を持つ２人を先頭に、鉦打ち、太鼓打ち、害虫駆除や五穀豊穣の幟持ち、実盛人形が並び、その後に松明を持った多くの子どもたちが続いて行列が出立します。日が落ちてすっかり暗くなった田んぼの中の道を、村はずれの新宮池まで、松明の火が続きます。鉦や太鼓の音に混じって、子どもたちの声が響きます。

「実盛さんは御上洛　稲の虫どもお供せい～」

（早崎・宮原）





虫送り

調査年月日　2008年７月５日、2012年７月７日
調査場所　中区奥中　観音寺下児童公園～新宮池

㊴茂利（しげり）　祇園祭（ぎおんまつ）り

茂利のお当

茂利には、氏神である大歳神社のほか、丸山の頂上にある祇園神社と山神さんがあり、これら神社の世話をする５人のお当人がいます。茂利は５隣保に分かれていて、毎年、隣保から1人ずつ選出されます。５人の内1人が元締めとなり、お当事箱を預かります。

昭和50年頃までは、本当と相当の２人のお当人をくじ引きで選び、太鼓を叩き行列を組んで盛大にお当送りをしていました。お当人は、３社の世話をし、４月に春祭り、７月に祇園祭り、９月に秋祭り、12月に年越し参りを行い、１月のお当渡しで１年を終えます。

祇園神社

祇園神社に係わる什物で、木の蓋が残されていて、表に「祇園社　八王子」、裏に「安永九年（1780）西海坊　九月吉日　僧侶　三昧敬白」とあります。約230年前から、祇園神社が存在していたことが分かります。西海坊は感神院（祇園神社）と係わりがあることから、京都の祇園神社（現　八坂神社）から勧請された可能性があります。



祇園神社

祇園祭り

疫病が流行したり、稲が病害虫に悩まされるこの時期に、各地で祇園祭りが行われます。

祇園祭り当日、朝早くからお当人は準備にかかります。神社は山の上にあるため、道具や水を運ぶのに長い階段を何度も往復しないといけません。祭りが始まる前、区長が御供えの小餅を持って参拝します。このお餅は、後で参拝者が持ち帰ります。

午後４時、全員拝殿に座し、宮司による神事が執り行われます。神事の後、お当人が用意したオードブルと酒で祝宴が始まります。昔は、田植えの無事終了を田の神に感謝する「さなぼり」の行事と兼ねていたそうです。

（早崎・宮原）



準備風景



神事



祝宴風景

調査年月日　2012年７月８日
調査場所　中区茂利　祇園神社

㊵鳥羽（とりま）　湯立（ゆだ）て祭（まつ）り

青玉神社（あおたまじんじゃ）とお当

青玉神社は、天戸間見命・大歳御祖命が祭神。前者は天目一箇神とされ、もとは三國岳の山頂に祀られていたといい、本殿に祀られている「稲岡（井の岡）大明神」がこの神を背負って降りてきたと伝えられています。



青玉神社と湯立て釜

お当人は、青玉神社と明治29年に合祀された大歳神社それぞれ１人ずつで計２人。平成18年までは2人ずつで計４人でした。年齢順に回る一代当ですが、二つのお当は別々に回っているため２度お当を受けます。お当事箱も２つ、お当渡しは10月に行われます。

準備

祭り前日早朝から、氏子全員で境内の清掃・幟立てなど準備を行います。ただし、本殿に入れるのはお当人のみです。境内には湯立ての釜が置かれます。前列は役員の釜12個（本釜）、後列は無病息災を祈願する有志の釜（添え釜）です。釜を設置した場所には、青竹と注連縄で結界が張られます。また、祭り当日、祈願する人の名札と山伏御幣の付いた竹が釜に添えられます。釜に水を張り、事前に火が焚かれます。

湯立て祭り

午後１時半、お当人と役員が拝殿に着席、神事が執行されます。その後、湯立て神事が始まります。まず、神楽（鈴・御幣持ち）によって釜と参拝者のお祓いが行われ、巫女が釜に神酒・米を入れていき、釜の水を少しずつ桶にとって神前に奉納します。巫女はクマザサを手に持ち、全ての釜を回り、参拝者らに水を振りかけます。この水がかかると無病息災の御利益があると信じられています。



湯立て神事



クマザサで釜の水を掛ける

湯立て神事が終わると、お当人をはじめとする出席者は拝殿に戻り、クマザサの葉で無病息災のお守りを作り、参拝者に配ります。お当人２人は役員らを御供さん・白むしに洗米を付けたもので接待します。直会の間に釜・注連縄などを片付け、お当人・役員による餅投げが行われ、湯立て神事は終了します。（埴岡）



クマザサのお守り作り

調査年月日　2008年７月13日、2010年７月18日
2013年７月15日
調査場所　加美区鳥羽　青玉神社

㊶大袋（おおぶくろ）　だいじゅんさん

大袋のお当と神社

大袋には、杉原川の東側に鎌足神社（かまたりじんじゃ）と、川西の旧街道筋に大歳神社があります。２つの神社を世話するお当人は、毎年くじ引きで２人選出され、鎌足神社のお当人を正当、大歳神社を相当と言います。



大歳神社

「だいじゅんさん」のお祭りが行われるのは、大歳神社です。かつて、大袋は三谷の大歳神社の氏子でした。大袋の大歳神社は三谷から分祀されたらしく、境内には三谷の大歳神社の遙拝所があります。本社の横に、摂社である戎神社があり、１月に戎祭りが行われますが、昔は遠くからも参拝客が訪れ、大袋の「えべっさん」はとても賑やかだったようです。神社を囲む玉垣には、町外の寄進者名も多く見られることから、商人の町として発展してきたことを窺うことができます。



だいじゅんさん

また、大袋には「三日市」という小字名があります。月の３日に、牛の市が開かれて、賑わっていました。

だいじゅんさん

７月17日に行われるだいじゅんさんとは、大神宮が訛ったもので、本社の横の大神宮と彫られた大きく立派な伊勢灯籠のことだそうです。この灯籠は文政13年（1830）に、大袋を含む13ヶ村が願主となって奉納された石塔です。昔は伊勢神宮に参宮するのが大変遠く不便だったので、近くでお参りしたいという要望から建てられたと伝えられています。



参拝する村人

2011年から、だいじゅんさんと蛍祭りが合同で行われるようになりました。祭り日が近接していたことと、昔のだいじゅんさん祭りの賑やかさを取り戻したいという思いから、村を挙げての合同の行事となりました。

祭り当日、大神宮の幟が一竿立てられますが、この幟立てがお当人の役割です。神社境内に御供所が設けられ、子ども会役員が参拝者に御神酒と餅の御供さんを振る舞います。

神社まわりのテントでは、各隣保が担当して、カレー・焼きそば・焼き鳥・綿菓子、ビール・ジュースなどが用意され、夕方になると、お年寄りから子どもまで食事を楽しみます。また、カラオケ大会やビンゴゲームも行われ、夜９時頃まで大いに盛り上がります。（早崎・宮原）



住民総出のだいじゅんさん

調査年月日　2011年７月17日
調査場所　加美区大袋　大歳神社

㊷間子（まこう）　川下祭り

加都良神社（かつらじんじゃ）の夏越（なご）しの大祓（おおはらい）

間子には加都良神社と恵比須神社があり、一代当は恵比須神社の当人とされていますが、加都良神社の祭りにも係わっており、両神社とも掃除や榊替えは当人が受け持っています。

毎年、７月下旬に村人の半年間の罪穢を祓う夏越しの大祓が行われます。



加都良神社と茅の輪

茅の輪作りと祭りの準備

当日の午前８時から10時にかけて、前年のお当人と現当人、そして、来年にお当人となる６名で茅の輪が作られます。材料は思い出川に自生している真菰（イネ科の多年草）を切り出し、これをつなげて、直径約2.3mの輪を作り、神社境内の隋身門に取り付けます。

午後１時から、宮係が祭壇・御神灯・提灯等の準備をします。また、お当人は本殿や祭壇、玉串奉てん用の榊を用意します。

川下祭り

午後５時から祭りが始まり、村作り協議会による出店が各隣保ごとに用意されます。また、婦人会はおにぎりを準備し、消防団は景品のくじ引きを担当します。



雷除けの白むし

村人は神社に参拝すると、半紙で作られた人形代を橋沿いの仮設の祭壇に納め、茅の輪を八の字にくぐり、白むし（もち米３合に大豆１合の割合で炊いたおこわ）をいただき、お祭りを楽しみます。白むしはお当人が用意し、これを食すると雷よけになると伝えられています。

午後６時から宮司による神事が拝殿で始まります。幣殿に向かって左側に宮係４名とその前にお当人２名、向かって右側に区長と隣保長が向かい合って座ります。

宮司は幣殿で、修祓（祝詞、お祓い）後、お当人２名を従え、村人の人形代が置かれた仮設の祭壇の前で祝詞を奏上します。いわゆる夏越しの祓いとなります。



夏越しの祓い

その後、宮司とお当人は茅の輪を八の字を描きながらくぐり、弊殿に戻って玉串奉奠となります。

午後７時になると、宮司とお当人は境内から思い出川の岸に下りて、宮司が大祓を奏上するなか、お当人は人形代をろうそくの火で燃し、川へ流していきます。その後、消防団主催の景品のくじ引きが始まり、花火を打ち上げ、祭りは終了します。（本林）



お当人による人形代流し

調査年月日　2008年７月26日、2012年７月28日、2009年７月25日
調査場所　中区間子　加都良神社

㊸ 轟（とどろき）　川裾祭り（かわすそまつり）

川裾大明神と河上神社

山寄上に源を発し、南流する杉原川と、村の西の谷から流れ出る轟谷川とが合流するところで、轟の川裾祭りが行われます。



河上神社内の川裾大明神

合流地点である杉原川左岸の、巨大な岩がせり出している場所に、川裾大明神が祀られていたという言い伝えがありますが、道路拡張のため巨岩が撤去されて、現在は氏神である河上神社境内に末社として祀られています。

川裾祭り

川裾祭りの準備は、４人の当番が行います。事前に、神社周辺や川の草刈りをし、宮参橋に提灯を取り付けます。河上神社の末社である、川裾大明神の御神体を遷すのは、河上神社のお祷人の役目です。お祷人は、「ゆうだすき」を掛け、口に榊の葉をくわえ、移動用小宮さんに御神体を遷します。



ご神体を遷すお祷人



準備をする当番

御神体を遷された小宮さんは、当番によって、かつて川裾大明神が祀られていた所の近くにある祭壇の台石の上に安置されます。祭壇には御神酒と赤飯が供えられ、その前には賽銭入れの桶が据えられ、幟や提灯が立てられます。



整えられた祭壇

夜、祭りが始まり、次々と参拝者が訪れると、当番は御神酒と赤飯で接待します。村の役員さんたちが、焼き鳥とアイスクリームを振る舞います。

祭りを盛り上げるため、子ども会が灯籠流しをするようになりました。子どもたちは、川の中程まで渡された歩み板から、自分が作った灯籠を流しては川下へ取りに行き、また流し、何度も何度も繰り返します。薄暗がりの中、子どもたちの楽しそうな声が響き、いくつもの灯籠の明かりがゆらゆらと川面を照らしながら流れていきます。（早崎・宮原）



灯籠流し

調査年月日　2008年７月26日
調査場所　加美区轟　河上神社

【アラカルト２】
オトウ人と「注連飾（しめかざ）り」

神社の拝殿や正月に各家庭の玄関に取り付けられる注連縄は、神聖な場所であることを標示するとともに、建物の出入口に取り付けることによって、不浄なものや邪悪なものを防ぐため結界の役割を有しています。

中区曽我井、加美区観音寺･熊野部･山野部のトウヤには、注連縄が玄関付近に1年中取り付けられています。やはり村の神社を守り、神事を取り仕切るオトウ人の家は、穢れが及ばないように、注連縄によって結界がなされるのでしょう。

中区の田野口･鍛冶屋・間子では、村内に不幸があるとトウヤの玄関前に注連縄が張られることになっています。田野口では、神社の入口にも注連縄が設けられます。（宮原）



トウヤに注連縄を取り付ける手伝い人（熊野部）



名越神社に張られた注連縄（田野口）



トウヤ前の注連縄（山野部）



トウヤ前の注連縄（田野口）



トウヤ前の注連縄（鍛冶屋）

㊹門田（かどた）　どうさん（先祖迎え（せんぞむか））

阿弥陀堂と堂守さん

阿弥陀堂は通称「どうさん」と呼ばれ、阿弥陀如来像の他に伝教大師・天台大師の座像が祀られています。お堂の後ろには、古い石塔10基と五輪塔1基の残欠が並んでいます。また、境内に地蔵堂があります。

門田地区では、堂守さん（お堂当番）を務めた後、氏神神明神社の宮当番を務めます。期間はいずれも１年です。堂守さんは「どうさん」の他、毎月21日にお堂の掃除をし、阿弥陀如来・伝教大師・天台大師におにぎりを２個ずつ供えます。



阿弥陀堂を訪れる村人たち

準備

堂守さんは、午後２時半頃までに阿弥陀堂の清掃を済ませます。樒を立て替え、バケツに水を汲み、ロウソクを点してお参り来る人々を迎えます。なお、８月６日には地区の人全員で阿弥陀堂周辺を掃除します。

行事の流れ

午後３時頃から、地区の人たちが次々に先祖を迎えに阿弥陀堂を訪れます。さまざまな人がお参りしてきますが、各家で一番の年長者と思われる人が多いようでした。みな樒を持ち、お盆に線香・鉦・小さな水桶・ミズノミ（ずいきの葉の上にナスのさいの目切りと洗い米を盛ったもの）を載せてやってきます。



ミズノミとシキビ

用意されたロウソクで線香に火を点し、まず阿弥陀如来、次に地蔵菩薩に樒を差して線香を上げます。その後、お堂の裏に回り、石塔・五輪塔それぞれに線香と樒を１本ずつ、それからミズノミを供えます。ミズノミは昔は蓮の葉に載せたといい、供えた後にその葉にご先祖様を乗せて家に連れて帰ったという人もいました。用意されたバケツの水を自分の水桶に移し、樒の葉で墓前に供えた樒に水を掛けます。石塔一基一基に手を合わせ、拝んでから、先祖とともに家路につきます。



先祖の墓に詣る

こうして迎えた先祖は、15日朝、ぞれぞれの自宅に近い野間（のま）川の川原で送られます。仏壇に供えていた花・菓子・ナスの馬などを水際に供え、線香を焚いて送り出します。



河原での先祖送り

特徴

堂守さんは阿弥陀堂のオトウといえ、その後で神明神社のオトウを務める形は、両者が神仏混交の時代には一体のものだったことを推測させます。また、石塔群は村の先祖の墓と伝えられており、村にとって阿弥陀堂が氏神と同様に大切な場所だったことがわかります。（埴岡）

調査年月日　2008年・2009年８月13日
調査場所　八千代区門田　阿弥陀堂

㊺俵田（たわらだ）　弥勒堂（みろくどう）の数珠繰（じゅずく）り

俵田　弥勒堂

俵田の山裾にひっそりと建ち、弥勒菩薩を本尊とする弥勒堂は、残されている寛文４年（1664年）の棟札から、少なくとも約350年も前から、この地にあると思われます。



弥勒堂

お堂の横には「文政三年（1820）御尊号百万遍奉唱供養…」の銘の地蔵菩薩が祀られていますが、堂内にはその地蔵を造立したときの寄付人芳名・念仏供養額を確認することができます。また、俳額や数多くの絵馬も掛けられており、このお堂で、昔からさまざまな文化的活動や行事が行われていたと思われます。



石造地蔵菩薩

今も「お弥勒さん」という名で親しまれ、２人一組のお当番が輪番で世話をされています。

数珠繰り

お当番によって整えられた堂内には、ゴザが敷かれ、しきびや線香が立てられます。お堂の横では飲みものやスイカが冷やされ、お菓子などもたくさん用意されます。



数珠と数え札と鉦

夕方４時頃になると、村の子ども達が集り、にぎやかになります。堂内いっぱいに広げられた大きな数珠の周りに、大人も交えて車座に座ります。中央には先達さんが２人座り、鉦を叩きながら抑揚をつけて南無阿弥陀仏と唱えだすと、みんな続いて唱和し数珠を繰っていきます。

房の付いた母珠が巡ってくると、頭にいただきます。数を数えるのは、数え札（50個の木の玉を繋げたもの）を使います。一周ごとに数え札を１個移して、108回まで数えますが、終わりに近づくと繰っていくスピードがどんどん速くなります。





3 世代集まっての数珠繰り

数珠繰りが終わると、みんなでおしゃべりをしながら飲み物やスイカでのどを潤し、子ども達はお菓子をもらって帰ります。俵田の夏の夕べの楽しいひとときです。（早崎・宮原）

調査年月日　2008年８月16日、2011年８月16日
調査場所　八千代区俵田　弥勒堂

㊻豊部（とよべ）　数珠繰り（じゅずく）

豊部は、下谷・井杉・久保ヶ谷・郷領・森内・入江谷・上谷の７つの谷（地区）に分かれていて、その内の５つの谷で数珠繰りが行われています。ほとんどの地区に「谷世話」という役があり、谷世話さんは配り物をしたり、地区のお堂の祭りなどの世話をします。

豊部の数珠繰りでは、始まる前に鉦を叩いて触れて廻っているのが印象的です。

入江谷（いりえだに）（十王堂（じゅうおうどう））の数珠繰り―８月16日


入江谷の十王堂

十王堂は、十王と地蔵菩薩などが祀られていて、４人の谷世話さんが世話をしています。

当日は、数珠繰りに集まってきた人に、焼きそばやかき氷で接待をするため、早くから準備が始まります。

午後５時になると、子どもたちが鉦を叩いて地区内を触れ廻ります。６時に、大人も子どもも交じって数珠繰りが始まります。先達が南無阿弥陀仏と唱えながら鉦を叩くのに合わせ、時計廻りに数珠を繰ります。南無阿弥陀仏と墨書された木の数え札が、大９枚、小10枚あって、いつもはこれで108回数えるのですが、この日は、この後に極楽寺で盆踊りが催されるため、15分くらいで終了しました。参加した子どもたちには、お菓子が配られます。


触れ鉦を叩く子ども

終戦後間もない頃は、数珠繰りで団子がもらえるのがうれしくて、子どもたちは「だんごこい、だんごこい」と言って数珠を廻し、そこから、この数珠繰りを団子会と呼んでいたといいます。


数珠繰り風景

久保ヶ谷（くぼがたに）（地蔵堂）の数珠繰り―８月16日

久保ヶ谷の地蔵谷にある地蔵堂には、享保10年（1725）の銘がある東向き地蔵が祀られています。



久保ヶ谷の地蔵堂

３人の谷世話さんによって、お堂に提灯が掛けられて、前の道にゴザが敷かれ、数珠繰りの準備がされています。お堂には、有志からたくさんのお供え物が供えられています。


数珠繰り風景

午後６時になると、子どもたちが鉦を叩いて地区内を触れて廻ります。そして、集まった子どもたちで輪になって、お地蔵さんに手を合わせ、数珠繰りが始まります。先達が、南無阿弥陀仏と唱えながら鉦を叩くのに合わせて逆時計廻りに数珠を繰ります。番号が墨書された大きい木札５枚と小さい木札10枚で数を数えますが、数珠を繰る回数は決まっていません。

数珠繰りが終わると、子どもたちはお菓子をいただき、この日集会所前で行われる久保ヶ谷の夏祭りに参加しに行きます。その後、見守っていた年配の方たちによって、もう一度数珠繰りが行われました。


最後に「南無阿弥陀仏」

森内（もりうち）（観音堂）の数珠繰り―８月17日

森内の観音堂には、十一面観音と不動明王と弘法大師が祀られています。


森内の観音堂

上谷川のそばにあった観音堂は、昭和40年の台風の大水によって本尊もろとも流失しましたが、その後、現在地に再建されました。観音堂の世話は４人の当番で行っています。大水で流されたものの、偶然発見された天保７年（1836）銘の鉦を使って、８月17日の観音さんの縁日に数珠繰りをします。

午後３時半、当番の１人が鉦を叩いて触れて廻ります。観音堂の前の道ばたにはゴザが敷かれ、仏前には豆の入ったご飯が供えられています。今回は黒豆のご飯ですが、赤飯やなな茶飯になる場合もあるそうです。午後４時、集まった人たちで（ほとんど女性と子ども）数珠繰り開始です。先達が、南無阿弥陀仏と唱えながら鉦を叩くのに合わせ、みんなで唱和しながら、逆時計廻りに数珠を繰り、母珠が巡ってくると頭にいただきます。20枚の木札で数を数え、50回で一旦休憩し、後半は51回繰ります。終わると、みんなでお供えの黒豆ご飯やお菓子をいただきます。


数珠繰り風景


数珠繰り後のおちつき

郷領（ごりょう）（北向き地蔵・旧公民館）の数珠繰り―８月23日

郷領の旧公民館には、阿弥陀如来、地蔵菩薩、弘法大師が祀られています。昔、この近くにお堂がありましたが、道路が出来たため取り壊され、仏像は旧公民館に移されました。


触れ鉦を叩く子供

旧公民館の近くの北向き地蔵には、「当所庵主　恵明」と彫られています。このお堂を守る、恵明と名乗る庵主さんがいたことが分かります。また、大袋村観音堂に伝わる大般若経に、「寛延三年（1750）郷領庵　恵明」とあり、庵主さんが活躍した年代も推測できます。

旧公民館で８月14日と23日に、谷世話さん３人のお世話により、数珠繰りが行われます。

午後７時半になると、子どもたちは鉦を叩いて、地区内を触れて廻ります。参加者が集まる

と、みんなで北向き地蔵へお参りに行き、その後旧公民館に戻り、数珠繰りを始めます。谷世話さんが先達で、南無阿弥陀仏と唱えながら鉦を叩きます。みんなで唱和しながら、逆時計廻りに数珠を繰り、母珠が巡ってくると頭にいただきます。数珠を繰る回数は、特に決まっていません。数珠繰りが終わると、子どもたちはお菓子をいただいて帰ります。



北向き地蔵へのお参り



数珠繰り風景

下谷（地蔵堂）の数珠繰り―８月25日

下谷の村の中、５本の道が交差する辻に「左むらみち 右かなくら」と彫られた道標があります。その横の真新しい地蔵堂は、数年前道路が改修されたときに建て替えられ、天保９年（1838）、昭和42年（1967）、昭和55年（1980）に建立された３体の地蔵が祀られています。この地蔵堂の前の交差点で数珠繰りが行われます。以前は８月23日に数珠繰りが行われていましたが、夏祭りも一緒にすることになり、23日に近い土曜日になりました。



下谷の地蔵堂

交差点の中央には盆踊りの櫓が組まれ、提灯が張り巡らされています。仏前には、お参りに来た人のお供え物が、うずたかく積まれています。



触れ鉦を叩く子ども

午後５時45分に、子どもたちが鉦を叩いて地区内を触れて廻ると、浴衣を着た子どもたちが方々から集まってきます。

６時になると、子どもたちは車座に座り、谷世話さんの先達で数珠繰りが始まります。先達が般若心経を３回唱える間、逆時計廻りに数珠を繰ります。終わると、子どもたちは谷世話さんの用意したお菓子をいただきます。この後、大人も子どもも盆踊りやくじ引きを楽しんで、夏の夜のひとときを過ごします。

（早崎・宮原）

数珠繰り風景

調査年月日　2012年８月16・17・23・25日
調査場所　加美区豊部　入江谷・久保ヶ谷・森内・郷領・下谷

㊼中安田（なかやすだ）　観音堂（かんのんどう）の数珠繰り（じゅずく）

中安田　観音堂・地蔵堂・阿弥陀堂

天保８年（1837）の中安田村絵図には、観音堂と地蔵堂と阿弥陀堂が別々に描かれています。観音堂は現在地に、阿弥陀堂は西安田村との境に、地蔵堂は稲荷神社参道入り口脇に位置し、近代に合祀されるまでは、それぞれのお堂を中組、西組、東組が世話をし、数珠繰りも別々に行われていました。また、阿弥陀堂では阿弥陀仏が盗難にあい、弘法大師像が祀られることになりました。



数珠繰りの準備が整った観音堂

数珠繰り

現在、観音堂には中央に観世音菩薩、両脇に弘法大師と地蔵菩薩が祀られ、８月にそれぞれの縁日である17日、20日、23日に数珠繰りが行われます。この数珠繰りの世話は、中安田のオトウの一つである「三人祷」と組当番が行います。組当番は、合祀される前と同じように、17日は中組、20日は西組、23日は東組が担当します。

観音さんの縁日である17日、午後６時から、三人祷のお祷人３人と中組で準備をします。観



数珠繰り風景



数珠繰り風景

世音菩薩、地蔵菩薩、弘法大師の文字が入った３つの提灯を掛け、薄縁を敷き、大数珠、鉦、数え札、賽銭箱を用意します。仏前には、大豆を炊き込んだ「なな茶飯」のおにぎりを供えます。このなな茶飯は、組当番が用意します。

午後７時頃になると、近隣の人々が次々にお参りにやって来て、数珠繰りが始まります。先達は、お祷人もしくは組当番が担当し、数珠は逆時計廻りに休憩を挟んで50回ずつ、合計100回廻し、母珠が巡ってくると頭にいただきます。後半になると、先達の唱える南無阿弥陀仏を覚えた子どもたちの唱和する声が響いていました。

数珠繰りが終わると、皆、カップ麺をもらって帰ります。以前は、なな茶飯のおにぎりを振る舞っていたそうです。

この後、20日と23日にも同じように数珠繰りが行われます。（早崎・宮原）



なな茶飯のおにぎりをほおばる世話人

調査年月日　2010年８月17・20日、2011年８月23日
調査場所　中区中安田　観音堂

㊽赤坂（あかさか）　観音堂の数珠繰り（かんのんどう　じゅずく）り

観音堂

江戸時代前期の延宝の検地帳にも記載されている赤坂の観音堂には、本尊の十一面観音のほか、毘沙門天、不動明王、弘法大師が祀られていて、本尊は50年に一度開帳されます。お堂は、村の中を順番に廻る月当番が世話をし、年祭日の彼岸と８月20日・24日にお祭りをします。



観音堂

数珠繰り

観音堂の前は広場になっていて、この日、数珠繰りが終わると夏祭りが催されます。広場の中央には櫓が組まれ、提灯が吊り下げられ、盆踊りの準備が整っています。焼きそばなども用意され、子ども花火大会にカラオケと盛りだくさんです。

観音堂は、月当番によりきれいに掃除され、仏前にはお茶と赤飯と煮染めが供えられています。隣保や個人からの供え物がたくさんありますが、これは後で子どもたちに配られます。午後５時半になると、老人会の方が、大数珠、数え札、鉦を出して数珠繰りの準備を始めます。

数え札は、木の札を紐に通し繋げたもので、全てに「五ノ日」と墨書されていますが、どういう意味があるのか分かりません。今は使用されていない古い鉦には、「享保八年卯十月十五日（1723）念仏講中　堀川住築後大掾常味作」の銘があります。約300年近く前も、ここで数珠繰りがされていたのでしょうか。



数珠繰り風景

午後６時、老人会で般若心経を唱えたあと、大人も子どもも大数珠の周りに車座に座り、数珠繰りが始まります。中央に座す先達さんが、鉦を叩きながら南無阿弥陀仏と唱えると、皆が続いて唱和し、逆時計回りに数珠を繰っていきます。母珠が巡ってくると、頭にいただきます。本来は108回繰るのですが、時間の関係上54回で終了しました。

数珠繰りが終わると、子どもたちはお供えのお菓子をいただいて、あとは楽しい夏祭りです。夏の夜、賑やかに盆踊りの音楽が響きます。

（早崎・宮原）



数珠繰り風景



お菓子をもらう子どもたち

調査年月日　2011年８月20日、2012年８月19日
調査場所　八千代区赤坂　観音堂

㊾箸荷（はせがい）　火祭（ひまつ）り

地蔵堂と愛宕神社

山の中腹にある箸荷の新しい墓地の上方に地蔵堂があり、祀られている２体のうち１体は道標だったものです。地蔵堂から200ｍほど登ると、愛宕神社が杉林の中に鎮座しています。



地蔵堂



愛宕神社

箸荷のお当

箸荷にある３つのお当のうちの一つが、愛宕神社の愛宕当です。氏神大歳神社の本当と2名一組で、奇数月・偶数月で担当を決め両社の世話をします。愛宕当は火祭りを終えて、次のお当屋さんと交代します。

準備

お当屋さんは地蔵堂・愛宕神社の周囲を清掃し、地蔵堂には榕・南天の葉、愛宕神社には榊とヒノキの葉を敷いた赤飯を供えます。また、地蔵堂脇の広場に松明を円形に並べ、その中央に薪を組みます。地蔵堂横に祭壇が作られ、愛宕大権現の掛け軸が祀られます。祭壇の上段にお当事箱、下段に神酒が置かれます。

火祭り

午前10時45分、火祭りが始まります。参加者は本当・愛宕当２名、区長、お当屋さんの隣保の人たち、それと新お当屋さん２名。鉦を叩く先達さんの後にご神灯箱を持つお当屋さんが続き、全員で愛宕神社まで登ります。



愛宕神社での読経

神社に到着すると、神前のロウソクの火をご神灯に移し、拝礼の後、全員で般若心経を唱えます。それから、先達を先頭に地蔵堂へ向かいます。愛宕神社でいただいた火を祭壇のご神灯に移し、用意した松明に火を付けます。祭壇前で拝礼し、再び般若心経を唱えて無病息災・五穀表情・火災消除を祈ります。



愛宕の神火を移す



地蔵堂での火祭り

火祭りが終わると全員で神酒をいただき、愛宕当のお当渡しが始まります。地蔵堂に新旧のお当屋さんが向かい合って座り、盃事が済むとお当事箱の引き継ぎが行われます。その後、神酒・お煮しめ・赤飯で直会が行われます。

特徴

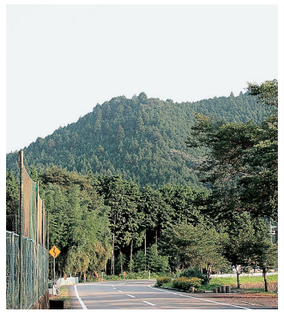
箸荷の火祭りは地蔵堂・愛宕神社の２ヶ所で、神式の拝礼と般若心経の読誦が繰り返されます。神仏習合の色濃く残る行事で、多可町でも貴重な事例といえます。愛宕大権現画像の裏書きには「福寿院」の名が見え、古くは僧侶が関与したらしく思われます。松明の数は12本、閏年には13本と決められており、本来は一年の農作や天気を占う年占としての意味があったのでしょう。（埴岡）

調査年月日　2008年８月24日、2009年８月23日
調査場所　加美区箸荷　地蔵堂・愛宕神社

㊿柳山寺（りゅうさんじ）　ぽっぽこねんじゃ

愛宕神社

愛宕神社は、柳山寺の氏神大歳神社の南に位置する山の頂にある小社。並んで立つ小社は山ノ口大明神の祠で、大正初期に村で伝染病が流行した時に勧請されたと伝えられています。５隣保が持ち回りで、大歳神社の秋祭りの準備、神輿かき等を務めています。愛宕神社のお当番は３人です。



愛宕神社が祀られている山



愛宕神社

準備

お当番が午前中に愛宕神社までの山道の草刈り等を行い、行事前に祠や神社周辺を清掃し、焚き火の準備を整えます。使用する松明は、子ども会で用意します。

行事の流れ

午後６時過ぎ、地区の小学生が大歳神社前に集まります。この年は約12名が参加しました。集合した子どもたちは松明を持って、子ども会役員らとともに愛宕神社が鎮座する山に向かいます。

山道15分ほど登って愛宕神社に到着すると、区長が神社に拝礼して祝詞を奏上します。玉串奉奠は、子ども会の役員が代表して行います。かつては、地元の神主が神事を執り行っていました。神事が終了すると、愛宕神社の灯明の火によって焚き火に火が付けられます。

焚き火が燃え上がると、用意した松明に火が移されます。子どもたちは火の付いた松明を持つと、口々に「ぽっぽこねんじゃ、ほうねんじゃ」と叫びながら山を下ります。山麓に午後７時頃到着、隊列を組み直して集落の中を「ぽっぽこねんじゃ、ほうねんじゃ」を繰り返しながら大歳神社を目指します。



焚き火の火を松明に移す

家々の前で地区の人たちが行列を待ち受け、松明の火をロウソクに分けてもらう姿が見られました。神棚や仏壇にこの日を点して、無病息災・家内安全を祈るそうです。なお、「ぽっぽこねんじゃ、ほうねんじゃ」は、盆の火祭りに見られる豊年を祈る言葉と考えられます。



松明の火をいただく

特徴

柳山寺地区には以前「宮の頭」「笠頭」「新頭（敬神頭）」という３組のオトウがあり、頭帳に記載した順で頭元（当番）を務めていました。王の舞の系譜を引く天狗・獅子舞が残っており、かつては田楽も行われていたようです。この地区には伊勢講が残っていますが、盆の火祭りであるぽっぽこねんじゃの舞台となる愛宕神社にも古くは講が組まれていたかもしれません。

（埴岡）

調査年月日　2008年８月24日、2009年８月22日
調査場所　八千代区柳山寺　愛宕神社

【アラカルト３】
緋色（ひいろ）の幟（のぼり）

各神社のお祭りには、境内地入口や拝殿脇に幟が掲げられます。幟には、普通白地若しくは青地の生地に神社名や祭神名が記されていますが、町内の祭りでは、特徴的な幟をみることができます。加美区轟の河上神社（㊿）、八千代区中野間貴船神社（㊶）・下野間貴船神社（㊶）・柳山寺大歳神社・中三原大歳神社（㊽）の秋祭りに、鮮やかな緋色の少し小さな幟が登場します。そしてこの緋色の幟は神社での渡御の際に、行列の先頭に立ち運ばれます。

中三原の秋祭りで緋色の幟は、宵宮に一晩トウヤの軒先に立てかけられ、本宮にはトウヤから御幣を持った子どもに続いて大歳神社に向かいます。ここでの祭りには、上三原からも緋色の幟が持ち込まれます。

このような点を考えると、緋色の幟はまるで祭りの神さまを象徴しているように見えてきます。しかしながら、その色がなぜ鮮やかな緋色であるかは分かりません。（宮原）



河上神社の幟（轟）



大歳神社の幟（柳山寺）



トウヤ前の幟（中三原）





大歳神社の幟（中三原）



貴船神社の幟（中野間・下野間）

⑤1門前（もんぜん）　八幡神社（はちまんじんじゃ）のお祷渡（とうわた）し

八幡神社

元弘２年（1332）夢想国師により、瑞光寺の鎮守として創建されたと伝えられています。延宝検地帳には「八幡宮境内」と記され、現在は門前の氏神社となっています。

１月の厄神祭は、神前に祈願した厄年の男女が、厄払いのため、歳の数のお金を境内に撒き、子どもたちが厄拾いする独特の神事が今も続けられています。



八幡神社

門前のお祷

お祷人は３名で、村内を３つに分け、順番に廻っています。お祷渡しは９月の第２日曜日と決められています。

お祷人が保管するものとして、御神体と呼ばれるお当事箱（安永８年(1779)銘）を含め、翠簾箱（文化９年(1812)銘）・小八幡宮幕入れ箱（明治20年(1887)銘）・八幡神社祷文箱・本殿幕入れ箱（安政２年(1855)銘）の５つの木箱があり、本殿の鍵とともに４ヶ月ごとにお祷人（鍵預かり）の持ち回りとなっています。



お当事箱

お祷渡し準備

９月の第１日曜日に、お当渡し準備のための「おしばいれ」と呼ばれる行事が行われます。この日に、お祷人と老人会によって神社の掃除が行われ、本殿などに取り付ける注連縄を綯い、新しい注連縄に取り替えます。昭和30年頃まで「おしばいれ」行事では、本殿含めた小宮の御幣を新調していたことが、関係資料に記されています。



「おしばいれ」

お祷渡し前日には、拝殿・幣殿に茣蓙を敷き、本殿・拝殿及び小八幡宮に幕を張り、拝殿に向かって右側に幟を１本立ててお祷渡しに備えます。また、お祷渡しと厄神祭の時のみに使用される鈴緒（文化９年(1812)銘）が、取り付けられます。

お祷渡し当日の早朝には、拝殿から幣殿に緋毛氈を敷き、本殿前に御供えを整えます。また、本殿の裏には味噌を盛った小皿とコメ粉を盛った小皿とともに、線香を供えた長方形の膳が用意されます。

お祷渡し

午前８時前に氏子が参拝し、お祷人に挨拶し拝殿に座します。

午前８時から区長・宮総代の挨拶後、宮司が神事を執り行い、氏子全員の名前を読み上げます。この間に、３人の子どもが裸足で、拝殿と鳥居の前を往復します。最後に幣殿にて玉串奉てんが行われ、神事は終了します。子どもたちも、ここでその役割を終えます。



祷人の挨拶受け



神事





子どもによる渡御

神事が終わると、直会が始まります。味噌・コメ粉の膳の線香に火が付けられ、神酒とイリコが、お祷人が切った餅（御供さん）とともにまわされます。味噌・コメ粉は竹の匙で、少しずついただきます。

一通り膳がまわると、最後にお祷人も盃を受けて、味噌・コメ粉をいただいた後、新祷人も改めて盃を受け味噌・コメ粉をいただき、区長の挨拶によってお祷渡しは終了します。

門前のお祷渡しでは、味噌・コメ粉・線香を収めた膳と、神事の間拝殿と鳥居を往復する子どもの存在が特徴的です。前者は神仏習合の名残を想起させ、後者は神の使いとして子どもがその役割を担っていることを窺わせます。



味噌・コメ粉・線香が供えられた膳





直会

かつては、公会堂で煮染めや唐辛子入り味噌汁等の接待の後、神社に移って神事が執り行われていたそうです。（宮原）

調査年月日　2008年９月14日、2009年９月13日
調査場所　中区門前　八幡神社

㊷仕出原（しでばら）　薬師堂（やくしどう）の数珠繰（じゅずく）り

仕出原　薬師堂

姫路から丹波に通じる丹波道の街道沿いに、開かれた村が仕出原です。村内には、天満宮と薬師堂が隣接して存在しています。延宝７年（1679）の『「仕出原町田畠御検地帳』に「薬師前」や「薬師ノ本」という小字名が記されていることから、江戸時代前期以前に薬師堂は、この地に存在していたのでしょう。



薬師堂

数珠繰り

この薬師堂では、春と秋のお彼岸に数珠繰りが行われます。当日、お当番（堂世話）２人で、お堂の準備をします。本尊の薬師如来さんの前にはお供え物が置かれていますが、これは、後で参加者に配られます。



数え札として用意された樒葉

午後１時、集まった人たち全員で般若心経を唱えた後、大数珠の輪の中央に先達さんが座し、鉦を叩き念仏を唱えます。その隣に座る人は、用意した50枚の常緑樹の葉で、数珠を繰った数を数えます。南無阿弥陀仏と唱える先達さんに合わせて、唱和しながら時計回りに数珠を繰っていき、母珠が巡ってくると頭にいただきます。半分の50回が終わると休憩です。100回繰り終わるのに、約１時間かかりました。

終わると、茶菓子をいただきながら、皆さんでなごやかに談笑されていました。





日迎（ひむか）え

仕出原では、昔、「日迎え」の行事というのがありました。



数珠繰り風景

参加者の方が子どもの頃、お彼岸の朝早くにお弁当を持って集まり、東の山に登ります。そして頂上で日の出を拝み、下山して薬師堂で数珠繰りをして、おはぎやお菓子をもらうのが楽しみだったそうです。お彼岸に太陽を拝み、数珠繰りを行う仕出原のこの念仏行事は、農耕儀礼と深く関わっているようです。（早崎・宮原）

調査年月日　2008年９月23日
調査場所　八千代区仕出原　薬師堂

㊸奥荒田（おくあらた）　八朔祭（はっさくまつ）り

若宮神社（わかみやじんじゃ）

中区門前の段ノ城の城主であったという、赤松氏の一族、有田源八郎朝勝は、天正３年（1575）に別所氏との戦いに敗れ落城。そして奥荒田村の山麓で力尽きて、主従とも自刃したという落人伝説があります。



若宮神社裏の五輪塔群

村人は五輪塔を建て、その霊を祀ったそうです。それが今の若宮神社の裏に並べられた五輪塔であると伝えられています。



若宮神社

延宝５年（1677）の検地帳にも記載されているように、若宮神社はもともとは大歳神社であったと思われますが、現在、大歳神社は摂社として祀られています。

八朔祭り

八朔祭りの八朔は、旧暦８月１日をいい、稲が実る前に田の神に豊作を祈願するのが八朔祭りです。奥荒田の八朔祭りは、旧暦を新暦に直した９月１日に行われていましたが、養蚕が盛んだった頃、蚕の年３回の脱皮の第３回目の時期に相当し、非常に忙しく煩雑になるので10月１日に変更され、現在は10月第１日曜日に行われるようになりました。

神社の掃除などは、宮総代と５人一組で村内を廻っている当番で行い、お祭りの準備は村役員も加わって行います。

お祭りの日、神社に参拝した氏子は、まず宮総代に挨拶します。お供え物を持参する氏子もいます。午後３時になると、宮司による修祓の後、宮総代、各団体代表、今年厄年（42・60才）の男性、区長の順に玉串奉てんが行われ、神事が終了します。



神事

この後、境内で奉納子ども相撲と、氏子が供えた餅やお菓子の福投げが行われ、公民館では豪華賞品付きのくじ引きが用意されていて、子どもから大人まで祭りを楽しみます。

（早崎・宮原）



奉納子ども相撲



福投げ

調査年月日　2009年10月４日
調査場所　加美区奥荒田　若宮神社

㊹観音寺（かんのんじ）　秋祭（あきまつ）りとお当渡（とうわた）し

大歳神社とお当

観音寺は鉱山で栄えた村であり、大歳神社は鉱山鎮護のため勧請されたと伝えられています。この大歳神社は、「神主」と「青年宿」という２人のお当人によって管理されています。



大歳神社本殿

観音寺と豊部

かつて観音寺は、豊部の郷領地区に含まれており、豊部の五社神社（ごしゃじんじゃ）の氏子でもありました。

観音寺の神楽は、豊部から伝えられ、秋祭りには「丑の刻参り」として、夜中に豊部の五社神社へ参り、御幣をいただいて帰ってきていました。また、現在の大歳神社の本殿が、豊部の八幡神社の本殿を移築したものであるということからも、豊部との深い繋がりが窺われます。

秋祭りとお当渡し

秋祭りに奉納されていた神楽は、若者が減ったため維持困難となり、平成３～７年まで休止し、平成８年に神楽講（神楽保存会）として復活しました。毎年秋祭りには、村外で暮らしている若者も帰ってきて、神楽講を担っています。



神楽講の練習風景

宵宮には、村の半数の人が１年交替で、幟と提灯立てを行い、神楽講は、公民館で神楽と小宮を飾り付け、お当人は神社の掃除や祭祀の準備を行います。

宵宮の午後９時、宮司による神事と直会が行われた後、神前に供えられていた神楽が下げられ、神楽舞（荒神払い）が、本殿と豊部の五社神社に向けてそれぞれ奉納されます。



宵宮で本殿に備えられた神楽



豊部に向かっての神楽舞

本宮には、お当渡しが行われます。午前８時、氏子が揃うと、お当人２人は神前に座し神主役を務めます。二礼二拍一礼後、般若心経を唱えます。そして、本殿より御神体（お当事箱）を



お当人による神事



お当事箱の受け渡し

拝載し、氏子に披露します。御神酒と白むしが全員に配られ、直会が行われた後、お当渡しが始まります。

まず、区長立ち会いのもと、旧神主→新青年宿→旧青年宿→新神主の流れでお当事箱の受け渡しを行います。新当人の挨拶の後、４人揃って「ずいきの酢味噌和え」をいただきます。このずいきの酢味噌和えは、お当渡しのとき、お当人だけに出される行事食です。

最後に、新神主が旧当人へ白むしを給仕し、お当渡しが終了します。

この後神社では、新当人が用意した藁で、注連縄作りが行われます。そして、お当事箱や神社の各場所、新神主宅と新青年宿などに新しい注連縄が取り付けられます。



新旧当人の直会



注連縄作り

神楽講は、村の子どもたちと村廻りに出発します。旧青年宿から始まり、旧神主宅、そして全ての氏子の家で「荒神払い」の舞を披露し、お祓いをします。最後に、村のお寺である観音寺（現在無住）に奉納します。（早崎・宮原）



村廻りの準備風景





荒神祓い

調査年月日　2012年10月６・７日
調査場所　加美区観音寺　大歳神社

㊺山野部（やまのべ）　秋祭り（あきまつり）

大歳神社とお頭

山野部では、村の氏神である大歳神社の「お頭」を受ける人を、「頭主」と呼びます。頭主と頭主を補佐する４人の「連中」で、１年間神社の維持管理と祭事を執行します。


大歳神社

秋祭りの準備

秋祭りの準備は、まず「顔合わせ」行事から始まります。秋祭りで、それぞれの役割を担うものが公民館に集まり、頭主の接待を受けます。公民館に集まるのは、曳山の笛や太鼓など音曲担当の青年団、曳山警護人、曳山の中を飾る「作り物」担当の老人会、「御神灯」作り担当の村役員です。祭り前の「おおならし」の日までに、各担当は、準備を整えなければなりません。


笛・太鼓の練習



おおならしでの披露

祭り前々日、頭主と連中は、頭主宅の「オハケ」と「注連縄」、神社幣殿前の大注連縄を新調します。青年団と村役員は、神社で幟を立てて、御神灯を吊るための竹を鳥居前に組み立てます。

その日の夜、公民館で「おおならし」が行われ、関係者は連中の接待を受けます。完成した作り物・御神灯を並べ、青年団は唄や笛や太鼓を披露し、祭りの準備が全て整ったことをみんなで確認するのです。


オハケの新調

秋祭り

宵宮の日の午後、頭主と連中は、大歳神社で氏子を待ち受けます。氏子が御供米とお餅、自分の名前の入った提灯（各家に１つあり）を持参すると、御供米とお餅は神前に供えられ、提灯は拝殿の周りに吊り下げられます。お餅は、この後で行われる餅投げに供されます。


提灯と御供え餅の持参

宵宮の夕刻、公民館で「出立ちの宴」が行われ、いよいよ曳山が出発します。青年団が飾り付けた曳山の上部に、「御神体（大御幣）」を取り付け、中学生以下の子どもが綱を引き、前後


ご神体の取り付け

には、曳山警護人がつきます。

１発だけ打ち上げられた花火を合図に、青年団が曳山音頭を唄い、神社に向かいます。御神灯を吊した鳥居前まで来ると、花火が次々と上がります。しばらくの間、曳山も参拝者も、夜空を飾る89発の花火を堪能します。


花火と曳山

花火が終わると、拝殿前までの急な階段を曳山が上ります。村人と協力し、青年団がすべての責任を持って曳いていくのを、参拝者は固唾をのんで見守ります。少しずつ曳山が上がり、緊張が最高潮に達するなか、曳山が拝殿前に引き上げられると、拍手と歓声がわき起こります。


曳山内の作り物

そして、曳山は拝殿前で宮司のお祓いを受け、青年団が激しくこぐります。午後８時、幣殿にて神事が執り行われ、最後に餅投げが行われて、宵宮は終了します。この夜は、御神灯の火を絶やさないように、青年団が神社に泊まり込みます。

翌日の本宮の朝、氏子は御供米を持って、提灯を引取りに参拝します。連中は宵宮と同様に


曳山の引き上げ

御神酒と御供さんで接待し、提灯と餅２個を返却します。午前10時になると、境内で子ども奉納相撲が行われます。


奉納子ども相撲

相撲が終わると、宵宮と同じように子どもたちが綱を引き、警護人や青年団とともに、曳山は神社を出て頭主宅に向かいます。頭主宅では頭主が出迎え、青年団は曳山を激しくこぐります。その後、警護人が御神体（大御幣）を頭主に手渡し、頭主は自宅の祭壇に供えます。こうして、秋祭りは滞りなく終了します。

（早崎・宮原）


曳山を迎える頭主

調査年月日　2007年10月６・７日、2008年10月11日、2011年10月８日

調査場所　加美区山野部　大歳神社

⑯三谷　秋祭りとお当渡し

大歳神社とお当

かつて周囲を竹林で囲まれていた大歳神社は、「竹の宮」とも称されており、大袋を含めた郷社的な神社です。

お当人は本当（正）と相当（副）の２人で、１年間神社の管理や儀式の世話を行います。お当人の順番は、村内の廻り順で決められていて、一代当となっています。



大歳神社

秋祭りとお当渡し

祭りのほぼ１週間前の午後、お当人２人、宮総代２人、村役員２人によって大歳神社の注連縄が作られ、秋祭りの準備が整えられます。綯われた全長約310㎝の注連縄は、幣殿前に掛けられます。秋祭りの宵宮には、盛大に餅投げが行われます。



注連縄作り

本宮の午前10時前、神社拝殿に区長･宮総代･役員等が上座（北側）、お当人及び相伴人が下座（南側）に座します。区長の挨拶後に、宮司によって神事が執り行われます。

神事後、お当人２人が神前から神酒と洗米を、宮総代の前に移し、給仕人が神酒の銚子を交互に少量づつ入れあった後、神酒と洗米を全員に給仕して、宴に入ります。



御神酒を交互に継ぎ足し

約1時間ほどの祝宴後、本当が神前に収められていたお当事箱を区長に預け、区長はお当事箱内の長帳を調べ、新当人２人の名を読み上げ、本当（正）と相当（副）をくじ引きで決定し、新当人の名前を長帳に記帳します。そして、お当人はお当事箱を神前に戻します。



区長による新当人の記帳

本当人が再び神前からお当事箱を下げてくることで、お当渡しの儀式が始まります。本当人から相当人→新相当人→新本当人の順に渡されたお当事箱は、新当人２人で神前に戻されます。次に上座に新当人２人、下座に旧当人２人が座し、盃事が執り行われます。

最後に収めの酒杯が行われます。旧当人２人は上座から下座に向かって座し、盃を受け、村人が謡曲「灘波」を謡い終わると同時に酒杯を飲み干し、挨拶をもって終了します。

お当渡しが終わると、境内の土俵で12番の奉納子ども相撲が行われ、三谷の秋祭りが終了します。（宮原）

調査年月日　2012年９月30日、10月７日
調査場所　加美区三谷　大歳神社

⑰熊野部　秋祭り

熊野部の稲荷神社とお当

※「⑯熊野部　すべ切りとオトウ渡し」参照。

熊野部の秋祭りでの当人の役割で注目されるのは、「お旅」（神幸行列）の行列です。大当２人は金幣、歩射当２人は鉾・長刀、翌年の歩射当と宮総代が「稲荷大明神」「若宮大明神」「大歳神社」「金比羅神社」の幟を持ちます。また、閏年のみ、「稲荷」「若宮」と呼ばれる神輿が２台加わります。

宵宮

午前６時に消防団が幟立てを行い、８時頃から大当・歩射当・宮総代によって神輿が長床に運ばれ、飾り付けられます。

午後５時、宵宮の神事が行われ、神輿に御魂が移されます。大当・歩射当・宮総代は幣殿に並びます。神事終了後、当人が給仕してイリコ・神酒で直会が行われます。

午後７時半ごろから村人が集まり、８時に大当によるお祓いを受けて直会した後、福投げが行われました。



大当によるお祓い

本宮

本宮の日、子ども神輿が地区回りをします。神事は午後２時開始、長床には「お旅」の参加者と神輿かきが座します。宮総代が役割分担を告げ、お旅が始まります。参道を経て宮の周りを３周し、鳥居東の広場に向かいます。広場には午前中に祭壇が設けられており、そこで神事が執り行われます。その後、神輿は境内に戻り、社殿の周囲を時計回りに３度回ります。その間、子ども神輿は境内を往復しています。





御旅の行列



御旅所での神事

午後３時過ぎに神輿は長床に還御、御魂抜きの神事が執り行われます。イリコと神酒での直会が済むと、触れ太鼓の合図で餅投げが始まり、秋祭りが終了します。

特徴

歩射当を経て大当を務める形は、年齢順に異なるオトウを務め、最年長者が最も重要な行事を担当した古い形態を残すものといえます。（埴岡）

調査年月日　2008年10月11・12日
　　2012年10月６・７日
調査場所　加美区熊野部　稲荷神社

㊽安楽田（あらた）　秋祭（あきまつ）り

荒田神社（あらたじんじゃ）と荒田神楽（あらたかぐら）の起源

妙見山の南麓に位置する荒田神社は、的場の荒田神社とともに、式内社と伝えられる由緒ある神社です。



荒田神社

安楽田は、昔は荒田と称され、杉原川の氾濫と大火に苦しめられていました。なかでも寛文8年（1668）の大火では、荒田神社の社殿までも焼失しました。当時の豪農池田太郎兵衛は度重なる災害は、神の怒りにふれた祟りとし、荒田大明神の怒りを鎮めるために伊勢大神楽の門をたたき、青年に神楽を習わせ荒田神社に奉納したのが、荒田神楽の始まりと伝えられています。舞には、神来舞（しぐるま）、荒神払、地舞、四方の舞、扇の舞、鈴の舞、剣の舞、背次ぎ、花の番が伝えられていましたが、残念ながら古典舞の神来舞は途絶えてしまいました。現在荒田神楽は、町指定文化財となっています。

祭礼の準備

祭礼の約1ヶ月前より、公民館で神楽舞の練習が始まります。宵宮の前日にお当人と保存会員は全員揃って、お日待ちをします。午後６時に公民館に集まり、神楽の準備をして、午後7時から荒田神社の拝殿で、お神酒を供えて荒神払を舞い、午後9時に解散します。かつては一晩中、拝殿にとどまり、神楽舞の曲目をすべて舞っていたと言われています。



練習風景

宵宮（奉納神事）

午後4時から荒田神社境内に土俵が作られ、奉納子ども相撲が行われます。以前は男子のみの参加でしたが、現在は女子も参加しています。



子ども相撲

午後６時に神楽保存会員が公民館から神楽と長持ちをもって荒田神社へ向かい、午後７時から氏子が見守るなかで、拝殿で神楽舞（荒神払、地舞、四方の舞、扇の舞）が奉納されます。



宵宮　神楽奉納

午後８幣時になると宮司を迎え、祝詞の奉上、玉串奉奠の神事が行われます。その後、拝殿で当人と宮司によって、氏子の供えた菓子類を餅まきと称して参拝者にまかれ、宵宮の行事は終了します。

本宮

早朝の４時半に神楽保存会員が公民館に集まり、５班に分かれて獅子が一戸一戸に、家内安全・五穀豊穣を祈願しますが、大火に見舞われた苦い経験から家の奥まで御幣と鈴を振り、荒神様（カマド）の前まで進んで清めたあとに、玄関前で荒神払の舞を舞います。



家の奥まで進む神楽

各班は、中学生と高校生を中心とした若者で組織され、神楽３～４名、笛１～２名、御花集め１名で行動し、各家での舞が終わると、家の者からお米（２～３合）と金一封が御花集めに渡されます。獅子が移動中に子供の頭を噛む場面が見られますが、獅子に噛まれると健康に育つと言われています。



各戸への荒神払

５班の獅子が全戸を舞い終わるのは、午前９時半頃になります。その頃に子ども神輿が公民館を出発し、村廻りをします。



子ども神輿

午後になると、各隣保１ヶ所づつ神楽舞を舞い、午後２時頃に公民館前に集合します。この広場で最後に全ての舞いを披露します。具体的には、荒神払（約３分）、地舞（約12分）、鈴の舞（約10分）、剣の舞（約25分）、四方の舞（約９分、天狗が登場）、扇の舞（約19分、天狗が登場）、花の番（約27分、天狗とお多福が登場）、背次ぎ（約15分）が執り行われます。



荒神払



扇の舞



背次ぎ

その後、広場で餅まきをして、午後４時頃に宮入となります。荒田神社の拝殿で荒神払の舞を舞い、秋祭りは終わります。（本林）

調査年月日　2011年10月８日・９日

調査場所　　中区安楽田　荒田神社・公民館

㊾岩座神（いさりがみ）　秋祭り（あきまつり）とお当渡（とうわた）し

五霊神社（ごれいじんじゃ）とお当

五霊神社は、延宝の検地帳に「外除地 七反歩 五霊神社境内」と記されていることから、江戸時代前期以前から存在していた神社です。



五霊神社

神社のお当人は３人で、そのうち主となるお当人である「かぎと（鍵人）」は年齢順に廻り、他の２人は家の順に廻っています。かぎとは、「ゆうだすき」を首に掛け本殿に入ることができます。



お当事箱の墨書

お当事箱は３箱あり、秋祭りにこのお当事箱の引渡しによるお当渡しが行われます。このお当事箱の内２箱には「明和六年（1769）丑九月十四日」の墨書があります。

秋祭り

岩座神は現在17軒の小規模な集落ですが、秋祭りになると親戚の子どもたちもやって来て準備を手伝い、皆で力を合わせ曳山を神社へ奉納します。加美区では山野部、山寄上、そして岩座神でしか見られない曳山のお祭りです。

宵宮当日の朝から、全員で幟立て、提灯立て、御神灯立てなどの準備にかかります。それが終わると、曳山の飾り付けです。曳山内に収める作り物は毎年「松竹梅」ですが、周りを囲う垣根を竹と檜葉で新調します。作り物の周りに敷き詰めるのは、キツネノクビマキ（ヒカゲノカズラ）と村人が呼ぶシダ類です。曳山の周囲に幕を張り、提灯を下げ、屋根に御幣を取り付けると完成です。



準備風景



曳山





拝懸魚の墨書

この曳山は、明治時代終わりから大正時代頃に、神崎郡から中古品が購入されたと伝えられています。唐破風屋根の拝懸魚の裏には、「浪花彫刻師相野伊兵衛」と江戸時代末頃に活躍した彫刻師名の墨書があります。

一方、お当人３人は神社とお当事箱の注連縄を新調し、祭壇を整え、神事の準備をします。

そして、午後８時、お囃子の太鼓を叩く人が乗り込み、曳山は公民館を出発します。神社までの急な坂道を、少し進んでは止まって曳山音頭を唄い、また少し進むという具合に曳いて上がります。

神社では、区長、宮総代、お当人が、拝殿で待ち受けて出迎えます。曳山は拝殿に向かって傾けられ、お辞儀をする格好になり、そのままで曳山音頭が唄われて、曳山の活躍は終了します。







曳山の引き上げ



餅投げ

その後、餅投げが行われて宵宮は終了しますが、曳山は拝殿横で一晩安置されます。

お当渡し

本宮の朝、氏子立ち会いのもと、幣殿に旧当人、新当人、区長、宮総代が座し、宮司による神事が執り行われます。

神事が終わると、宮司は本殿前に供えられていたお当事箱３箱を旧当人の前に一旦置き、１箱ずつ新当人に渡します。こうして、お当事箱の引渡しが終わると、旧当人の給仕で直会が行われ、切り分けられた鏡餅の御供さんをいただいて帰途につきます。

そして、午後３時に再び集合し、みんなの手で曳山が下ろされて、祭りは終了します。

（早崎・宮原）



お当渡し

調査年月日　2013年10月12・13日
調査場所　加美区岩座神　五霊神社

⑥0轟　河上神社の秋祭り

河上神社とお祷

河上神社は轟・西山・山口３地区の氏神で、祭神は彌都波能賣命・市杵島毘賣命・本（誉）田別命。元禄時代から棟札が残っています。

お祷人２人は、１ヶ月交代で神社の世話をします。３月のお祷渡しには弓射神事があり、旧祷人を「過番」、新祷人を「上番」と呼びます。秋祭りは、氏子３地区のお祷人が世話をします。



河上神社

宵宮

宵宮には、３地区のお祷人は拝殿前の決められた場所に幟を立てます。轟のお祷人が境内を清掃、鳥居前・拝殿前・摂社の大井戸神社前に榊を立てる等の準備をします。

午前10時、３地区のお祷人など12名が出席して宵宮の神事が執り行われます。その後、お祷人らと神輿担ぎの人たちが神輿の飾り付け、御幣など行列の準備を行います。御神灯作りは、川裾祭りの当番の役目です。

午後６時から翌日の午前２時まで、３地区のお祷人はお日待ちをして参拝してくる地区の人々を迎えます。

本宮

本宮では、午前５時半に10月担当のお祷人が祭壇を用意、午前８時にはお祷人２人で参加者を迎える準備をします。

午前8時半に神輿担ぎ12人が参集、着替えて白丁姿となります。９時半頃、神輿担ぎ・御幣などを持つ人々に神酒・イリコが振る舞われます。この頃、轟・西山の子ども神輿がにぎやかに到着しました。

午前10時、赤幟を先頭に行列が出発します。行列は参道を出てすぐ川裾祭りを行う場所で休憩、３地区のお祷人が神酒・イリコを振る舞います。この場所は弁天様が祀られていたといい、



赤い幟が先頭の御旅

御旅所だったのかもしれません。10時半に西山公会堂に到着、西山地区の接待を受けます。山口地区に到着したのは11時、ここでも地区の人々の接待を受けます。休憩時にずらっと並ぶ御幣は、神社に祀られる神々が集う姿と重なります。河上神社に神輿が還御したのは、11時半過ぎでした。



神輿の差し上げ

特徴

赤幟を先頭に多くの御幣が渡御する光景には、独特の風情があります。お祷人も「ゆうだすき」を掛けて本殿に入り、お祷状箱を持つことを厳守するなど、古い形態を残しています。轟地区には、他に川裾祭りと虚空蔵堂の当番もあります。（埴岡）

調査年月日　2011年10月８・９日
調査場所　加美区轟　河上神社

⑥1中野間･下野間　貴船神社の秋祭り

中野間と下野間の貴船神社

中野間の貴船神社は、創建が嘉吉年間（1441～1444）と伝えられ、中野間･仕出原･下野間３ヵ村の氏神です。



中野間　貴船神社

下野間は村内にも貴船神社があり、神社のお当は、現在15隣保のうち10の隣保が受け持ち、昔から決められた順番で巡回していきます。お当を受けた隣保では、講元を１人決めます。お当隣保の仕事は月末の神社掃除、一日参り、正月の準備、そして秋祭りの流鏑馬神事とお当渡しがあります。



下野間　貴船神社

秋祭りでは、３ヶ村が、１年ごと順番に中野間の貴船神社の流鏑馬神事を担当します。本年は下野間が担当地区であるため、下野間と中野間両方の神社で流鏑馬神事が行われ、両宮の神事となります。下野間の貴船神社のみで流鏑馬神事を行う年は、片宮と言われます。

秋祭りの準備

９月中旬、花の宮公民館に中野間、仕出原、下野間の各区長と宮総代が参集し、今年の例祭の日程を決定し、会計報告を行います。

その後、担当地区の下野間は、10月１日に下野間住民センターで、各隣保から１人ずつお当講員（以下講員と呼ぶ）を選出し、秋祭りの段取りや担当を決めます。

宵宮〈下野間〉

お当隣保は、午前７時半に集合し、鳥居前に幟を立て、下野間の貴船神社の本殿・拝殿、小宮さんの金比羅神社、天満神社、八将神社に幕を張ります。また、清めの糠と塩を本殿に供え、各神前、灯籠前、狛犬前には氏子が作った甘酒を供える碗を置きます。



神社での準備

その一方で講員は住民センターで、流鏑馬神事の準備をします。両宮の神事の年には、中野間から事前に、太鼓・槍・傘・供物箱・馬の鞍・弓・矢・緋色の幟（御旅幟）の御旅行列の道具が講元に届けられています。赤・白・緑の三色の御幣を作り、傘と槍、弓と矢、太鼓、そ



流鏑馬神事の準備

して馬乗りが被る笠などに付けます。そのほかにも供物箱２箱（徳利と膳）があり、徳利の箱は中の桧葉を入



整えられた流鏑馬神事用具

れ替え、担ぎ棒に紅白の布を巻き、御幣を付けます。昔はこの供物箱に、供物を入れて行ったと言われています。

また、村内の各神社（天満宮、稲荷神社、金比羅神社、新宮神社）やお堂（薬師堂）に二重の餅を供えます。

午後７時半に住民センターで「お当の宴」が催され、講員は略礼服にて講元から接待を受けます。午後10時頃になると、屋台が村廻りから帰って来るのを出迎えて解散します。



宵宮　祷元･講員の屋台の出迎え

本宮〈下野間〉

午前８時に講員は略礼服で、下野間住民センターに集合して、出立ちの宴を始めます。その頃、神社では拝殿前に屋台の担ぎ手が集まり、区長の挨拶の後、全員で参拝します。境内で屋台を練ってから、住民センターに向かい、講員の前で屋台を差し上げた後、村廻りに出発します。

一方講員は野間川の井堰で、塩と糠で祓い清めた後、川の水で手足を洗い禊ぎをして、藁草履に履き替えます。



野間川での禊ぎ

その後、住民センターに戻り、塩まき役の講元と使者２名以外は全員裃に着替え、前日に用意した御旅所用の行列道具を持って、下野間の貴船神社に参拝して拝殿を時計回りに３周します。そして白幣を持つ先持ちを先頭に、中野間の貴船神社まで御旅行列を行います。



神社への御旅行列

行列の順序は、先持ち、旗持ち（御旅幟）、講元、供物箱（２名）、御幣（馬）、弓持ち、矢持ち、槍持ち、傘持ち、的持ち（３名）、太鼓持ち（２名）、使者（２名）となります。

本宮〈中野間　貴船神社にて〉

午前11時20分には中野間の貴船神社に到着します。拝殿前で宮総代と役員、区長、神主当番、宮司が御旅行列を出迎え、宮総代の挨拶後、御



神社を３周巡る



神事

旅行列は本殿を時計回りに３周します。その後、御旅道具は神主当番の指示のもと拝殿に収め、全員幣殿内畳の間にて整列着座します。

午前11時40分に、宮司による神事が執り行われ、玉串奉奠が終わると洗米と赤飯と御神酒で直会が行われます。式典終了後、全員が拝殿前で整列し、３地区の屋台の宮入を迎えます。



屋台の練り込み

午後１時になると、神社前の参道で流鏑馬神事が執り行われます。馬乗りが神社に向かい「五穀豊穣、氏子安泰」と祈願し、３度、弓矢で的を射ます。まず、塩まきが道先を塩で清めながら走り、その後を馬乗りが参道を往復します。その間に「的持ち」は神社に的を取り替えに行きます。それを３度繰り返し神事が終了します。御旅では下野間の的３本を持って行きますが、神事には中野間の的９本を使用します。



中野間での流鏑馬神事

なお、中野間の貴船神社の的には「元禄四未年（1691）九月吉日　中野間村　下野間村」、「文政元年（1818）寅九月吉日　中野間邑　下野間邑」と墨書されたものが残されています。

神社の本殿に戻ると、中野間の御旅道具は返却し、持参した下野間の的３本と御旅幟のみを持って下野間に戻ります。

本宮〈下野間　貴船神社にて〉

午後２時頃に住民センターに到着すると、講員は食事となります。そして、午後３時には下野間の流鏑馬神事が始まります。まず、講員は神社に参拝し、今度は下野間の緋色幟・弓矢・的を持って、二礼二拍一礼の後、拝殿を時計回りに３周します。その後、神社の参道で、中野間での流鏑馬神事と同じように儀式を執り行います。



下野間での流鏑馬神事

流鏑馬神事が終了後、神社拝殿にて下野間のお当渡しが行われます。新旧講元の挨拶後、御神酒と赤飯をいただき、お当の箱を交換してお当渡しが終了します。お当渡しが終了すると、屋台が境内を練ります。



お当渡し

その後、使者２名は３ヵ村で共有する鞍、緋色幟（御旅幟）、お当事箱を持って仕出原へ翌年度の引き継ぎに行きます。（本林）

調査年月日　2009年10月10日・11日、
2012年10月６日・７日

調査場所　八千代区下野間・中野間　貴船神社ほか

⑫的場（まとば）　荒田神社（あらたじんじゃ）の秋祭（あきまつ）り

荒田神社

荒田神社は、少彦名命・木花開耶姫命・素盞嗚尊の３柱を祀り、天平勝宝元年（749）創建で、播磨国の二宮と言われています。また、平安時代に坂上田村麻呂の崇敬を受け、田村麻呂が本殿を造営し、上棟の日に白馬60疋を献じたとも伝えられています。

秋祭りに今も行われている御旅行列は、本殿内の金幣白幣に神霊を移し、神宝神具を供奉して行列を組みますが、古来より、金幣白幣の捧持者は奥荒田の藤村姓の一統に限られています。



荒田神社

荒田神社の氏子

荒田神社の氏子は奥荒田、的場、寺内、西脇の4ヶ村ですが、オトウ制度は無いため、祭りは、各村から選出された宮総代を中心に行なわれています。

10月の秋祭りでは、寺内と西脇は余興、奥荒田は花火を担当し、祭りの間、行事が進行するたびに花火を打ち上げます。的場からは屋台（ふとん太鼓）が出ますし、神社の幟立てや飾り付けも的場が行います。そして各村から子ども神輿が出て、祭りを盛り上げます。

秋祭り

９月になると、神社周辺の美化作業などの事前準備が始まります。また、祭りに合わせて神社の注連縄をすべて新調するための「注連縄作り」が行われます。これは各村持ち回りで、４年に一度１ヶ村で担当します。今年は的場が当番となり、長いものでは３ｍもある注連縄、大小12本が綯われます。



注連縄作り

宵宮の朝、的場では宮司により屋台と子ども神輿のお祓いが行われます。また、荒田神社では的場の人たちが、拝殿や随身門の廻りや小宮に提灯を付けます。この提灯は、的場各家に一張りずつあり、世帯主の名前が書かれています。提灯は神社で保管されていて、隣保単位で取り付ける場所を１年ごとに変えていきます。提灯の他、御神灯も各家にあり、祭りの間、的場の各家では御神灯が点されます。日が暮れて神社の提灯に灯が入ると、闇の中に随身門や広大な拝殿の美しいシルエットが浮かび上がります。



宵宮の神事



宵宮の準備

午後６時、花火の合図とともに余興が始まり、ビンゴゲームや大福引き大会で宵宮を楽しみます。



宵宮の荒田神社

本宮の見所は、やはり御旅行列と屋台の錬入です。御旅の参列者の中で重要な役割である金幣さんは、御神体を持つ役で、毎年藤村家本家が一統内から１人選びます。そして、宮司、代表総代１人、４ヶ村の宮総代と区長で行列を組みます。御旅参列者が列席し、神社で神事と直会が行われた後、御旅行列が始まります。行列の順は、先頭が塩を撒く露払い、続いて白丁姿の金幣さん、宮司、その後に鏡、剣、弓矢、長刀、矛を持った人が従います。露払いと金幣さんは、口に榊をくわえています。藤村本家の人は本殿内の金幣３体と白幣２体を、１体ずつ順に持ち出し金幣さんに渡します。　御旅は、境内南出入口から出て南下し、参道をぐるっと廻って鳥居前まで戻り、鳥居から随身門を経て拝殿前へ行き、金幣を交換するという行程を５回繰り返します。



御旅

御旅が３回終了したところで、待機していた屋台がいよいよ動き出します。鳥居をくぐり、随身門前の階段を上がったり、屋台を差上げたりして練った後、境内の入口で待機します。その間も御旅は続いていて、５回目の御旅が終わると、ようやく屋台は境内に入り、観客が見守る中、再び拝殿前で錬ります。屋台の宮入に続いて、子ども神輿も次々と宮入します。



屋台の宮入



屋台と子ども神輿

宮入の後、バルーンショーや歌謡ショーなどの余興を楽しみ、最後に餅投げが行われて祭りは終了します。（早崎・宮原）

調査年月日　2013年９月29日、10月12・13日
調査場所　加美区的場　荒田神社

㊸糀屋（こうじや）　稲荷神社（いなりじんじゃ）の秋祭（あきまつ）り

稲荷神社とお当

推古天皇２年（593）法道仙人の創立、現在地に遷座したのは天安元年（857）とされ、稲荷郷（糀屋・安坂・森本・曽我井・坂本）の氏神です。足利尊氏や赤松氏の崇敬、千姫による護摩堂寄進などが伝えられています。秋祭りの他、大きな行事として２月の初午当、８月１日の八朔祭りがあります。



稲荷神社

現在は隣保当で、氏子５地区からそれぞれ出ます。秋祭りは、神社奉賛会と祭当番（さいとうばん）地区によって進められます。祭当番は、11月23日新嘗祭の日に引き継ぎ式があります。

準備

９月８日、浦安の舞いを舞う舞姫８名と保護者への説明会が開かれます。舞姫は、祭当番を除く氏子４地区から２人ずつ選ばれます。浦安の舞いは４人舞いなので、宵宮・本宮は別の舞姫が舞います。祭当番の地区では、９月15日に奉納相撲の打ち合わせ、屋台運行の打ち合わせを９月22・28日、29日に神社境内と公園内の清掃について担当隣保の打ち合わせを行い、夜には役員会で最終的な確認が行われます。

10月６日午前７時より、御神灯・幟立て・土俵作り・神社周辺の清掃などが行われます。担当隣保は持ち回りですが、御神灯の準備は毎年安坂が行っています。拝殿前の幟立ては祭当番地区が行うため、５年に一度回ってきます。なお、幟立ては氏子各地区の神社でも行われます。



浦安の舞

秋祭り

宵宮の日、舞姫は午後６時に集合して装束を着付けます。区長・宮総代・お当人ら祭典の参列者は社務所に集合した後、行列して参拝、舞姫の行列が後に続きます。祭典は午後７時に始まり、浦安の舞いを奉納して終了します。

本宮の日、各地区の屋台は午前中に地区の中を回ります。祇園囃子などが歌われ、所々で差し上げを行うなど、一気に祭り気分が高まります。屋台はそれぞれ決まった場所で休憩しながら、その年の順番に従い、午後１時半の宮入りに合わせて神社前に集まります。



地区回りをする屋台

午後12時半舞姫の着付けが行われ、１時に参列者が社務所に集合します。その後、鳥居前で各地区の警護長を先頭に各自決められた執り物を持って「御旅」供奉の隊列を組みます。ただし、現在は御旅所への神幸はありません。かつては森本の大歳神社が御旅所であったと伝えられています。各地区のお当人は小白幣を持ちます。この頃、各地区の屋台が宮前に集まってきます。各地区の屋台警護人が鳥居前で集合、挨拶した後に鳥居の御神灯が引き上げられ、屋台が順番に入ってきます。

午後１時半、御旅の行列が参進し、神主以下列席者は拝殿前に設営された舞台上に並んで屋台の宮入りを迎えます。区長・宮総代・お当人ら各地区の参列者は、自分の地区の屋台が宮入りしてきた時のみ舞台に並んで出迎えます。各地区の屋台は境内を回った後、拝殿前で差し上げを行い、社殿の周りを回ってから所定の位置に屋台を置きます。この時に摂社東照宮の前で差し上げを行いますが、これは徳川家からの寄進で稲荷神社が大きくなった事への感謝と伝えられています。



御旅の行列



拝殿前の屋台差し上げ



社殿を廻る屋台

午後２時すぎ祭典が執り行われ、浦安の舞いが奉納されます。境内では、並行して子ども相撲がにぎやかに行われます。午後３時から境内ではさまざまな余興が行われ、その後で神社役員による餅投げがあり、午後５時に屋台の下向が始まります。これで秋祭りは終了しますが、電飾を点した屋台が下向を終えるのは夜に入ってのことです。



子ども奉納相撲



屋台の下向

特徴

氏子５地区が輪番で務める秋祭りの祭当番は、稲荷神社が５ヶ村の総氏神であることをよく示していますが、お当としては２月の初午当に古い形が残っているといえます。このお当も今は隣保当ですが、昭和38年までは一代当で当人は３名でした。当番隣保は「おとうじょうはん」（お当事箱）と初午当で用いる弓矢を預かり、お当事箱は隣保全員を順番に回ります。お当渡しでは、お当事箱・弓矢とともに「的の尺竹」が引き継がれます。大切に保存されている元の「的の尺竹」は、「氏子５ヶ村は一村なり」として一本の竹を５つに割って作ったとされます。文化年間に森本・曽我井が離れ、現在は糀屋・安坂・坂本３地区で弓射行事を行っています。

（埴岡）

調査年月日　2013年10月12・13日
調査場所　中区糀屋　稲荷神社

㊹中安田（なかやすだ）　安田郷稲荷神社秋祭り（やすだごういなりじんじゃあきまつ）

中安田の稲荷神社とお祷渡し

かつての安田郷の中安田･東安田･西安田･羽安の４ヶ村の氏神である稲荷神社は、元は西安田のイヤガ谷から宮ヶ谷に遷宮の後、元和３年（1617）現在の地に移されたと伝えています。



中安田　稲荷神社

この稲荷神社の秋祭りには、それぞれの村でお祷渡しが行われています。中安田のお祷人の記録は、寛文６年（1666）から残っています。

秋祭りの準備

９月１日から屋台の太鼓の稽古が始まり、10月１日に中安田、東安田、羽安の３ヶ村のお祷人はそれぞれに酒1升と白米1升を持参して、稲荷神社に預けていたお祷状箱を受け取りに行きます（お祷状受け）。



お祷状受け

中安田では秋祭りの前々日には、青年団による太鼓の稽古上げが祷元、打子、区長宅で行われます。また、前日には４ヶ村の区長と宮総代で福餅を袋詰めにします。

お祷神事（お祷渡し）

中安田では、お祷人は７人で受けることから、七人祷と呼ばれています。宵宮の午前中にお祷人は公民館に祭壇を作ります。午前11時半までに区長、宮総代、祷人は略礼服で扇子を持参して公民館に集まり、出席者を迎えます。出席者は最初に祭壇で二礼二拍一礼を行い、12時前に屋台が公民館に到着するを待ちます。

12時になるとお祷神事が始まり、宮司の祝詞、玉串奉奠の後、お祷箱を捧持するお祷人が先頭になり、洗米、お神酒、赤飯を持つお祷人が出席者全員に回り、接待します。その後、出席者に折詰の弁当を出して、祷人酒の接待となります。

午後１時半頃に２つのテーブルに分かれて、現祷人と新祷人とのお祷渡しとなります。現祷人には７人分の盃が置かれ、什長５人によって、現祷人から新祷人へ盃を渡すとともに、お祷箱、洗米、お神酒、赤飯の順で回します。その後、旧新の祷元の挨拶で式は終わります。

式後、新祷元の家へ御璽やお祷箱を運び、祷家に着くと祭壇を組み、祝詞を上げます。



中安田　お祷渡し

西安田では、お祷は５人で受けます。お祷神事は、本宮の午前10時頃から始まり、午前11時頃からお祷渡しとなります。現祷人と新祷人が２列に並び、宮総代がお祷状箱を扇子に載せて現祷人５人に授けた後、現祷人は新祷人に渡します。その後謡が流れる中、盃事が執り行われ、氏子による祇園囃子が唄われる中、新祷人を見送ります

東安田では、お祷は６人で受けます。本宮の午後１時半からお祷神事が始まり、神事後祝宴が行われます。この祝宴の間には、再来年のお祷人を決めるくじ引きも行われます。その後祭壇前に新旧のお祷人が対峙して、新旧祷元によるお祷状箱の受け渡しがあり、謡の流れる中盃事が執り行われます。



西安田　お祷渡し



東安田　お祷渡し

宵宮

午後７時に４ケ村の区長と宮総代、そして舞姫が宮司宅へ集合し、午後7時半に行列して稲荷神社に行きます。神社では神事と浦安の舞が奉納されます。

本殿での式が終わると、４ヶ村のそれぞれのきらびやかに飾られた屋台の宮入りとなり、境内で担ぎを競い合います。宮入の順番は、宮司のもと４ヶ村のくじ引きで決められます。

この日の夜遅く、西安田のお祷人は、酒１升白米１升と赤飯を持参して、稲荷神社に参拝する丑の刻参りを行います。これは、稲荷神社が西安田地区内に鎮座していたという歴史的背景を反映しているとともに、本宮での中安田・東安田・羽安の３ヵ村のお祷人による祷上がり神事に対応するものなのでしょう。



屋台の宮入



西安田の丑の刻参り

本宮

午後３時半に４ケ村の区長と宮総代が稲荷神社に集合し、餅の引き換えと福引の準備をします。

午後４時に中安田･東安田･羽安の祷人は、稲荷神社へ「祷上がり」を行うために集まります。中安田では、７人の祷人が、榊、お祷箱、酒１升、白米１升を持って参列します。



祭り最後の屋台の練り込み

午後４時半頃に祷上がりの神事が終わると、鳥居前に作られた仮設の高台から、区長や宮総代によって福餅の餅まきが行われ、色の付いた餅には景品が貰えます。

午後５時過ぎに、それぞれの太鼓が神社に下向し、境内で担ぎを披露しつつ、午後６時半頃に終わります。（本林）

調査年月日　2010年10月９日･10日、
2013年10月1日･10日･11日

調査場所　中区西安田・中安田・東安田
稲荷神社ほか

㊺西山（にしやま）　秋祭りとお当渡（あきまつりとうわた）し

金比羅神社（こんぴらじんじゃ）とお当

西山の村を見下ろす山腹に位置する金比羅神社には、金比羅神社・八幡神社・秋葉神社・浦嶋神社・山乃神社・稲荷神社の６社が合祀されています。

金比羅神社のお当人は３人で、家の順番（行政順）に廻っていて、３人の内の主となる人が、「おとうじょうさん」と呼ばれるお当事箱を預かります。10月の秋祭りに、お当渡しが執り行われます。



金比羅神社

お当渡しと秋祭り

お当渡しの当日、参道入り口に御神灯、境内に幟が立てられ、拝殿の廻りに幕が張り巡らされます。境内には、子ども相撲のための土俵が作られます。神前には、二重ねの鏡餅が載せられた三宝が６つ、お当事箱、奉納相撲のご祝儀が供えられています。

午前７時に氏子が参集すると、拝殿にお当人３人を中央にして全員着席し、進行役が式を進めていきます。まず、全員で神殿に向かって二礼二拍一礼の後、直会が行なわれます。宮総代と区長から順に氏子全員に小盃で御神酒が廻り、そして洗米と赤飯が配られます。次に大盃で２回目の御神酒が廻り、御供餅が配られます。

お当渡しに移ると、神殿に向かって右に旧当人、左に新当人が向かい合って座し、盃事が始まります。まず、旧当人は御神酒が注がれた盃を受け、受けたままの状態で、全員で謡曲「鶴亀」を謡い（現在はテープによる）、改めて御神酒を注ぎ足した後、飲み干します。新当人も同じように盃を受けますが、その時の謡曲は「難波」です。次にお当事箱の引き継ぎです。旧当人が神前のお当事箱を下げに行き、新当人に渡すのですが、「ゆうだすき」を掛けていないとお当事箱を持つことができないので、少々複雑なやりとりになります。無事にお当事箱とゆうだすきが新当人に渡され、お当渡しが終了します。





お当事箱とゆうだすきの引継

お当渡し終了後、新当人の行司で奉納子ども相撲が始まります。今年生まれた子どもから始め、相撲を取ると水引を掛けたご祝儀をいただきます。（早崎・宮原）



奉納子ども相撲

調査年月日　2008年10月12日
調査場所　加美区西山　金比羅神社

㊻市原（いちはら）　秋祭りとお当渡（あきまつりとうわた）し

熊野神社（くまのじんじゃ）とお当

延宝５年（1677）の検地帳によれば、市原には「新宮」と「二軒宮」の２つの神社があったことが分かります。「二軒宮」とは大歳神社と稲荷神社で、専浄寺の近くにあったと伝えられ、後に熊野神社（新宮）に合祀されました。現在、熊野神社の本殿は、中央の通路を挟み２つに分かれ、向かって右に、伊邪那美命と大歳神が、左に伊邪那岐命と稲荷神が祀られています。



熊野神社

市原のお当人は４人で、熊野神社の一番・二番、大歳神社の一番・二番と呼ばれ、「神さん」と呼ばれるお当事箱が４箱あります。

秋祭り・お当渡し

本殿前に設えられた祭壇前で、宮司による神事が執り行われた後、長床で宴が始まります。その途中、お当人はお供えの御供餅を箸で配り、氏子は扇子でこれを受けます。宴たけなわの頃、熊野神社、大歳神社のお当のくじ引きが別々に行われます。15年に一度はどちらかのお当人が当たるのですが、割り箸のくじを氏子が引くた



本殿前に参列しての神事

びに歓声が上がり、大いに盛り上がります。

次期当人が決まると、すぐにお当渡しの儀式が始まります。区長と宮総代を挟み、新旧当人が向かい合って、お当渡しの場が設けられます。双方挨拶の後、まず、旧当人が盃を受け、次に新当人に渡します。新当人は盃を捧げ持ち、宮総代の謡う謡曲が終わると飲み干します。続いて、お当事箱の交換が行われ、新当人はそれぞれのお当事箱を神前に奉納して、お当渡しが終わります。



くじ引きでの盛り上がり

午後から、四隅に柱を立て、幕を張り巡らせた立派な土俵で、子ども奉納12番相撲が行われます。区長が相撲取組表に従って呼び出し、副区長は行司の衣装に着替えて土俵に上がります。相撲を取る子どもは、腰に赤いさらしを巻いています。皆が見守るなか、びっくりして泣き出す赤ちゃんやら、白熱した取り組みを見せてくれる子やら、応援にも熱が入ります。子ども奉納相撲の後、餅投げが行われ、祭りは終了します。（早崎・宮原）



奉納子ども相撲

調査年月日　2008年10月13日、2009年10月12日
調査場所　加美区市原　熊野神社

⑰山寄上（やまよりかみ）　秋祭りとお祷渡（あきまつ　とうわた）し

山寄上　青玉神社

山寄上は、杉原川の最上流域、三国岳の麓にあり周囲を山が迫る地区です。氏神の青玉神社は、鳥羽の青玉神社の分社と伝えられています。祭神は鍛冶の神様とされる天目一筒命（あめのまひとつのみこと）で、柚の木のトゲで目を突き、片方の目が青色になったため青玉神社と呼ばれるようになったと伝えられています。



青玉神社

秋祭りとお祷渡し

かつて、山寄上の秋祭りには曳山が村の中を練り、曳山踊りが踊られていました。昭和49年（1974）に長らく途絶えていた曳山が復活しましたが、その後平成５年（1993）に踊られたのみで、残念ながら、現在は行われていません。

秋祭り当日、神社でお祷渡しが行われます。３人のお祷人が、早朝から拝殿に幕を張ったり、提灯を掛けたり準備します。本殿前に供えられているのは、御神酒・七種類の野菜・「もっそ」と呼ばれる木椀に大盛りにもった赤飯、御神体の「ことぼし」という灯籠、曳山に付ける御幣と玉串です。

午前８時半になって氏子が参拝すると、お祷人は御神酒ともっそで接待します。そしてそのまま、煮染めと漬け物でしばらく宴会です。

10時半から、お祷渡しが始まります。新旧祷人が横一列に座し、旧祷人から順に盃をいただきます。そして、旧新祷人の挨拶後、「とりの盃」に移ります。中央のお祷人を囲むように両側に座っている氏子に、向かって右の列は右廻りに左の列は左廻りに盃が廻り、折り返して最初の人に戻ってきたら（戻り盃という）長老の謡が始まります。謡が終わると、飲み干してお祷渡しが終わります。



曳山の村内巡行



お祷渡しの盃事

３人の新祷人のうちの１人が、ことぼしを本殿前から下げてきます。ことぼしは、１年の間４ヶ月ずつ、３人のお祷人が預かります。ことぼしと御幣を持った新祷人を先頭に参道を下り、宵宮に鳥居内に宮入していた曳山の屋根に御幣を取り付けます。この年の曳山の作り物は「五穀」です。この後、曳山は村廻りに出発します。

（早崎・宮原）



ことぼしと御幣を受け取る新祷人

調査年月日　2008年10月13日
調査場所　加美区山寄上　青玉神社

⑱中三原（なかみはら）　秋祭（あきまつ）り

中三原　大歳神社

中三原の大歳神社は、中三原と上三原の氏神で、創立年は不明ですが、建物は明治時代に再建立されています。拝殿にまで多彩な彫刻が施されていて、特に拝殿軒下をぐるりと囲む十二支の彫刻が見事です。脇障子には、明治16年（1883）3月の日付と、「新井弥三郎正次」の彫工師の名前を確認できます。



大歳神社

中三原のお党（とう）

中三原のお党は、神社前の第８隣保が約10軒で宮守をしていましたが、平成の初期に、この宮党（みやんとう）から隣保党に改正されました。幟立て・餅つき担当の「餅つき当番」と、行事・祭り担当の「お党当番」に分かれ、隣保単位で餅つき当番の翌々年に、お党当番が廻るようになっています。お党を受けた隣保の隣保長が「お党屋」で、「おとうじょうはん（お当事箱）」を預かります。

秋祭り

秋祭りの宵宮に、お党当番は神輿を出して幣殿に設置し、餅投げ用の櫓を組み上げます。餅つき当番は、約90kgの餅を搗き、幟は拝殿前に２本、柳山寺との村境に1本立てます。拝殿前には、上三原の幟も２本立てられます。お党人は「緋色の幟(旗)」を２本、家の庇に一晩中立てかけます。宵宮の夜には、神社で子ども会による子ども相撲が行われます。

本宮の昼12時になると、区長・宮世話・お党当番は党屋へ集まり、党屋の庭先に用意された場所で手を清め、出立ちの御神酒をいただきます。露払いの３人の子ども（男女関係なし）が御幣と御供さんを持って先頭にたち、緋色の幟持ちが続き、全員で行列を組んで神社へ向かいます。神社に到着すると、緋色の幟は拝殿前の中三原の幟にくくり付けられます。この緋色の幟は、お党人が到着したという合図も兼ねるそうです。上三原のお当人宅に立てられていた緋色の幟もお当人とともに到着し、上三原の幟にくくり付けられます。村廻りをしていた両村の子ども神輿も、神社に到着します。



子ども神輿の練り

かつて、神事は、地神主の上角氏が執り行っていましたが、現在は加西市の日吉神社の宮司が執り行っています。

午後１時、神事が始まり、玉串奉てんの後、幣殿の神輿に御霊入れが行われます。御霊入れの後、神輿の前で再び祝詞が奏上されます。そして、境内で子ども神輿が元気よく練った後、幣殿の神輿の御霊抜きが行われ、神事が終了します。午後２時から、盛大に餅投げが行われます。（早崎・宮原）



餅投げ

調査年月日　2008年10月13日
調査場所　八千代区中三原　大歳神社

㊾奥中（おくなか）　よいよいばと権現祭り（ごんげんまつり）

熊野神社と大歳神社



熊野神社

奥中には、熊野神社と大歳神社があります。『中町誌』に、明治41年に大歳神社を熊野神社に合祀したと記されていますが、その年に村内で災いが続いたため、夜に大歳神社を元に戻したという言い伝えがあります。現在の大歳神社の社殿や境内が小規模なことや、熊野神社に大歳神社の幟が立てられるのは、このことを反映しているのでしょう。

よいよいばと権現祭り

11月の最終日曜日に熊野神社で、「よいよいば」と「権現祭り」が行われます。祭り前日、大歳神社には大歳の、熊野神社には大歳と熊野の幟が立てられます。そして、熊野神社本殿裏に保管されていた、正月に両神社を飾った門松や注連縄を使って、大きな松明を1本作ります。



保管していた門松で松明を作る

祭り当日、お当人は、日の出前に熊野神社の境内に、松明の用意をします。区長と副区長立ち会いのもと、日の出と同時に、お当人が松明に火を付け、朝日に向けて倒し合掌します。これを「よいよいば」と言います。松明の倒れる方向を見て、今年の恵方を決めたとか、吉兆を占ったとかの言い伝えがありますが、定かではありません。

その後、お当人は本殿の供え物を整えたり、拝殿にゴザを敷いたりして権現祭りの準備をします。午前11時、氏子が参集すると、全員で本殿に向かって拝礼します。その後、御神酒と洗米で直会が行われ、お当人が用意したオードブルを肴に宴が始まります。





よいよいば

よいよいばを見ると、行われる時期からは冬至に関連した太陽のよみがえり、門松を燃やすトンドの火祭り、倒す方向で吉凶を占う年占、そして、かけ声からは豊作を祈る花振りなど、様々な農耕関係の予祝行事を思い起こさせます。奥中の年中行事のなかでも、この行事は多可町の他の村では例を見ないものです。

（早崎・宮原）

調査年月日　2008年11月30日、2009年11月29日、2010年11月28日
調査場所　中区奥中　熊野神社・大歳神社

㊿中村（なかむら）　妙見祭り（みょうけんまつり）

中村のお当

八千代区中村には、村の中心部に貴船神社と薬師堂、野間川の東岸に妙見堂があります。貴船神社は天船地区の坂本、中村、横屋、下村の４ヶ村の氏神であることから４ヵ村で祀られ、薬師堂は中村内の堂のお当番によって管理されています。

妙見堂と貴船神社境内の小宮さんを祀るのが中村のお当で、２人ずつ家の順に廻っています。お当人が関わる行事は、１月のお当渡しを伴う「初祈祷（冬祈祷）」、７月の「夏祈祷」と「あきおさん」、11月の「権現さん」、12月の「妙見さん」です。

妙見祭り



妙見堂



対岸に立てられた幟

最近建て替えられた小さなお堂が、妙見堂です。12月の第一日曜日にお祭があって、その日は、対岸に「妙見大菩薩　中村中　安政五年（1858）十一月戊午吉日」という、古い幟が立てられます。なぜ対岸に立てられるのかは分かりません。昔からのしきたりだそうです。妙見祭りは、お当人が餅投げをするだけの簡素なお祭りですが、大人も子どももたくさんの人がお参りします。

祭り当日、妙見堂の注連飾りは新調され、お堂の前には南天が立てられます。この注連飾りと南天は、そのまま正月飾りになります。お堂の中の神前に榊が立てられ、餅とミカンが供えられます。福投げ用餅２斗と、たくさんの飴とミカンも供えられています。お当人は、参拝者に、酒と肴で接待します。午後３時になると、お当人はまず餅投げから始め、次に飴、ミカンとまいて、祭りは終了します。



お接待



集まった村人



福投げ

中村の妙見さんは、幟にもあるように妙見大菩薩を祀りながら、お堂の中の祭壇には鳥居があり榊が供えられるという、神仏習合の形を残しています。（早崎・宮原）

調査年月日　2009年12月６日
調査場所　八千代区中村　妙見堂

⑦1中区坂本（なかくさかもと）　にじゅうそう

当勝神社（まさかつじんじゃ）と地神様（じがみさま）



当勝神社（二社神社）

坂本字土井の内に鎮座する当勝神社は、二社（にしゃ）神社（じんじゃ）とも呼ばれ、この地にあった地神さんと山中にあった当勝神社を合祀したものです。『中町誌』には「土井の内には土豪の居館址がありその屋敷地に祀られていた地神」と、記されています。また、文化財の発掘調査でも堀の跡が確認されて、坂本・土井の内遺跡と命名され、豪族屋敷に由来する地神との蓋然性が裏付けられました。

坂本の当勝神社は、粟鹿（朝来市）の当勝神社から勧請されたと伝えられています。

にじゅうそう

この神社で12月23日に行われるお祭を、「にじゅうそう」と言います。『中町史』によると、播磨地方北部に伝承されている「にじゅうそう」とは「二十三」で、霜月（旧暦11月）23日の霜月祭りのことだろうと記されています。霜月祭りとは収穫祭のことで、村の新嘗祭なのです。

祭りの日の朝、当番隣保は土俵作りや幟立てを行います。お札や御供さん（切り餅）も準備されます。お札は、坂本が属する稲荷郷の郷社である稲荷神社で刷られもので、「当勝神社三柱大神諸業繁栄退禍鎮疫安民守護攸」とあります。今は印刷されたお札ですが、昔は版木で刷られていました。

午後になると、氏子がお餅やみかんのお供え物を持って参拝し、御神酒の接待を受けてお札をいただきます。そして、宮司による神事の後、子ども奉納相撲が行われます。子どもたちは、用意されたおひねりがなくなるまで、何度も相撲を取っていました。



本殿前での神事



奉納子ども相撲

相撲が終わると、氏子が供えた餅で餅投げをし、参拝者にみかんを配って祭りは終了します。

（早崎・宮原）



参拝風景

調査年月日　2008年12月23日
調査場所　中区坂本　当勝（二社）神社

【アラカルト４】

年中行事での食

町内の年中行事では、それぞれの行事に欠かすことができない食べ物があります。それは独特の味付けや形でその行事を特徴づけ、地域の人々の結びつきを強めるものとなっています。

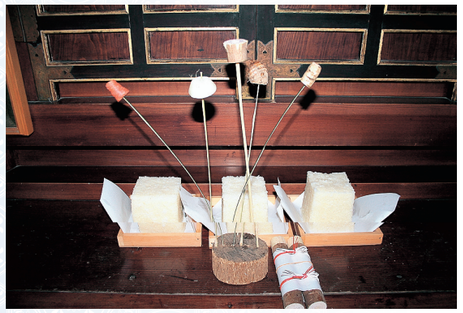
また、画一的な食の生産に対する懸念が広がる現代において、これらの食べ物は、旬の作物を使って季節を感じて味わうスローフードとしての郷土食でもあり、ユネスコの無形文化遺産に登録された和食に含めることができるでしょう。

ツキヌキ

「ツキヌキ」は、10㎝前後の直方体に作り上げられた御供さんの一種です。底の抜けた枡状の木製品に、赤飯や白蒸しを詰め込み仕上げています。このため、山野部オトウ文書の文政２年（1819）の『宮当籤引覚帳』には、枡で拵えることを示すように「ますもり」と記されています。



オトウ渡しのツキヌキ（山野部）



薬師頭のツキヌキ（山野部）



オトウ渡しのツキヌキ（安楽田）



オトウ渡しのツキヌキ（中区坂本）



薬師当のゴウヅイとツキヌキ（天田）



オトウ渡しでのツキヌキ（天田）

安楽田と中区坂本では赤飯のツキヌキ、天田では白蒸しのツキヌキがオトウ渡し（⑨）に供されます。山野部のオトウ渡しでは赤飯のツキヌキが、薬師頭には白蒸しのツキヌキが準備されます。

かつて、徳畑・糀屋・曽我井・丹治・観音寺・豊部・岩座神でもツキヌキが作られていたと伝えられていて、杉原川流域に広がっていたことが分かります。ただ、このような直方体に仕上げる意味は、明らかではありません。



ツキヌキ用木製品（安楽田）

コメ粉団子

祭りにはお餅が供えられ、餅投げが行われる地区が多くあります。しかしながら、厳寒期の２月11日に行われる箸荷の百々手祭り（⑳）では、コメ粉で作られた団子が登場します。

祭り当日、まだ夜が明けぬ早朝に７人のオトウ人とその家族は、コメ粉を湯で溶いて練った後に蒸します。そして餅つきの如く、杵と臼で搗き上げ、丸めて団子が完成します。その量は、２斗１升もあります。

コメ粉団子は百々手祭りの本殿をはじめ小宮さんの神前に供えられ、オトウ渡しの祝宴に供されます。もちろん参拝者にも配られます。村のある人は、コメ粉団子は鍋や味噌汁に入れるととてもおいしいと、教えてくれました。

コメ粉だけに注目すると、門前のオトウ渡し（㊶）の直会には、味噌とコメ粉を団子状に固めたものが供されます。参列した氏子は、小さな竹製の匙で味噌とコメ粉を取りくずしながらいただきます。箸荷の百々手祭りのコメ粉団子が簡略化したものでしょうか。



団子作り風景



おへんの団子（箸荷）

ゴボウのはりはり

ゴボウのはりはりは、３斗６升分の餅を搗く加美区熊野部の１月のすべ切り行事（⑯）の休憩中に振る舞われます。さっとゆがいたゴボウを木綿豆腐で和えて、鷹の爪を加えたもので、ピリ辛の白和えといってもよいでしょう。古老の話ではかつては20㎝を超える長さのゴボウが、お当渡しに出されていたと伝えています。

町内の多くの行事の中で、かつてはゴボウのはりはりが供されていたことが伝えられています。



すべ切りの合間にゴボウのはりはりをいただく（熊野部）



ゴボウのはりはり

なな茶飯

煎った大豆を薄塩味で炊き上げたなな茶飯は、中区中安田の８月の数珠繰り（㊼）で地蔵さん・観音さん・お大師さんに供えられます。かつては数珠繰りに参加した村人になな茶飯のおにぎりが配られていましたが、時代の流れの中で現在はカップラーメンが配られています。しかしながら数珠繰りを担当した当番は、数珠繰り後になな茶飯をほおばりながらの慰労をすることになっています。もともとは、お地蔵さんに供えられた同じなな茶飯をいただくことで、まめな人になって達者でよく働くことを願ったのでしょう。

また、中安田の法幢寺地蔵盆では、参拝者が料理を持ち寄り御供えした後、皆さんでゆったりと話をしながらいただきます。こうした料理の中になな茶飯をみることができます。



数珠繰りの後なな茶飯をいただく（中安田）



地蔵盆での接待（中安田）

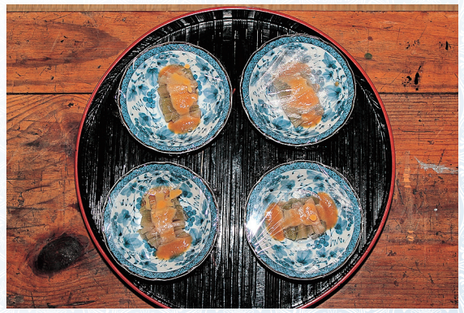
ズイキの味噌汁・酢味噌和え

ズイキの味噌汁は、中区西安田の10月の秋祭り宵宮における「丑の刻参り」の出立ちの膳の中で欠かすことのできない料理とされています。秋祭り前に収穫されたズイキの茎は、川で約１週間水にさらして皮をむきます。皮をむいたズイキの茎は鍋で煮て、冷水にとったものを味噌汁の具として調理して供されます。５人の祷人は、氏子が見守る中ズイキの味噌汁を含む出立ちの膳をいただいた後、郷社の中安田の稲荷神社へ出向きます。

ズイキの酢味噌和えは、加美区観音寺の10月のお当渡し（㊹）の直会に欠かすことのできない料理とされています。ズイキの味噌汁と同様、水にさらして灰汁を抜くなど、非常に手のかかる料理です。かつて、氏子全員分のズイキの酢味噌和えが用意されていましたが、現在はお当渡し終了後、新旧のお当人のみがいただくことになっています。

また、中区中安田の８月の法幢寺地蔵盆では、参拝者が料理を持ち寄って御供えした後、皆さんで

ゆったりと話をしながらいただきます。こうした料理の中に、ズイキの酢味噌和えをみることができます。



ズイキの酢味噌和え（観音寺）



西安田の丑の刻参りの出立ちの膳



ズイキの味噌汁（右下がズイキの味噌汁）

ピリ辛コンニャク

つやのある濃い暗褐色のコンニャクが、中区安楽田の９月のお当渡しの祝宴の席で供されます。三角形に切られたコンニャクは、大きな鍋で炒めて水分を飛ばした後に、甘辛く炊き上げ、最後に鷹の爪で辛さを調整します。膳に２人分の赤飯とピリ辛コンニャクをが納められ、氏子に配られます。安楽田では、お当渡しとピリ辛コンニャクは切り離すことのできないものになっています。（宮原）



オトウ渡しの祝宴風景



大鍋のピリ辛コンニャク

その他の行事

⑫加美区の天道花（かみくてんとばな）

天道花は高花ともよばれ、竹竿の先にシキビとツツジ等の赤花をくくり付けたもので、卯月八日（旧暦４月８日）に、各家庭の庭先に立てられていました。

５月８日（旧暦４月８日）に、豊部のさるお宅の庭には、竹竿の先にシキビ、ツツジ、シャクナゲ、フジ、ウツギ等の５種類の花が取り付けられた天道花が立てられます。竹竿の根元に、もう一組の花と水を張った盆が用意されます。





豊部の天道花

その花で盆の水を振りまきながら、「ムカデの神さん、ヘビの神さん…」と呪文を唱え、最後に盆の水で手を洗います。この家では、祖母の存命中は毎年続けておられ、虫除けの呪文だといって、家族の皆さんも盆の水で手を洗ってから、出勤されていたそうです。

加美区奥荒田にも、天道花を立てておられるお宅があります。花は約７種類で、基本はシキビと赤花です。水盆には米が入れられていて、「マムシに噛まれませんように」といって水を手向けます。当日は、家の仏壇にも７種類の花が供えられます。

加美区箸荷では、この日に、お墓に赤い花を供えるという風習が遺されており、かつては天道花とセット関係を有していたようです。

天道花の謂れ・意味は様々です。上記のように蛇除け虫除けの呪いのほかに、天道花にご先祖さんが降りてくる、天道花は天竺の方に向けて立てる、８日の午前中は鬼婆や花折り婆が出るので山に入ってはいけないなどの言い伝えがあります。また、当地域ではこの日を「花はじめ」といい、新仏のある家は寺参り（花祭り）や墓参りをします。このように天道花の謂れは、山（山の神）と先祖供養に関係していることが分かります。この日は、家々で祖霊や山の神を迎え祀る日だったのが、後に仏教的な花祭りの行事と融合したと考えられます。

（早崎・宮原）





奥荒田の天道花

調査年月日　2012・2013年５月８日
調査場所　加美区豊部、奥荒田、箸荷

⑬菖蒲の節句祭り

５月５日の子どもの日は、端午の節句といい、男児のいる家庭では鯉のぼりを上げ、鎧・兜や五月人形を飾って祝います。また、菖蒲湯に入ったりすることから、菖蒲の節句とも呼ばれています。旧暦５月５日（６月５日）に、今も昔のしきたり通りに菖蒲の節句祭りを行っているお宅があります。



菖蒲とヨモギの束を作る

節句前日の夕方に、菖蒲とヨモギを束にして、根元を菖蒲でくくったものを３束用意します。それを根元を上にして、家の入り口の屋根に投げ上げます。「菖蒲で屋根を葺く」というそうです。もう一つ、菖蒲とヨモギを適当な長さに折り曲げ、菖蒲でくくったものを作りお風呂に入れ、菖蒲湯をたてます。



菖蒲で屋根を葺く

夏の始まりで雨期に入るこの季節に、毒気を祓うヨモギや菖蒲を軒に吊したり身につけて、邪気や疫病を祓ったという年中行事は中国から伝わり、近世武家社会になって、菖蒲は尚武や勝負に通じるとして、武者人形や鯉のぼりが飾られる現代の形になったようです。

（早崎・宮原）

調査年月日　2013年６月４日
調査場所　加美区箸荷　藤本勝敏氏宅

⑭天田の数珠繰り

故人を偲ぶ数珠繰り

天田では、親族が亡くなった家で、忌中明けの法要の前に、隣保の人が集まって数珠繰りが行われます。

午後７時すぎ、量興寺住職と隣保の人々は葬家に参集し、まず、故人をお祀りしている祭壇に向かい、皆で般若心経を唱えます。そして、大数珠の周りに輪になって数珠繰りを始めます。輪の中心では、２人の先達さんが鉦を叩き、その鉦に合わせて節を付けながら南無阿弥陀仏と唱えます。皆で唱和しながら、時計回りに数珠を繰り、母珠が巡ってくると頭に掲げます。50個の玉を紐に通したものがあって、これで108回数えます。数珠繰りが終わると、皆で光明真言と弘法大師の真言を唱えて終了します。



葬家での数珠繰り

数珠繰りは、百万遍念仏といい、百万回念仏を唱える行法の一つです。宗教に関係なく村落共同体の儀礼で、素朴な庶民的信仰にささえられて民間に普及し、死者の魂をみんなで供養し、加護を求めたり、病気や災厄を祓う目的で行われます。

多可町では多くの村で数珠繰りが行われていますが、そのほとんどは８月のお盆の時期に集中し、ご先祖の供養のために行われます。天田では、近隣の人が、忌中間に数珠繰りをして、亡くなった方を偲び、供養して見送るのでしょう。（早崎・宮原）

調査年月日　2013年１月19日
調査場所　中区天田　個人宅

⑮天船の雨乞い踊り

雨乞い踊り

「秋の世の中よいように　雨乞い踊りをひとおどり」と謡いながら、円陣を組んで悠然と踊る風流踊りの雨乞い踊りが、八千代区天船地区（坂本・中村・横屋・下村）に残されていました。

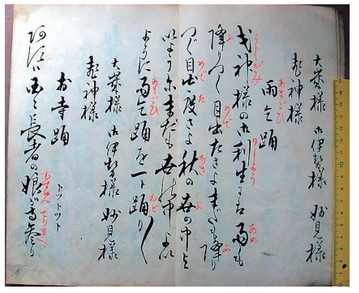
町内に残された記録によれば、上三原、山寄上、鳥羽、多田等の多くの地区で雨乞いが行われていた事がわかっていますが、雨乞い踊りが伝えられているのはこの天船地区だけです。

雨乞い踊りの復活

天船地区の雨乞い踊りは、百石踊りとも千石踊りとも呼ばれ、安政3年(1856)の音頭本の存在をみると、少なくとも150年以上も前から踊られていました。確認できる記録によれば、大正13年（1924）の大旱魃による雨乞い踊りを含め、６度なされたことがわかります。その後昭和９年（1934）と昭和16年（1941）に、伝統芸能として姫路市と西脇市で踊られました。

雨乞い踊りは、基本的に大旱魃時に村民総出でなされていましたが、農業技術の発達・灌漑設備の整備や社会的な環境変化に伴い忘れられつつありました。

こうした状況下の昭和47年（1972）９月２日に、八千代区横屋の大歳神社（貴船神社の御旅所）で雨乞い踊りが復活されました。下村が「雨乞踊」、横屋が「お寺踊」、坂本が「御屋敷踊」、中村が「金高踊」を踊りました。



雨乞い踊り音頭本（大正 13 年）

平成25年12月１日には、昭和47年の雨乞い踊りの８ミリ映像を映写し、雨乞い踊りを貴重な伝統文化として考える報告会が開催されました。この報告会において、有志によって雨乞い踊り







昭和 47 年の雨乞い踊り

の謡い等の実演がなされました。前回の雨乞い踊りから、41年振りのことです。（宮原）



雨乞い踊り報告会の風景

Ⅴ　西谷勝也がみた多可町の年中行事について

久下正史

西谷勝也（1906年〔明治39〕～1969年〔昭和44〕）は、兵庫県高砂市出身の民俗学者である。旧制大谷大学卒業後、高等学校教員をつとめる傍ら民俗学研究に携わっていた。早いものでは1937年（昭和12）に兵庫県内の昔話の報告[1)]や、加東市上鴨川住吉神社の神事舞の報告[2)]をおこなっている。1942年（昭和17）の柳田国男の講義録である『日本の祭』では、当時、精力的に祭の調査研究をおこなう人物の代表の一人として「播但各地における西谷勝也君」とその名があげられている。

戦後も兵庫県の祭礼や年中行事を中心に精力的な調査・研究をおこなっている。上鴨川住吉神社の神事舞や篠山市波々伯部神社のお山の神事など、西谷の研究によって世に知られることとなった祭礼は多い。1968年（昭和43）に刊行されたヤマドッサンや亥の子を研究した主著『季節の神々』（慶友社）は第８回柳田国男賞を受賞した。

西谷は、早くから調査に写真を用いており、年代が明確なものとしては1931年（昭和６）撮影の写真が最初のものとなる。その後、1968年まで、6500点余の写真を遺している。撮影写真の多くには詳細なキャプションが付けられており、民俗学上の貴重な資料であるだけでなく、兵庫県の高度経済成長以前の生活を記録したタイムカプセルともなっている。その一部は、小栗栖健治・久下正史編『ふるさとの原像―兵庫の民俗写真集―』[3)]に見ることができる。

本報告では、西谷が多可町内を調査した折に撮影した写真を掲載した。なかでもキツネガエリ・虫送りは、『季節の神々』の巻頭のグラビアに用いられている。

大屋　お当渡し　（多可町八千代区大屋　写真Ａ～Ｄ　1958年〔昭和33〕１月５日撮影）

写真A、写真Bは、大屋の鹿子神社でのお当神事。写真C、写真Dは「スズリブタ・ジョウトウバ」（島台）と呼ばれるお当神事の肴である。島台の鶴と亀、尉と姥は現在は陶器製となっているが、いずれも野菜や昆布を用いて作られていることがわかる。



A



B



C



D

キツネガエリ（多可町中区天田　写真Ｅ～Ｈ　1961年〔昭和36〕１月14日撮影）

西谷は、『季節の神々』（以下、引用は全て同書）で「狐狩り（かえ）　正月14日、子供たちが集まり“狐狩り候”と唱詞をとなえながら幣をもって村を廻る。但馬を中心に丹波・若狭・因幡・播磨北部地方の主として山陰地方に行なわれる、それは正月の神送りとも考えられ、あるいは村祈禱の修祓とも見られる」と述べている。

写真Ｅに「14本の幣を切って、子供たちがこれをふりながら田圃道を歩く。“ごかれ”ともいう。これは御嘉例の意であろう」、写真Ｇに「２本ずつ幣を村境につきさす。２人の子供頭の音頭で、“オロロヤ　トロロ、お前らそこで、何するものぞ、おおかみさんに頼まれて、キツネガエリ　ホーイ　ホーイ”と唱える」、写真Ｈに「藁をつんだづぼきの上で暴れまわる」、と解説をつけている。写真Ｆは、14日に組み立てられたとんどである。



E



F



G



H

田祭り（多可町中区牧野〔写真Ｉ～Ｌ〕・岸上〔写真Ｍ〕・天田〔写真Ｎ〕・鍛冶屋〔写真Ｏ〕
1960年〔昭和35〕７月10日撮影）

多可郡では田祭りが、夏土用前後の亥の日に行われた。田祭りとは、タマツリシバ（ススキ・栗の枝・オオギバなど）と小麦団子の焼いたものを家の庭や田に供え、旺盛な繁殖力を持つシバの植物と同じように稲のすこやかな生長と豊作を祈る行事である。但馬・播磨境の地域に分布している。

西谷は、多可・神崎・宍粟郡内の事例を調査し、特に、中区糀屋新田では、アマンジャク伝承を採集している。西谷は淡路の正月のヂノミと同様に、予祝行事と捉え、山の神を田の神として迎え、送り出す行事だと考えていた。



I



L



J



K



M



N

各写真には、それぞれ以下のような解説が付されている。

写真Ｊ　「七月初戌の日に、五種のシバを束にしヒョットデ（さんきらで包んだだんご）と共に、田の数だけ家の前の田に供える」

写真Ｋ　「翌亥の日の朝、田祭リシバ三束を田に投げすてる。」

写真Ｍ　「七月初戌の日に、五種の田祭リシバを田の数だけ、家の庭で田の方に向けて供える。小麦粉の菱形だんごは焼いてまつる。」

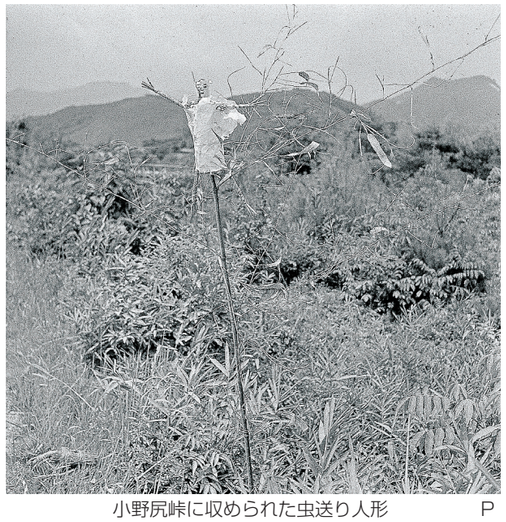
写真Ｏ　「七月初戌の日の夜、五種のタマツリグサを一年の月の数だけ前栽に祭る。菱形の小麦粉の流し焼を味噌をつけて葱と共に供える。」



O

虫送り
（多可町中区牧野〔写真Ｐ〕・天田〔写真Ｑ～Ｘ〕
1960年〔昭和35〕７月18日撮影）

虫送りは全国各地でおこなわれているが、西谷は、天田の虫送りを紹介し、「夏の土用に農村に広く行なわれていた行事であって、“実盛”の人形を稲の虫の霊とみたてて、これを村境から遠く国境へつぎつぎに送り渡していく悪霊送りの行事である。農薬が普及してこの行事も廃れてしまったが、これは昭和35年７月18日の記録であって、おそらく、この地方最後の虫送りであろう。」と述べている。



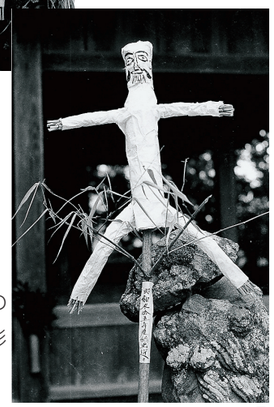
小野尻峠に収められた虫送り人形　P

1）「美方郡昔話」『昔話研究』２巻７号 等
2）「播州加東郡鴨川の宮座と神事舞踊」『旅と伝説』第10年10月号
3）神戸新聞出版センター、2012年



“さねもりさん”
という人形

Q



“さねもりさん”の
お供の人形

R



鉦・ほら貝・太鼓のはやし　S



加都良神社で五穀豊穣の祈願　T



麦わらの松明に神社の神火を点ず　U



夕暮の薄明の中を松明をふりながら田を廻る　V



W



村境で鉦・太鼓をならして松明を焼き捨てる　X

Ⅶ　おわりに

ここに『多可町の年中行事Ⅰ』の報告書を刊行することができましたが、今回の調査報告は村落単位での行事を中心に取り上げたため、神社に関する行事が多くなり、寺院関係の行事を取り上げることができていません。また、今回の報告書に掲載することができなかった行事が、たくさん残されています。そして、オトウ関係資料の文書調査報告は、一部に留まっています。今後さらに調査を進め、次回の報告書で掲載できるよう努めていきたいと思います。

多可町内には、わずか数世帯の徳畑から370世帯を有する集落の中村町まで、62もの村が存在しています。そして、それぞれの村での年中行事のあり方は、決して一様ではありません。私たちには過密と思えるようなスケジュールで、オトウ人を中心として粛々と行事をこなしていく村があれば、年に数度の行事だけを執り行っている村もあります。こうしたあり方は、それぞれの村の特性や歴史性を反映しているのでしょう。それは年中行事だけでなく、オトウのあり方にも反映しているものと思われます。

第Ⅱ章の年中行事調査表とオトウ調査表を見ていただければ、ここ数年間での変化を窺うことができます。それは年中行事の中に、ここ数年の間にいくつか執行されなくなってきているものがあることです。また、オトウの形態に目を向けてみると、一生のうち一度オトウを受ける一代当が、隣保で受ける隣保当や隣保から一人ずつ当番として選出される当番制になったりと、徐々に変わりつつあります。オトウ人だけで、神社の清掃や管理、行事等を取り仕切ることが難しくなったことを反映しているのでしょう。

こうした変化は、ここ数十年間の人々の生業のあり方の多様化、少子高齢化による人口の減少等に対応するための改変であり、激しい時代の流れの中で社寺や行事を地域で守っていくための方策として、やむを得ない対応と考えられます。年中行事を中心とする伝統文化は、伝統を維持して守ろうとする力と、時代に合わせた方向で変えようとする力のバランスの中で、今日まで継承されてきました。しかしながら、年中行事は形骸化が進行し、地域の特徴や歴史性を象徴している行事は消滅の危機にさらされています。

こうした状況の中で、私たちには何ができるでしょうか。ここで、年中行事等の伝統文化の社会的な役割を再考する必要があるのではないでしょうか。平成23年３月11日の東日本大震災で、東日本は甚大な被害を受けました。このような困難な状況の中での民俗芸能の再興は、地域の人々の心を励まし、勇気づけて、地域社会の復興に大きく寄与したことが伝えられています。このように、年中行事を含む伝統文化がいろいろな形で、地域のコミュニティの形成やその活性化の役割を果たし、また、この地で生活する人々のふるさとへの想いを醸造し、熟成してきたことは疑いないことです。

こうした点を考慮すれば、現在進行する急激な変化に対して、町内すべての行事を把握し、資料化して、その意味や歴史性を研究し、行事を担っている地域の方々に還元することが責務であると考えます。そのような意味で、本報告書はその端緒になることと確信しています。

調査に際しては、各村区長、宮総代、オトウ人の方々に大変お世話になりました。また、祭りに携わっている方々にも、直接・間接的にいろんな情報を提供していただいたり、便宜を図っていただいたおかげで、スムーズに調査を進めることができました。お一人お一人のお名前を上げることはできませんが、本報告書が年中行事の調査で出会ったすべての皆様のおかげであることを記して、最後になりましたが、心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

為後日初午定目依而如件

文政六年
未二月日
下曽我井村
年寄　新五郎　印
同断　重兵衛　印
庄屋　新太郎　印

大年大明神
正一位大明神

【文政六年（一八二三）に村方三役が大明神に対して約束した文書である。内容は明らかでないが、『九定』とともに、オトウ渡しにおいて象徴的な役割を果たす扇子に挟み込んであることから、初午当として重要な内容の取り決めが為されているものと推定される。】

十一　永代當々受人名帳

昭和十五年二月改正
永代當々受人名帳
昭和四十六年改正
○
改正要項
イ、従前ノ御當ヲ永代當ニ改ム
ロ、當人ハ参名トス
ハ、手伝人ハ従前通り一戸当リ参名宛トス
ニ、神棚設リハ向フ三軒両隣ニ於テ手伝フコトトシ
御神酒ハ一升限リトス
ホ、當アタリ祝ノ挨拶廻リハ廃止ス但シ向フ三軒両隣ハ此ノ限ニ非ズ
ヘ、當渡当日ハ太鼓ラ合図ニ一戸一名ハ必ズ倶楽部ニ参集スルコト、午前十一時フレ太鼓、正午十二→時式を開始ス
ト、當日ノ振舞ハ一人当リ酒二合、ツキヌキ二合ト→シ、肴ハ持参ノコト
チ、當日止ムヲ得サル差支ノ為、不参スル人ニハ振→舞ヲ渡サザルコト
○
リ、當日神官ヲ祭主トシ、国運隆昌ト、當村出身出征将兵武運長久祈願ヲ行フ
ヌ、最近五ヶ年以内ニ量當及本當ヲ済マシタルモノハ→抽籤／ヲ五ヶ年後ニスルモノトス
ル、不参者有リタル場合ノ抽籤ハ、区長代理ニテ行フ
附則
一、女家族ノ家ハ男ノ出来ルマテ籤ヲ抽クコトヲ延→期ス（男子十四才迄）
ニ、入営兵□□出セル家ハ、抽籤セサルコトヲ得
三、御當数日前什長会ヲ開キ、止ムヲ得サル事情ノ→為御当引受／困難ナル家ヲ協議シ其家ト交渉→ノ上抽籤可否ヲ決定ス
四、「御シントウ」ハ一切廃止スルコト
五、本村へ寄留シ正式ニ手続ヲ経タルモノハ御當入→リヲナスモノトス
○
六、抽籤招集ノタイコハ午後三時、抽籤開始ハ午後→四時トス
本則ハ昭和十五年度當人ヨリ施行ス
昭和十五年二月二十二日初集会ニ於テ決議ス
曽我井区長印
昭和十五年度當人
マト當　高見徳治
アサ當　大西直治
アイ當　時政善次郎
伝
昭和十六年度當人
マト當　桑村長作
アサ當　大西朝治
アイ當　徳平豊
○
―中　略―
○
昭和四十六年ヨリ隣保當トナル
（改正要項ハ別冊）
一、昭和四十六年　十三組
二、〃四十七年　十四組
三、〃四十八年　四組
四、〃四十九年　三組
五、〃五十年　六組
六、〃五十一年　一組B
○
―後　略―

【昭和十五年（一九四〇）の日本が戦争に邁進している最中の世相を反映した文書で興味深い。昭和四十六年（一九七一）には、一代当から隣保当に改正されたことが記されている。】

③八千代区坂本　お当事箱内文書

一　大般若講日記

大般若講日記
壱番　林右衛門
弐ばん　茂□
三ばん　□兵衛
四はん　伊右衛門
五ばん　□次郎
六ばん　源右衛門
七ばん　庄兵衛
八ばん　勝四郎
九ばん　仲右衛門
十ばん　孫兵衛
十一ばん　□次郎
―中欠落―
廿八ばん　弥左衛門
廿九ばん　善助
三十ばん　和七
三十一ばん　勘左衛門
三十二ばん　藤右衛門
三十三ばん　次郎兵衛
三十四ばん　幸七右衛門
三十五ばん　伊兵衛

三十六ばん　万蔵
三十七はん　源三郎
三十八ばん　金助
三十九ばん　□□□
□太郎
四□□番　小三郎
萬延二酉正月十八日
九左衛門方ニ□籤引き

【萬延二年（一八六一）に、大般若講のオトウ人の順番をくじ引きよって決定した文書である。】

三　宮當行日記

宮当行日記
大正弐旧九月
壱番　森井喜市郎
弐番　繁縄亀松
参番　柴田林右エ門
四番　京崎貞治郎
五番　繁田熊治
―中　略―
三拾一番　森位定吉
三拾二番　松田庄三郎
三拾三番　藤井伊太郎
三拾四番　森位愛太郎
三拾五番　京崎安蔵
明治三拾五年旧九月籤取

【『一　大般若講日記』によるオトウの順番が一回りしたため、明治三十五年（一九〇二）に行われたくじ引きによるオトウ人名簿である。】

四　般若當規約

般若當規約
○
般若當規定
一、當ノ席場ハ坂本公会堂ヲ以テ之ニ充テ其ノ献立ヲ左ノ如ク相定ム
一、飯ノ焚量ヲ白米壱斗トス
一、平椀ハ油揚、ぞいも、蒟蒻ノ三種／トス
○
一、引物ハ蒟蒻白あへ、芹焼、牛蒡ノはりはりノ三種トス
一、酒ハ坪椀ニ壱杯宛ノ事
二、切リ刻ミノ手傳トシテハ當家ノ各方ヨリ弐人以下ト制限ス
三、送リ膳及ビ跡客等ハ堅ク禁止
○
ノ事
四、料理物ハ一切送ラサル事
五、當部落ヨリハ用米トシテ玄米弐斗ヲ當番へ相渡ス事
六、其ノ他一切ノ費用ハ全部當家ノ／負担トス
○
右堅ク相守リ可申候事
大正拾四年旧正月十六日
當部落総会ニテ相定ム

【大正十四年（一九二五）に定められた規約である。全体に質素にすることが定められている。】

六　般若当番等順番表

昭和六十三年一月改
般若當々番順
壱番　繁田善三／　弐番　京崎次郎
参番　松田敏明／　四番　京崎　一
五番　松田克義
―中　略―
参拾九番　中塚　勝／四拾番　松田雅之
平成七年より
四拾壱番　西浦清志
平成十五年より
四拾弐番　繁縄宜伯
平成十六年より
四拾参番　宮地正俊
○
昭和六十三年一月改
宮當々番順
壱番　繁縄儀一／　弐番　松田市治
参番　繁田弘己／　四番　松田利信
五番　森位正己
―中　略―
参拾九番　中塚　勝／　四拾番　松田雅之
平成七年より
四拾壱番　西浦清志
平成十五年より
四拾弐番　繁縄宜伯
平成十六年より
四拾参番　宮地正俊
○
昭和六十三年一月改
宮當行順番
一番　柴田節雄／　弐番　松田利信
三番　京崎次郎／　四番　森位晃三
五番　繁縄玉保
―中　略―
参拾九番　中塚　勝／　四拾番　松田雅之
平成七年より
四拾壱番　西浦清志
平成十五年より
四拾弐番　繁縄宜伯
平成十六年より
四拾参番　宮地正俊

【当文書には若宮神社のオトウの「般若當々番順」、郷社貴船神社のオトウの「宮當々番順」、貴船神社の祭礼での役の「宮當行順番」が綴られている。】

九　旧当主ハ盃ヲ改メテ新
当主ニ献ズ新当主ハ
受ケテ旧当主ニ返盃
肴ハイリ少シ
謡曲アリ
一〇宴会
右盃ニテ献酒
一一取ノ杯
宴会中ニ一同ヘ中盃ニ
テ廻ス事
一二取分ヶ盃
中盃二ヶヲ出シテ客ノ指
揮ニテ之ヲ献ズ
一三右終レバ膳ヲ引キ茶
ヲ吸シ一同起立
一四新当主ハ御当具御神体
ヲ捧持シテ一同見送リ
ヲ受ケテ新当屋ヘ
〇
御送リスル事
次ハ新当屋へ着
神宮ノ祭詞奏上アリ
茶ヲ戴キテ随意
解散

【昭和十六年（一九四一）の新トウ人としての一年数ヶ月の記録である。オトウを受けることによって必要となる経費を補填する講田を鋤くことから始まっている。また、オトウ渡しの次第も記されている。】

十六　大歳神社当連中年中諸行事日誌

昭和拾八年十二月三十一日
大歳神社
年中諸行事日誌
当連中

石塚亀蔵

藤永喜六
当主藤永芳太郎　祐尾遠治
石塚忠平
〇
―中　略―
〇
御当準備　日記
二十八日　女共集リ米洗ス
二十九日　昼食後一同参集ス
入木　御宮ノ掃除ス
三十日　藤永喜六　祐尾遠治
早朝二名御当フレ
村上神主へ石塚利郎招持ニ上ル
ツキヌキ　モチツキ　午後倶楽部祭場
建設ス　供物其他ノ準備ス
給仕人　小学生　七人ヲ依頼ス
高一　高二　男生丈ヲ頼ム
〇
一戸宛五分宛
御当米　弐斗一升
連中ヌキ四十弐戸
外ニ　アズキ　三升ヲ加工
ツキヌキ　五十五個ヲ作ル
（（石塚基氏不参）客四十八給仕七人
六升　延餅　五十五ヶ
神殿供物鏡　二個作ル
（連中一人　一升弐合　集ム）
外ニ連中食材料（米其他　茶材料）
取集メ会食ス

【「十五　氏神当番連中行事日誌」とほぼ同じ内容が記されているが、最後にオトウ渡しに際して、ツキヌキやモチを拵えるために二日前から準備にかかることや、給仕人に小学生に依頼していること等の記載があり、興味深い。】

②曽我井　お当事箱内文書

一　覚

覚
初午道具扣
一、椀百三拾人前　有
一、析敷　三束　有
一、酒桶　三尺　弐本有
一、神酒桶　弐つ　有
一、食次　弐つ　有
一、食斗　弐つ　有
一、ぬり食次　壱つ　有
一、送膳食入　三つ　有
一、酒枡　弐つ　有
一、食取桶　壱つ　有
一、長し　壱つ　有
一、元半切　弐枚　有
一、金とうろう　壱つ　有
一、米洗桶　壱つ　有
一、食入桶　壱つ　有
一、大こ　壱つ　有

初午当人より
正月十一日入用
一、よいとう人より白米三升つゝ
并銀壱匁指出可申候

一、朝当人より何方ニても
寺より御出被成節雑用
可致候且シ毎年当人
より
右之通相心得可申候
以上
明和五年

子二月　吉日
下曽我井村中

【明和五年（一七六八）に、曽我井では、オトウは初午当（講）と呼ばれている。】

二　初午講定

初午講定
一、御当あたり候節村方へ
御酒披露メ致事無用
一、翌年当分ニ御酒口明ヶ献候
事無用也
一、御当相納候而後日ニふる
まい仕候義無用之事
一、御当ニ料理之次第
みそすまし
鰌　大こん　汁　こほう
くしら
大こん少シ
焼物中このしろ御食
引ニ
こほうはりはり
但シ長サ弐寸
一、しゆんかい　一へん
御酒
三献
御酒キ
取ノ盃ニ而くわへ
メ五献
一、右椿ニ参候事　一家中
寄合こしらへ可仕事
〇
右之通講中相談之上
ニ而相究申候以上

安永九年
子年初リより

講中
銘々

【安永九年（一七八〇）の定めで、前半は接待等を戒め、後半にはオトウ渡し時の献立が決められている。】

四　講中名簿

嘉永三年
初午講中（貼紙）
戌二月吉日改メ
一、新□□
一、栄吉
一、庄吉
一、忠吉
一、喜市郎
一、重兵衛
一、治助
一、九助
一、林助
〇
一、為蔵
一、吉次郎
安政六未当入
一、千代蔵
安政七年申年入
一、新之助
一、友助
一、孫五作
一、彦太郎
一、丈太郎
一、岩吉
万延弐年酉年入
（貼紙）
一、徳太郎
一、□□□
一、藤助
〇

文久弐戌二月
一、新之助
一、□□
一、清吉
一、庄蔵

【嘉永三年（一八五〇）から文久二年（一八六二）までの初午当の入構帳である。このような講中名簿は別に二冊存在し、明治五年（1872）まで記載されている。】

九　定

定
毎年初午御当
村中立会致拵講中
無申分相勤可申候
万一妨族を申当屋へ
持掛指支ニ罷成候者ハ
有之候ハ講中として
相除講相勤可申事

寛政四年
子二月
講中

【寛政四年（一七九二）に、オトウ関係で何らかの妨げを為すものを除籍することを定めている。扇子文書である。】

十　初午定目書之事

初午定目書之事
一、当村初午の儀ニ付家主又ハ若連中共
不浅筋又ハ外□いんさな持出候之
其之時村役人より差出し候ハバ講中
立会そうだんの上六人とも相除由
状渡仕候其時□れ□件加もの
筋ニ而いこん申分無御座候

二十八年より福田新田
二十一才　足立長蔵
本郡熊野部村／二十一才　矢上重太郎
因幡国知津郡芦津村
亥年廿才／武田定蔵
同村
○
因幡国知津郡／中原村
子年十九才　岡田留三蔵
子年十九才　藤□常蔵
－後欠－
○
藤永仁兵衛
藤井治兵衛
宮當連名　大矢　金治
井上　仁作
柴田　兵市

【明治二十七年(一八九四)は、日清戦争が勃発した年である。朝鮮半島おける清との主導権争いの中で、戦争への機運が高まった時期に、山野部の大歳神社に祈願した名簿である。記載の住所が、村外であることに注目すべきであろう。】

十二　氏神当番組合記

明治廿八年正月吉日
氏神当番組合記
○
廿九年分／吉井松之介／藤永伝兵衛
－中略－
○
明治三十年正月初参／会之節例年氏神
当送り儀式改正／条項左ニ記ス

一　第壱条当番こやか／け等ハ其連中限トス
第弐条　振舞之義ハ末／盃ニテ御酒壱献、次ニ／中か
さ壱献、次ニ弐合／徳利壱本、こわめし／壱膳、味
噌しる弐膳、す／い物ぶり入壱膳ニテ相／済マス事
但祝物ノ義ハ従前之／通、いりしゃこ引物ハなし
第三条　給仕人ハ其連／中之内ニテ仕用スル事
第四条　薬師堂其外／諸当ノ分ハ其当番組合／限りト
ス
第五条　連中ノ内他より一切／遣物致間敷事
○
第六条
一　当渡義式従前之通／肴トいりしゃこヲ以テ／相
済マス事外品ハ一切／□出間敷事
第七条
一　毎年当送リ之節／講金トシテ壱人前五銭／宛
出金持参スル事
第八条　其当番之者玄米／五斗村方へ持参ノ事
但明治三十年分ハ玄米／四斗トス
第九条　請取方ノ義ハ／末盃ヲ以テ一盃限り／出ス
事、肴ハ唐からしの／大根あえニテ相済マス事
第十条　徳利買入ハ本年／分ハ講金ノ内ニテ買入ル事
但、年ニ損失シタル分ハ其組合／より自弁ニテ買入
ル事

【明治三十年(一八九七)にオトウ渡しについて改正された。具体的に儀式の内容について記されており、興味深い資料である。】

十四　年中行事日加恵帳

昭和拾壱年
年中行事日加恵帳
十弐月三十日

年中行事
拾弐月三十日　御幣切御当主ヲ招
奉書大二枚重ネ　御幣九本
此内本殿ニ二本納メ
本殿ノ拝柱ニ　二本
随神門ニ　四本
当屋ノ床ニ　一本
奉書一枚　拾弐本
広峯神社　一本
山王神社　一本
大神宮　一本
三　社　三本
妙見社　一本
秋葉社　一本
稲荷神社　一本
同　奥社　一本
外　末社　一本
但シ妙見社跡　一本
半紙一枚　拾弐本
常楽寺拾弐社権見奉納
○
半紙四ッ切　七拾弐本
妙見堂岩ニ　奉納
拾二月三十一日　オハケ様立
一月二日午前　薬師堂御当
糯米五合ノツキヌキ　二個
オヘン二個　新調
供物、ゴボー人参大根切柿栗
一月拾七日　綱打
神主招ク　清メ花五十
旗三十本
酒壱升　洗米
三月廿九日　当屋掛ヶ
新当主ヲ招ク、酒ニ菓子腕
御当ノ膳組
旧五月節句
同六月拾二日夏祭
同八月六日村祈□
祭り
旧初午
○
藤岡喜代治

【昭和に入ってのオトウ行事を窺うことができる。一

月に綱打神事が初めて看取できる。】

十五　氏神当番年中行事日誌

昭和拾六年拾貳月参拾壱日
氏神当番年中行事日誌
当主　石塚用蔵
藤岡喜代松
藤本角治
祐尾粂太郎
□□□之助
○
十一月二十三日　講田スキ
連中全部出役、一日ニ片附ク
夕食一同　当主候補者ヨリ賄フ
酒一升　簡単ナル菓子椀
ニシメ　味噌汁　御飯
小イ　ヤキモノ
十二月三十一日
当主候補者ハ御幣切ノ為ニ
前□ノ招キニヨリ当屋ニ行ク
新当屋ニ於ニハ午前九時ヨリ
四人ノ連中居残リテ門口
ニメナワヲ張リ庭ニ　ヲハケ
ヲ建ツ
昼食ヲ出ス
酒一升　御飯　味噌汁
ニシメ　小ナル　ヤキモノ
新当主候補者ハ当屋ニ行
キ御幣切ニ従事ス
奉書大二枚重　九本
〃　一枚　十二本
半紙四ッ切　七十二本
コレハ妙見岩ニ供ヘル
半紙一枚　十二本
十二社権現ニ供ヘル
当屋ニテ昼食ヲ頂ク
酒一升　御飯　ニシメ　味噌汁　ヤキモノ
○
当屋連中五人ト供ニ　幣
入レ替ニ参拝ス
二枚重　本社へ弐本
御拝柱　二本
随神門　四本
当屋ノ床ニ　一本
一枚重　広峰宮
山王社
金比羅社
三社稲荷（三本）
妙見社
秋葉社
稲荷社
〃奥ノ院
十二社権現
妙見岩
新当主候補者ハ十二月三十一日
朝ヨリ七日朝迄毎朝水行
ヲナシテ氏宮へ参詣ス
午后七時ヨリ新旧連中十名
打揃ヒ氏神へ参詣シテ石
拾ヒヲナシ午后九時帰宅ス
十七年一月元旦盛装シテ参拝ス
一月二日
新御当主ハ当屋へ行キ薬師堂ノ御当
ニ行ク　花ケズリ
○
半紙ノ面　三枚
キネ　三本
花及ゴーズイ　十ヶ作ル
五合取リ白ムシ　二ヶ
新調ノヲヘギ二個作リ薬師
様ニ供ヘ　一ヶハ檀中惣代
一ヶハ新当主ニ頂ク
花及メンヲ七夕竹ニツケテ
供ヘル
大根イモニンジンゴボウノ切ヲ竹ノクシ
ニサシテ供ヘル
三月三十一日早朝ヨリ揃イテ当受ケ
ノ準備ヲナス
門口ノ七五三庭ノヲハケヲ直シ
供物ヲ五品ナシテオク
お堂ニ行キ、当渡シヲスマセ宴会
終り　新当主ハ御神体ヲ奉シテ
帰ル　いしヨリ一同礼拝シテ
茶一杯宛吸ミテ帰宅シテモラウ
翌日旧当屋ヨリ祭器其他ヲ受取ル
旧ノ連中へお茶ヲクム
○
御宮当式典順序
一　祭神式　神官祭詞奉上
玉串奉典
二　一同着席　膳ヲ据ヘル
膳ニハ　ツキヌキ　ヘギ餅
大根ナマス　イリ二尾　大豆二ヶ
三　現当主挨拶
膳ノ上ニ落物がアリマセヌカト
若シアリマシタラ直ニ御知ラセ
下サイ　ト尋ネル事
四　洗米御供ヲ一同へ
廻ス事
五　御神酒ヲ一同へ廻ス事
冷酒ニテ神前ノ御酒ヲ加フル事
六　中盃ヲ一同へ廻ス事
但シ温酒ノ事
七　現当主ノ挨拶
比場ニ於テ　御当渡シヲ
勤メサセテ戴キマスト
○
八　新当主ノ挨拶
連中一同揃ヒ次ノ当番ハ
私等ガ勤メサセテ戴キ
マスト

はな　九つ
ごうづへこしらへ申事
みき　せんまい／おんとうめう／うちまき　壱升
是ハ寺へ納り
○
同断
一、ちんじゅけひゃう壱重
右の通り
けひゃう壱重寺へ送り
ますもり壱つ　同断
ますもり壱つ
是ハさきの当人へおくる
其外残り当元へかへり申候
正月六日
一、地蔵当　御くふ三升取
けひゃう　壱重奥院そなへ／申候
一、はなもり　弐つ
一、ますもり　弐つ
一、めん　六枚
一、きね　六つ
一、はな　六つ
一、みき　せんまい／御とうめう
うちまき　一升／　寺納
○
一、ますもり　壱ぜん
さきの当人へおくり申候
其外のこり当元へかへり
一、正月十七日村惣祈祷
於明神
一、御みき　御くう
一、御せんまい　御とうめう
一、うちまき　壱升
是ハ本の当役へかへり申候
一、米三升　御ふせ
一、かいた弐丈　御へい紙
のこりわ十七日の札紙也
右之外　諸道具／有之候　覚

○
一、当文箱　壱つ
一、御供入重　壱つ
一、御洗米入　壱つ
一、御神酒鈴　壱つ
一、油つぎ　壱つ
右四いろ家ニ入置之候
一、御供ばち　五重
一、酒桶　壱つ
一、枡もり枡　壱つ
一、黒椀　五拾人前
但家弐つ入置
一、はち　壱つ
○
一、さかづき　四つ
一、たいこ　壱つ
右小道具之分長持ニ入有之
此外ニ
一、諸事付込帳面　壱冊
一、神酒鈴　大壱対　御本社
中壱つ　南末社
是ハ御宮ニ有候
天明七未十二月求ル之
右ハ往古より帳面／御座候
○
元文三午年より帳面仕替
不申帳面古ニ相成候
安永二巳年八月改有之
候得共年久敷仕替不申
候ニ付比度相改帳面
仕替置者也
文久三癸亥年
正月吉祥日
播磨国多可郡山野部村
御宮当人中

【最後の書付より、元文三年（一七三八）、安永二年（一七七三）と引き継がれた帳面を文久三年（一八六三）に書写された帳面であることが分かる。内容的には、現在の行事と比較的できる部分が多く興味深い。】

五　御宮当格定

‐前略‐
安永二年／巳八月
山野部村
御宮當人中
○
右之通くじ取仕組相
定来午年より順々ニ相勤メ
可申候事
一、御宮當勤様次第
覚
一、酒先覚之通り酒つき□／ごこん
一、取肴右同断ずいき／大根
右之通り相定り申候以上
巳八月日　當人中

【『当村御宮当并妙見地蔵薬師当諸道具〈記』の元本となる文書であるが、この文書の最後に、當勤様次第が付け加えられている。】

八　御宮当勤方定

御宮当勤方定
免し□□　目方三貫目
酒五度
取免し椀次目なし
とふしる　すしたい
一、椀物是迄之通り
一、ごんぼはりはり
一、ずいきのあえ物
一、大こんのみそあへ
一、にしめ

右の通りニて　御勤可被成様
当郡中
明治十年　正月晦
当連中様
○
こわいさこなし
もちハへぎもちなり

【明治十年（一八七七）に、村から当連中に提出されている。何らかの儀式（オトウ渡し？）時の献立の確認文書であろうか。】

九　御当之儀定

御当之儀定
祝金ハ拾銭上納致事
一、酒用料　手造ニテ相勤
一、祭禮引出酒　一切不出
一、糯米五合　壱戸毎ニ出ス
一、□ノ□　一切不致
其外従前之通リ
右之通り村中一同協議之上相定
堅相守可申候也
明治十八年二月
丙壱番ヨリ

【明治十八年（一八八五）のオトウ関係の定めである。十銭の祝金は、新トウニンに収める金額であろうか。】

十一　当社兵士願主覚帳

明治貳拾七年
当社兵士願主覚帳
正月吉日
○
因幡國八上郡
船岡村／　橋本寅蔵
九野治村／　足谷馬蔵

村上石蔵
石場清蔵
奥谷村／福田光蔵
大江下野村／大西勝太郎
同村　浦林勝蔵
同村　浦林民蔵
知津郡大ろ村／五拾七

三年間氏中
丹波國氷上郡和田村／　字富田村
橋間亀太郎
加西郡野上村／伊藤亀太郎／三年
○
本郡山口村／高田興作　三年間氏中
鳥間村／　古屋弥蔵　同
五のセ村／　廣中廣太郎　同
豊部村／　梅田敬太郎　同
同　村／　寺尾徳治　同
同　村／　高尾達蔵　同
下一原村／　村山李蔵　同
天船中村／　棚倉弥三郎　同
的場村／　梨木金治　同
同　村／　達井權治子　同
天船下村／　玉臺久兵衛　同
平野新田村／
○
丹波国氷上郡
小野ぢり村／宮崎秀之助
大袋村／　中道芳太郎
大屋村／　市井元市
奥中村／　山本三治
明治廿七年間三ヶ年氏子
西脇村／　徳岡喜市郎
〃　三ヶ年間氏子
同　村／　足立栄三郎
〃　三年間氏子頼子
因幡国知津郡／中原村
富三蔵

丹波國氷上郡／村森村
村上寅之介
多可郡清水村／　足立源治
亥年
天船坂本村／　繁縄善吉
熊のべ村／　栄吉
明治廿八年之間
三谷村／　久保田八治
宇高源蔵
栄五郎
内倉吉
因幡国知津郡
大ろ村／五拾七番地
大ろ喜蔵／廿一才
同　村
○
同苗　土蔵／　十八才
〃　村／〃苗　重治郎／　廿才
足津村／　□木定吉／廿才
本郡多田村／　古家福松／廿才
大屋村／　二十才　市位久吉
二十一才　市位圭太郎
下市原村／一、二十一才　杉原久太郎
中三原／一、二十一才　上田忠太□
加西郡山田村
一、二十一才　遠藤十□□
○
廿八年　加西郡山田村／一、二十一才　奥畑安太郎
〃　本郡的場村
一、二十才　□田長吉
〃　西脇村／一、二十一才　足立□治
〃　加西郡野上村／二十一才内藤□治
〃　貴船村／　二十一才宮崎松蔵
〃　大畑村／二十一才
〃　下市原村／二十一才　村井龍太郎
二十八年より福田新田
二十一才　稲川瀧吉

Ⅵ　オトウ関係資料

当町のオトウには、一般にお当事箱若しくはお当状箱と呼ばれる木製の箱が、神聖なるものとして大切に扱われている。この中には、お札が収められていたり、近世から現在までのオトウ人の名前が記された文書が収められていたり、オトウの行事次第が記された文書等の多様な資料が残されている。

これらの資料は、村人がどのように共同体を維持しようとしたか、またどのような行事や風習がなされていたか等、当時の社会的な状況を窺うことのできる歴史資料として非常に興味深い。ここに、調査が終了した「お当事箱」内の資料の一部を紹介しておく。

凡例

・「／」は、原本では改行されていることを示す。
・「〇」は、原本の長帳の頁が変わったことを示す。
・「↓」は、原本では改行なく続いていることを示す。
・「□」は、判読不明の文字を示す。
・翻字に際して理解しやすいように、報告者の判断で「、」を加えた。
・資料番号は、調査時に付したものを提示している。そのため欠番となっている場合もある。
・変体仮名はひらがなに変換し、必要に応じて句点・西暦年号等を挿入した。

①山野部　お当事箱内文書

一　御宮当籤引覚帳

文政二年　　山野部村
御宮当籤引覚帳
己卯十一月吉日　当連中
〇
覚
一、神田作方定
一、八月当　御へい切り
御へい切様
一、大へい弐本　御本社ニ納
但かいた　拾弐枚切り
へいぐし、三尺ぐし
〇
一、大へい壱本南ごづ天王
但半紙　拾弐枚切り
へいぐし　見合
一、小へい拾弐本社内へ訳
但半し　弐つおり
内四本　南ごづ天王
四本　北四社明神
弐本　山之神納
弐本　両門丸ニ壱本づつ
〆
一、同三本　当人之門ニ立ル
但半し六枚切り
まきわらニさし御はけ様
右も八月当拵へ
うちまき　壱升
御ふせ　壱匁
住寺　進上仕候
〇
小ノ月ハ二八日ばん参り成り
一、同二九日ばん御くふ六升取
但御本社へ切御くふ
十二づつ御ぜんニもりそなへ
申はつ
うちまき　壱升
そなへ申計り
是ハねき方へおくる
みき　せんまい　御とうめう
一、ごづ天王　切御くふ
六つ御ぜんニもりそなへ申
一、まっしゃ　切御くふ
弐づつ御ぜんニもりそなへ
門丸共同断
一、三十日あさ　御くふ／七升取
但そなへ様ハ右宵の通り
〇
宵あさとも　うちあげの
もちかならず致へき事
御当晦日九つ時
一、御みき　御くふ　くり　かき
まめ　各々ちょうだい仕候
九月九日
一、御祭禮　御くふ／白米三升
但八日之ばん赤飯ニして
そなへ参詣の者へ頂戴可仕事
みき　御くふ／御とうめう
大小八月の通り
十二月御へい拵へ覚
一、大歳大明神様賜而　社内
八月之通り御支度ニ
〇
此外
一、妙見様大へい壱本
是ハ半し十弐枚切り／奥院ニ納
一、同小へい七拾弐本
半し弐つ切
内　弐本　本社ニ納
七拾本　末社ニ納
一、薬師当小へい　七本
権現様ニ納
一、地蔵当小へい　弐本
おくのいんニ納
十二月弊数合　大七本
小九十三
うきまき　壱升
御ふせ　壱匁
〇
みき　せんまい／御とうめう
住寺時進上仕候
右　延享年中之帳面ニ候
弊支度可見者也
一、十二月大晦日ばん
御くふ／六升取
但本社壱社へ切御くふ
十二づつ御ぜんニもりそなへ申事
うちまき　壱升
是ハねき方へおくる
みき　せんまい／御とうめう
一、ごづ天王　切御くふ　六つ
御ぜんニもりそなへ事
一、まっしゃのこらず
切御くふ二づつ御せんニ
もりそなへ申事
〇
一、正月朔日御供七升取
そなへ様ハ右同断
外二
御本社へ加かがみ　弐重
ごづ天王へ同　壱重
右元朔日之分いわいもの／添申候
右之外切御くふうち上ヶ
之もち本社の屋ねへうち
迎致はつ此ぎしき夕朝共／同断
一、正月三日妙見当
一、御くふ　白米三升
かかみ弐重壱重づつ
本社おくのいんニ
〇
うちまき　壱升
みき　せんまい／御とうめう
右三升ハ七十二ニ取候
一、正月四日　薬師当
御くふ　七升取
薬師けひゃう　三重
ますもり　三つ
はなもり　三つ
めん　九枚
きね　九つ
宮田来辰より拾ヶ年極
一、小作年貢　壱石弐斗八升
小作人六郎右衛門
右年貢米其年々之
当元へ計渡筈
一、講田ハ其年々之
当元支配之筈
右ハ卯十一月二日順当
籤取之節惣当連
中立合相談之上相
極メ申候
【文政二年（一八一九）の資料で山野部村には小作人が管理する神田と、お当人が直接管理する講田が存在したことが分かる。】

二　御宮当覚帳

嘉永五年子正月晦日廻神主半兵衛殿ニ↓
御宮当覚帳
来ル寅年従始り　当村氏子中
〇
御宮当検約取定メ／左之通り
一、御くう仕来り通り
一、酒仕来り通り次目なし
一、吸物之義ハ仕来り通り
但し味噌汁とうふニ而取極可申事
一、村方従送り肴奢
ヶ間敷硯ふた抔一切送り申間敷候事
何成共有合物ニ而取極可申事
一、当送り之節ハ先当人
斗ニ膳歩致外々奢ヶ間敷
膳歩抔致間敷候事
〇
一、御当之□□料理人
抔検約可致事
外々多分の手傳願
申間致事
一、席ニ而口論致間敷／候事
付タリ
但し無人の当連中
ニ相当り候節手傳相願
候共其日限と相済し
跡ニ而禮客抔致間敷候事
右之通り村中相談之
上検約ニ相定メ可申候
右之条々急度
相守可申事
〇
右者
御代官
川上金吾助様
御趣意ヲ以右之通り
検約取極メ申候以上
【代官の川上金吾助の倹約令のお達しに際して、嘉永五年（一八五二）に村中で取り決めた倹約取定書である。】

四　当村御宮当并妙見地蔵薬師当諸道具記

文久三癸亥年
当村御宮当并妙見地蔵薬師当諸道具記
正月吉祥日
播磨国多可郡山野部村／氏子中
〇
目出度付始メ
一、御宮当格定メ
一、正月朔日より七日之間／参詣仕候事
一、毎月朔日参詣仕候事
ずいぶんしょうじんして、
みき、御くふ、
御せんまい、御とうめう
大ノ月は二八日／小ノ月は二七日

多可町文化財報告23

多可町の年中行事I

２０１４年３月
発行　多可町文化遺産活性化実行委員会
〒679-1113 兵庫県多可郡多可町中区茂利20番地
TEL.（0795）３２－２３８５
印刷　ウニスガ印刷株式会社

■データー　紙質　表　紙　アートポスト　220kg
見返し　色上質 藤色 特厚口
本　文　ニューエイジ 57.5kg
文字　モリサワ　14級
写真　スキャナー分解
製本　無線トジ



安楽田　荒田神楽



中野間　貴船神社　御旅行列



清水　西宮神社　オトウ渡し